序

津山市の総合計画には、「史跡津山城跡」の保存整備事業、「美作国分寺跡」および「日上天王山古墳と日上畝山古墳群」の史跡指定事業の、三主要事業が取り上げられております。いずれも長年にわたり懸案となっていた事業ですが、最近になってようやく少しずつ前進するようになりました。

平成１１年度は、史跡津山城跡の保存整備事業として本丸御殿跡の発掘調査、備中櫓復元に備えた五番門の石垣図化、資料集の刊行などができました。とくに資料収集過程では、予想外の発見もあり、資料集は大変好評なものとなりました。

美作国分寺跡については11年度末から12年度にかけて、課題として残されていた塔跡の確認調査を実施することができました。遺存状態も良好なうえ、たいそう立派な塔が聳えていたことがわかりました。また、日上畝山古墳群については「日上天王山古墳・日上畝山古墳群」という名称で、岡山県指定史跡となりました。

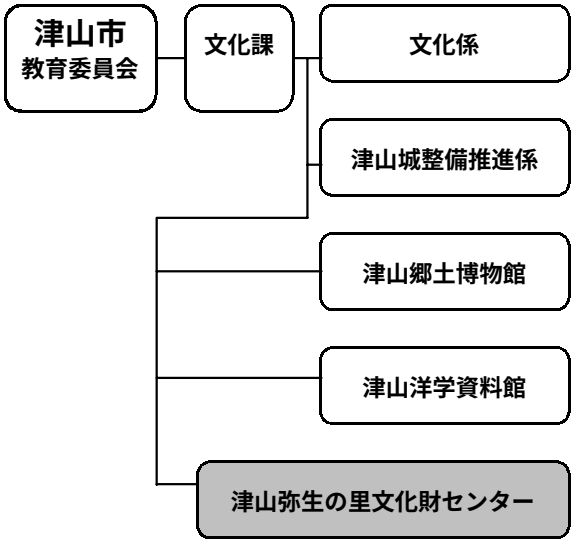
いずれの事業をふりかえっても、遺跡や史料の所有者の方々、関係各位の有形無形の御援助、御協力があって、はじめて取組むことができたものばかりであったと思います。大変有り難うございました。

最近は、自然環境や歴史環境の保全が、話題に上ることも多くなってきました。津山市では、各地域の自然環境や各種文化財を生かす総合的な地域整備を進めていきたいと考えています。今後とも、なお一層の御指導、御協力をいただきますようお願いいたします。

津山弥生の里文化財センター
所長　中山俊紀

津山弥生の里文化財センター機構図と職員配置

所　長　中山　俊紀
次　長　安川　豊史
主　幹　行田　裕美（津山城整備推進係長兼務）
主　任　小郷　利幸
主　事　平岡　正宏（津山城整備推進係兼務）
〃　豊島　雪絵
嘱託員　神田　久遠
〃　野上　恭子
〃　岩本えり子
〃　江見　祥生
〃　家元　弘子



目　次

１．津山弥生の里文化財センター事業概要 1
（１）展示事業 2
ａ．入館者数 2
ｂ．啓発、普及活動 3
ｃ．寄贈資料 4
（２）文化財センター日誌抄（平成11年度） 5
（３）埋蔵文化財発掘調査 8
平成11年度届出関係一覧 8
現地説明会 9
（４）民俗資料管理 10
ａ．民俗資料の整理 10
ｂ．民俗資料の復元 10
ｃ．民俗資料紹介 10
（５）その他の事業 11
★ 遺跡の保存・管理 11
★津山やよいライオンズクラブ奉仕作業 11
（６）調査の概要 12
ａ．天神原遺跡発掘調査報告 12
ｂ．一貫東１号墳墳丘測量調査報告 21
２．資料紹介・研究ノート 27
（１）長方形竪穴住居状遺構と掘立柱建物の分類と機能 28
（２）津山市日上畝山古墳群出土の樽形〇 38
（３）津山城今昔⑤～津山城の入り口冠木門～ 56
（４）二宮岡東遺跡および押入兼田遺跡出土土器の胎土分析 60
（５）民俗資料の製作過程記録　～「雪靴」～ 67

例 言

１．本書は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成11年度に実施した事業概要などについてまとめたものである。

１．平成11年度の埋蔵文化財発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、豊島雪絵、出土遺物の整理は上記の他、野上恭子、岩本えり子、家元弘子、民俗資料の整理は江見祥生が主として担当し、事業概要の執筆は各担当者が行い編集は小郷・平岡がおこなった。

１．自然科学的分析として岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「二宮岡東遺跡および押入兼田遺跡出土土器の胎土分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。

１．本書のデータは、PDFフォーマットで保管している。

１．津山弥生の里文化財センター事業概要

（1）展示事業

ａ．入館者数

当センターが開館してから、今年は１つの節目となる10年目を迎え、 入館者数は平成11年度末現在で延べ58,667人に達した。 平成10年度より入館料の無料化が図られたが、入館者数は減少の傾向が見られる。特に学生の入館数が減少している。

昨年度の入館者数は下表のとおりである。

表１　平成11年度総利用者数内訳

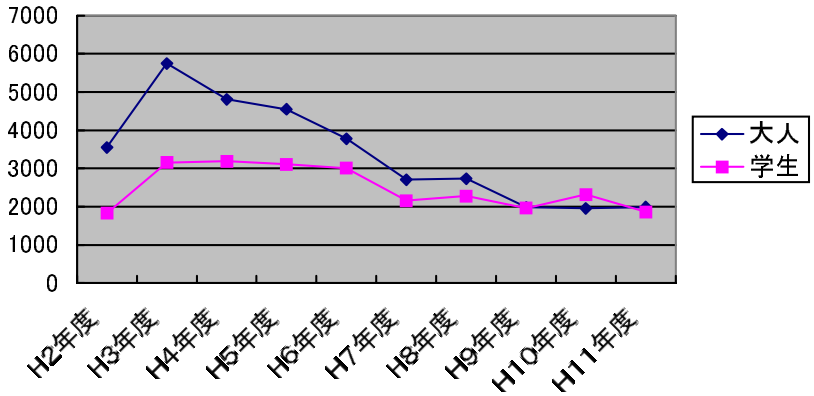
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
大人	511	245	100	98	172	96	223	215	48	70	70	143	1,991
学生	256	411	92	109	122	109	167	69	15	80	189	240	1,859
合計	767	656	192	207	294	205	390	284	63	150	259	383	3,850

表２　利用団体数及び人数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
団体数	7	6	3	2	0	1	5	5	0	1	2	2	34
人数	518	416	45	77	0	63	237	122	0	55	164	211	1,908

表４　年度別利用者数の推移

年度別	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度
大人	3,551	5,749	4,810	4,548	3,779	2,707	2,730	1,985	1,953	1,991
学生	1,829	3,158	3,191	3,108	3,011	2,157	2,275	1,961	2,315	1,859
合計	5,380	8,907	8,001	7,656	6,790	4,864	5,005	3,946	4,268	3,850



このグラフから判るように、平成３年度をピークに利用者数に減少の傾向が見られるが、大人の減少に比べて学生の方は緩やかな減少となっている。大人は、比較的神戸など関西方面の利用者が多かったが、阪神の大地震の後は大幅に減少した。学生は、大部分を占めるのが地元や近辺の小学生の団体見学である。

近年、歴史上の新発見が相次いでいること、今まで見むきもしなかった古い物に関心をもつ人が多くなってきたこと、先祖の暮らしぶりに関心を寄せる少年少女も増えつつあることなどを考えたとき、今後の利用者数の増加も期待できるように思う。

ｂ．啓発、普及活動

【刊行物】

『年報　津山弥生の里第７号』

『日上小深田遺跡』　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集

『田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡』　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集

『二宮岡東遺跡』　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第68集

『押入兼田遺跡』　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集

【講演会・研究会】

第18回津山文化財調査報告会

日　時　　平成12年３月４日（土）　場所　津山市総合福祉会館４階大ホール

内　容

第１部　調査報告

「津山城本丸御殿の発掘調査」　津山弥生の里文化財センター　　平岡正宏

「津山城備中櫓について」　津山郷土博物館　　尾島　治

第２部　講演

「大阪城と津山」　大阪城天守閣館長　　渡辺　武

美作考古学談話会（会員２７名）

第１回　　５／15（土）「二宮岡東遺跡発掘調査現場の現地見学」　　（川村雪絵）

第２回　　７／10（土）「遺跡の整備と活用」～古墳を中心にして～　　（小郷利幸）

第３回　　９／11（土）「古代の他界観念と葬送法」　　（行田裕美）

第４回　　11／６（土）「拓本のとりかたについて」　　（安川豊史）

第５回　　１／15（土）「津山城第三次発掘調査現場見学」　　（平岡正宏）

第６回　　３／11（土）「押入兼田遺跡の調査」　　（中山俊紀）

【収蔵資料の貸し出し等】

考古資料

７月上旬 ～９月上旬　県立博物館に「岡山の青銅器」展の為、鏡２点を貸し出す。

８月31日～12月17日　勝央町教育委員会に勝間田焼、瓦器、土師器を貸し出す。

９月４日～５日　津山市青年会議所に「私たちの鶴山展」の為、津山城本丸発掘調査フィルム、遺物として、鉄釘、瓦、陶器椀を貸し出す。

民俗資料

１月19日～２月５日　弥生小学校に「火熨斗」等５点を貸し出す。

２月１日～平成12年12月31日　作州民芸館に「鞄」等１６点を貸し出す。

２月２日～16日　作東町立粟井小学校に「飯櫃入れ」等１３点を貸し出す。

11月５日～８日　「佐良山時代祭り」の為、「火おこし機」３点を貸し出す。

11月19日　岡山放送が「五右衛門風呂」他８点を撮影する。

11月26日～12月２日　河辺小学校に「洗濯板」を貸し出す。

ｃ．寄贈資料

【考古資料】

太田雅夫　津山城平瓦

北川艶子　須恵器片 土師器片 瓦片

【民俗資料】

金嶋克昌　だぼ（米ならし棒） 斗枡　ガラス瓶　鉄鍋　湯タンポ　棹秤　鏡　切溜　陶製分銅

国米博明　絵葉書　津山市の観光（昭和３３年）

秋久忠子　御雛様　御膳箱　棹秤　分銅　担い枠　担い枠の箱　喞筒　夏用座布団　雑誌

梶岡辰男　こね鉢

（２）文化財センター日誌抄（平成 11 年度）

４月　１日　的場古墳群（～４月 30 日）、二宮岡東遺跡（～７月１日）昨年度から継続調査開始
４月　８日　くらしき作陽大学河本清先生、的場古墳群発掘調査現地見学
４月　９日　総社地内（美作国府跡）住居建て替え工事立会
４月 12 日　山陽新聞社記者、的場古墳群発掘調査現地取材
４月 15 日　津山中央病院駐車場建設予定地現地協議（古墳の現状保存を決定）
　　NHK 津山支社記者、的場古墳群発掘調査現地取材
４月 17 日　的場古墳群現地説明会（参加者約２００名）
４月 19 日　岡山県古代吉備文化財センター伊藤晃課長他２名来所
４月 20 日　近藤義郎先生、的場古墳群発掘調査現地見学
４月 23 日　岡山理科大学亀田修一先生的場古墳群発掘調査現地見学
４月 27 日　土居徹先生、的場古墳群発掘調査現地見学
５月 11 日　朝日新聞社記者、的場古墳群取材
５月 14 日　三毛ケ池古墳群開発協議
５月 15 日　第１回美作考古学談話会「二宮岡東遺跡発掘調査現場の現地見学」
５月 17 日　クリーンセンター建設事務室埋蔵文化財取り扱い協議
５月 24 日　津山朝日新聞社・山陽新聞社記者、平成 10 年度刊行発掘調査報告書を取材
５月 25 日　行田主査、市議会議員に津山城整備計画を説明
５月 27 日　民俗資料の調査
６月　３日　総務文教委員が津山城跡を視察
６月 10 日　岡山県教育委員会大橋雅也さん、津山市内の分布調査結果を持参
６月 19 日　二宮岡東遺跡発掘調査現地説明会（参加者約 150 名）
６月 28 日　日上畝山古墳群保存協議
６月 30 日　前日の大雨のため、中核工業団地古墳公園周辺に地すべりを発見
７月 10 日　第２回美作考古学談話会「遺跡の整備と活用」
　　久米郡中央町小中学校教職員研修会（美和山古墳群）
７月 16 日　沼遺跡草刈
７月 21 日　岡山県教育委員会文化課松本和男課長補佐他１名、県道一宮大谷線の埋蔵文化財取り扱い協議
７月 29 日　第１回津山市文化財保護委員会
７月 30 日　岡山県主催歴史講座中級（中学生）見学
７月 31 日　安川次長岡山県埋蔵文化財発掘調査報告会にて報告
８月　３日　沼遺跡歩道橋修繕工事
８月 10 日　津山中央病院ヘリポート建設予定地の試掘調査
８月 11 日　津山やよいライオンズクラブ沼遺跡草刈奉仕作業
８月 12 日　津山中央病院ヘリポート建設予定地（押入兼田遺跡）埋蔵文化財協議
８月 19 日　押入兼田遺跡発掘調査開始（～９月３日）
８月 24 日　岡山県教育委員会片山泰輔さん、県指定関連遺物・遺跡等の調査
８月 25 日　久米郡中央町社会科教師研修会（美和山古墳群）

８月 30 日　勝田郡勝央町教育委員会に美作国府跡出土の勝間田焼を貸出し
９月　３日　県道一宮大谷線の埋蔵文化財取り扱いについて県振興局、県文化課、市都市計画課と協議
９月 11 日　第 3 回美作考古学談話会「古代の他界観念と葬送法」
９月 17 日　開発（美作国府跡）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて県庁にて協議
９月 18 日　沼遺跡草刈
９月 19 日　日上青壮年部が日上畝山古墳群の草刈
９月 27 日　国分寺（美作国分寺跡）浄化槽設置に伴う立会い
９月 30 日　日上畝山古墳群樹木伐採
10 月　１日　津山城跡発掘調査開始（～３月 11 日）
10 月 3 日　鳥取県名和町教育委員会辻信広さん弥生土器観察のため来所
10 月 12 日　金井古墳公園災害復旧予定地測量
10 月 17 日　日上青壮年部が日上畝山古墳群の草刈
10 月 20 日　美作国府跡発掘調査開始（～ 21 日）
11 月　６日　第４回美作考古学談話会「拓本のとり方について」
11 月　９日　山下（津山城跡関連遺跡）確認調査
11 月 18 日　行田主査、平岡主事第 24 回全国遺跡環境整備会議参加のため善通寺市に出張
11 月 24 日　岡山県文化財保護審議会高橋護委員、県指定候補の文化財視察のため来津
11 月 29 日　総社（美作国府跡）確認調査（～ 12 月 14 日）
12 月　８日　岡山県古代吉備文化財センター高畑知功課長他２名来所
12 月 17 日　岡山県文化財保護審議会委員５名、県指定候補の日上畝山古墳群、柳谷古墳出土遺物を視察
12 月 19 日　中山所長、行田主査、全史協臨時大会出席のため東京へ出張
１月　12 日　飯塚古墳樹木伐採
１月　14 日　勝央町圃正雄さん弥生土器を調査
１月　15 日　第５回美作考古学談話会「津山城第３次発掘調査現場見学」
１月　18 日　RSK 山陽放送、津山城発掘調査の取材
１月　20 日　防府市教育委員会大林達夫さん国府跡出土土器の観察のため来所
１月　22 日　津山城整備委員会
１月　29 日　津山城跡現地説明会（参加者約１２０名）
２月　10 日　堀坂土地改良事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議
２月　15 日　文化庁記念物課岡村道雄主任調査官来津
２月　24 日　岡山県埋蔵文化財担当職員研修会
２月　29 日　テレビ津山、津山城を取材
３月　１日　堀坂土地改良事業予定地遺跡分布調査（～３月２日）
３月　４日　第 18 回津山市文化財調査報告会開催
３月　８日　兵庫県埋蔵文化財調査事務所山本三郎、渡辺昇さん来所
　　岡山県古代吉備文化財センター中野雅美さん都市計画道路土壌検査立会い
３月　11 日　第６回美作考古学談話会「押入兼田遺跡の調査」
３月　13 日　国分寺（回向堂建設）発掘調査開始（～３月 22 日）
　　畑硝庫現地調査

3月 15日　中山所長、日上畝山古墳群保存協議のため文化庁へ出張

3月 22日　第２回津山市文化財保護委員会

3月 26日　日上青壮年会、日上天王山古墳の竹を伐採

3月 28日　平岡主事津山市観光協会総会にて津山城本丸跡発掘調査成果を講演

第57条の2第1項

遺跡名	所在地	工事種別	期間	届出者	津山市発番	発信日	指示事項	実施日	備考
津山城跡	山下51-1	マンション建設	11.1～	横田興産株式会社 代表取締役横田弘	津教委文第14号	4.5	確認調査	未着手	
押入兼田遺跡	押入1129-1	ヘリポート建設	9.1～11.30	財団法人津山慈風会 理事長竹久亨	津教委文第62号	8.16	発掘調査	8.19～9.3	古墳・住居跡
高橋谷遺跡	山北429-22	住宅建設	9.1～12.30	安藤知成	津教委文第68号	8.3	立会い		
高橋谷遺跡	山北429-18	住宅建設	10．1～2．1	菅原亮祐	津教委文第69号	8．31	立会い		
美作国府跡	総社59-1	アパート建設	11．1～4．30	小川隆平	津教委文第83号	9．2	確認調査	11.29～12.14	
散布地	河面33-1他	宅地造成	11～12.20	安藤健二	津教委文第89号	10.15	立会い		
正善庵遺跡	東一宮73-8	住宅建設	11.1～5.30	常重正治	津教委文第90号	10.22	立会い		
美作国分寺跡	国分寺495他	お堂建設	6.1～平成13年10.30	宗教法人国分寺	津教委文第124号	3.1	確認調査	3.13～3.22	遺構無、遺物有

第57条の3第1項

遺跡名	所在地	工事種別	期間	届出者	津山市発番	発信日	指示事項	実施日	備考
美作国府跡	小原38-1他	公民館建設	4.1～H13.3.31	津山市長中尾嘉伸	津教委文第63号	8.18	確認調査	10.20～10.21	
津山城関連遺跡	山下92	駐車場建設	11月上旬～3月下旬	津山市長中尾嘉伸	津教委文第88号	10.15	立会い		

第98条の2

遺跡名	所在地	遺跡種別	調査期間	通知者	津山市発番	発信日	調査担当	備考
押入兼田遺跡	押入1129-1	古墳・集落	8.19～9.3	津山市教育委員会 教育長　松尾康義	津教委文第77号	9.1	中山俊紀、安川豊史、行田裕美 小郷利幸、平岡正宏、豊島雪絵	第69集

現地説明会

的場古墳群

平成11年4月17日（土）

約２００名

二宮岡東遺跡

平成11年6月19日（土）

約１５０名

津山城本丸御殿跡

平成12年1月29日（土）

約１２０名

（4）民俗資料管理

ａ．民俗資料の整理

今年度は以下の活動を行った。

①当センター所蔵の「喞筒」（水鉄砲）の柄と筒先を補修した。

②同じく「五右衛門風呂」（木製の桶、鉄製ではない）の底板、蓋を補修した。

③同じく「醤油舟」（醤油を絞る装置）の模型をより理解しやすい形に造作、展示した。

今年も民俗資料及び展示に関して数々の貴重な御意見を戴きました。厚く御礼申し上げます。

ｂ．民俗資料の復元

平成12年2月22日、藁細工の製作技術保存と、その過程を記録するために「雪靴」と「小縄」の製作を行った。製作者は「雪靴」が梶岡貞知、「小縄」が梶岡辰男両氏。

詳細については資料紹介を参照。

ｃ．民俗資料紹介

今回は「雪靴」（通称ふんごみ・ふかぐつ）を紹介する。藁製で、保温に優れ、岡山県の北部では乾いた雪が積もったときに、また、深山を歩くときにも使われた。しかし、雪解けの泥道や濡れた場所ではすぐ水がしみこむので使われなかったそうだ(P69以降を参照)。

補修後の「五右衛門風呂」（左）と「醤油舟」（上）

（５）その他の事業

★ 遺跡の保存・管理

《国指定史跡》

美和山古墳群清掃、草刈・剪定

《県指定史跡》

日上畝山古墳群草刈

〃　　説明板設置

《市指定史跡》

沼遺跡草刈・剪定

井口車塚古墳草刈

正仙塚古墳草刈

中宮古墳草刈

飯塚古墳雑木除伐、草刈

《未指定》

中核工業団地内古墳（一貫東１号墳）公園草刈

〃　　〃　　法面災害復旧工事

★ 津山やよいライオンズクラブ奉仕作業

沼遺跡の草刈

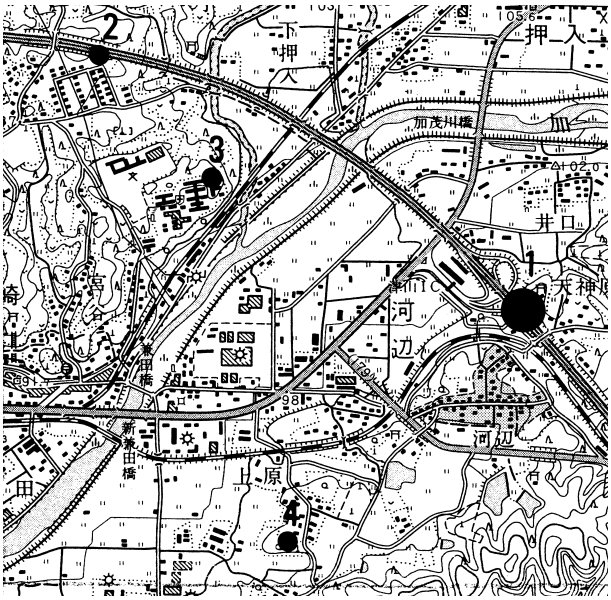
美和山古墳群芝貼りの状況（上）と
日上畝山古墳群の説明板（右）

（6）調査の概要

ａ．天神原遺跡発掘調査報告

１．遺跡の位置と周辺の環境（第１図）

天神原遺跡は津山市街地の東側を流れる加茂川左岸の段丘上、標高約118ｍのところに位置する。早くから古墳群としてその存在が知られていたが、岡山県教育委員会による昭和45～47年の中国縦貫自動車道の建設に伴う発掘調査によって、あらたに弥生時代後期を中心とした集落跡の存在が明らかになり、古墳群は合計12基以上から構成されることが確認された（註１）。また、平成８年の津山市教育委員会による調査では弥生時代の集落の規模がさらに広がることが判明している。周辺には、中期の集落遺跡である押入西遺跡・後期の住居・建物跡などがみつかった河辺上原遺跡・押入兼田遺跡、中期から後期にかけての区画墓である三毛ケ池遺跡などがある。



第１図　位置図（S=1:25000）

２．調査の経過

津山市河辺地内において老人保健施設の駐車場を建設するため、埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が行われた。当該地域には周知の遺跡である天神原遺跡が存在しているため、工事に先立って確認調査を行うこととなった。調査は平成10年４月17日に開始し、４月27日にすべての作業を終了した。調査面積は約80㎡である。

３．調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記の通りである。

（調査担当）津山弥生の里文化財センター 主査　行田裕美

〃　主事　豊島雪絵

（整理担当）行田裕美　豊島雪絵　野上恭子　岩本えり子　家元弘子　丸王佳苗　山本有希

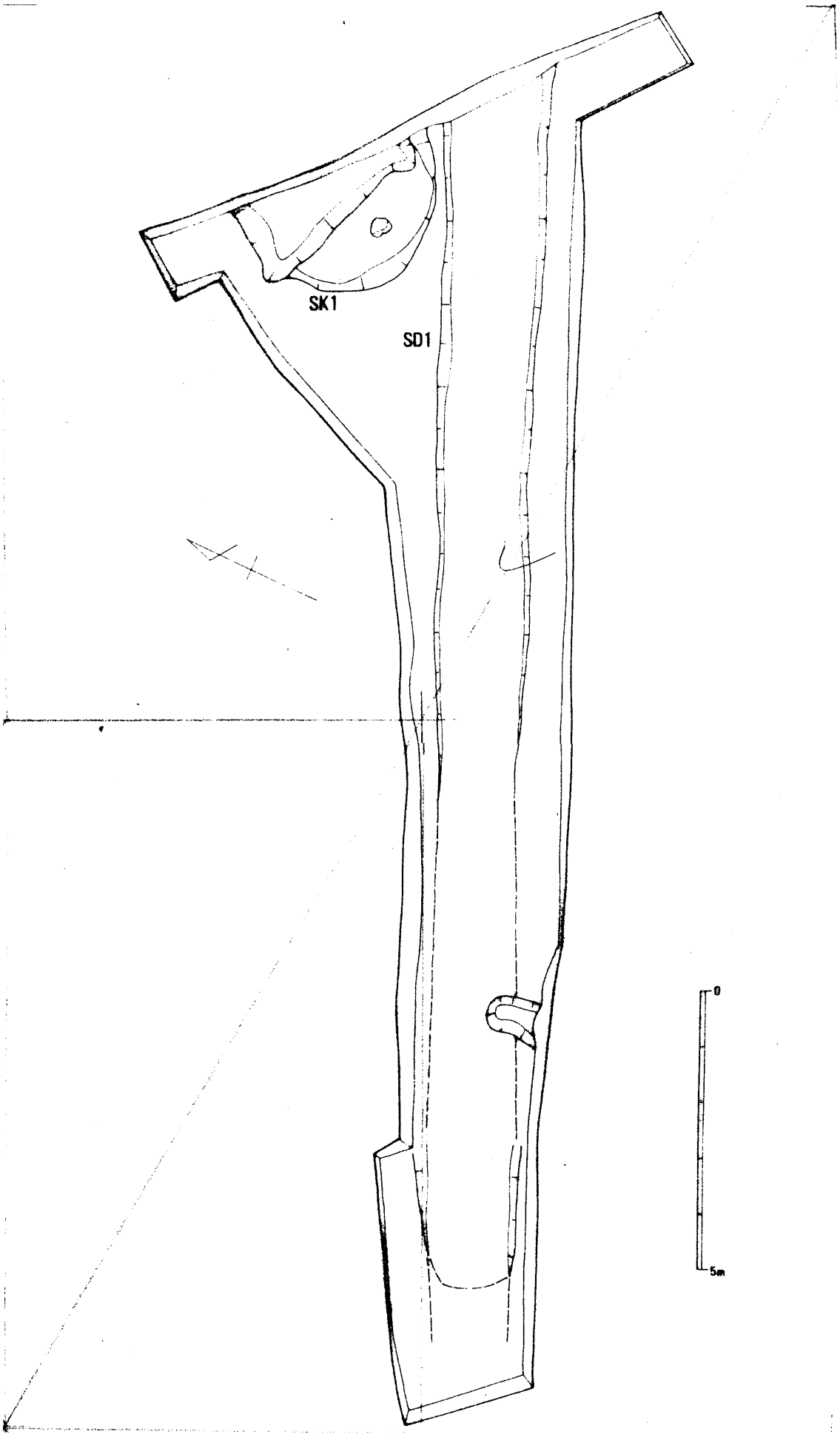
（発掘作業）津山市シルバー人材センター

稲垣裕史　梶尾嘉明　加藤文平　末沢敏男　谷口末男　藤沢淳一郎　森二三男

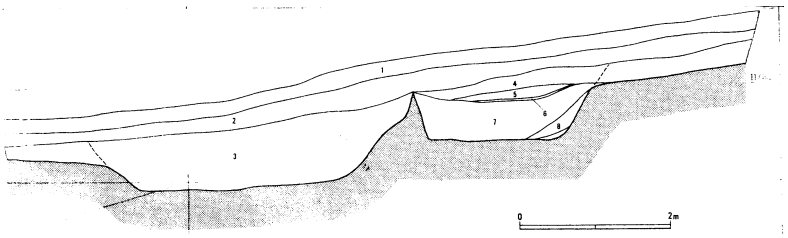
４．調査の記録（第２～６図）

環濠（ＳＤ１・第２～５図）

昭和46～47年の調査によってみつかっていた溝の延長上で検出した溝である。北東から南西方向の溝で、幅約1.5～1.8ｍ、調査区で検出した部分での全長は約21ｍである。検出面からの深さは約0.7ｍで、北東から南西に向かって若干高くなっている。溝の埋土は上から暗茶褐色土・灰褐色土・淡黄褐色土・暗灰褐色



第２図　天神原遺跡調査区平面図（S=1:100）



第３図　調査区北壁断面図（S=1:100）

であり、一部地山が流れ落ちた痕跡がある。

遺物は溝及びその北側にある土坑から出土しており、すべて弥生時代後期の土器である。

１～３は壺である。１・２はともに頸部から緩やかに外反しながら口縁部に至るもので、端部は上方に拡張している。１の口縁端面には竹管文が２段に施されている。３の壺は「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部は拡張せずに丸くおさめている。４は蓋で、垂直にのびる細長いつまみをもつ。５～27はすべて甕の上半部及び底部である。５・６は小型の甕で、いずれも口縁端部は拡張せず丸くおさめるものである。

その他のものは、「く」の字状に外反する口縁部をもち、端部を①７～12のように斜め上方、または斜め上下に拡張するもの、②13～18のように上方、またはやや外側上方に拡張するもの、③19～21のように拡張せずに丸くおさめるだけのもの、の大きく３つに分けられる。①の中には内面のヘラ削りが頸部よりやや下方まで施されているもの（７）と、頸部直下までのもの（８・12）とがみられる。また、②は①より後出するタイプのもので、内面のヘラ削りはすべて頸部直下まで施されている。13・14は端面に数条の沈線を施す。17の頸部にはヘラ状の工具による刺突文がみられる。19～21は、外面はハケ、内面は19が頸部よりやや下方まで、20・21は頸部直下までヘラ削りを行っている。22～27の底部はいずれも外面の調整が不明瞭であり、23・25にわずかにハケ目が、26にヘラミガキが観察できる程度である。

28・29は台付鉢の台部である。28は器壁が薄く、底部から大きく屈曲している。29は28に比べやや器壁が厚く、底部からの屈曲も緩やかである。30～35は高杯の杯部及び脚部である。30は浅い杯部をもち、外側に大きく拡張した口縁端部の上面には７条の沈線を施す。35の裾部付近には円形のスカシ孔が４箇所みられる。

36～39は器台である。36の拡張した口縁端部には鋸歯文が施されている。37～39の裾部はハの字状に広がるもので、38はやや屈曲して広がっている。

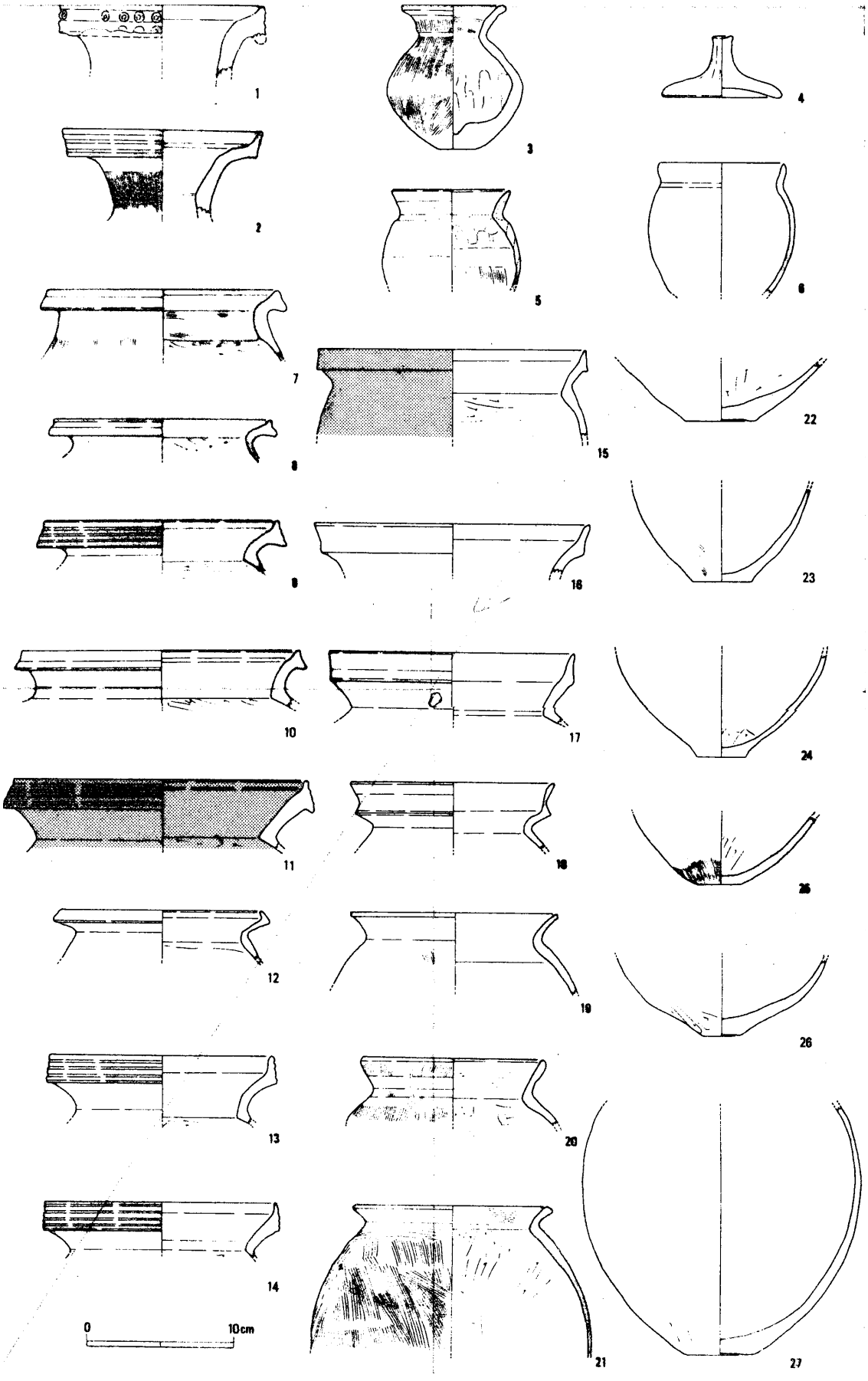
土坑（ＳＫ１・第６図）

ＳＤ１の西側に接しており、検出した部分で東西最大長約４m、南北約２m、深さ0.7～0.9mをはかる。不整円形の土坑と思われ、一部北東側に広がっている。断面は浅いU字形を呈しているが、北東部に向かって段をなしている。埋土は暗茶褐色土である。

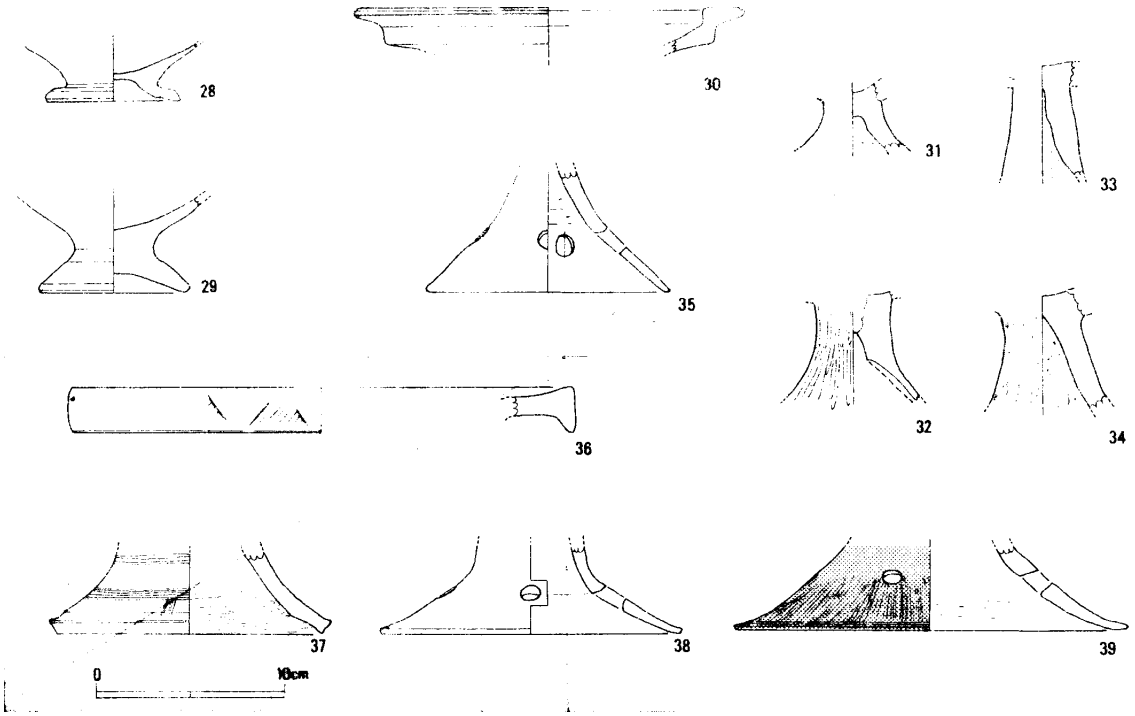
遺物は弥生時代前期の土器片が出土している。天神原遺跡では、以前の調査でも弥生時代前期の土器が20数点出土している（注２）。今回の調査で出土した前期の弥生土器は８点あり、その中でも特徴が明確に分かるものは数点である。

１は壺の体部である。肩部に３条の平行沈線文を施している。２は甕の口縁部と考えられる。短く折り曲げた口縁部をもち、端部には刻み目を施す。その他に４条の沈線文を施した土器片や底部などがある。

津山市ではこれまでのところ前期の集落などがみつかっておらず、少数の土器の出土からその存在を推定するしかない。弥生前期の土器がみつかっているのは天神原遺跡の他に一丁田遺跡（注３）・京免遺跡（注



第４図　SD1出土遺物①（S=1:4）

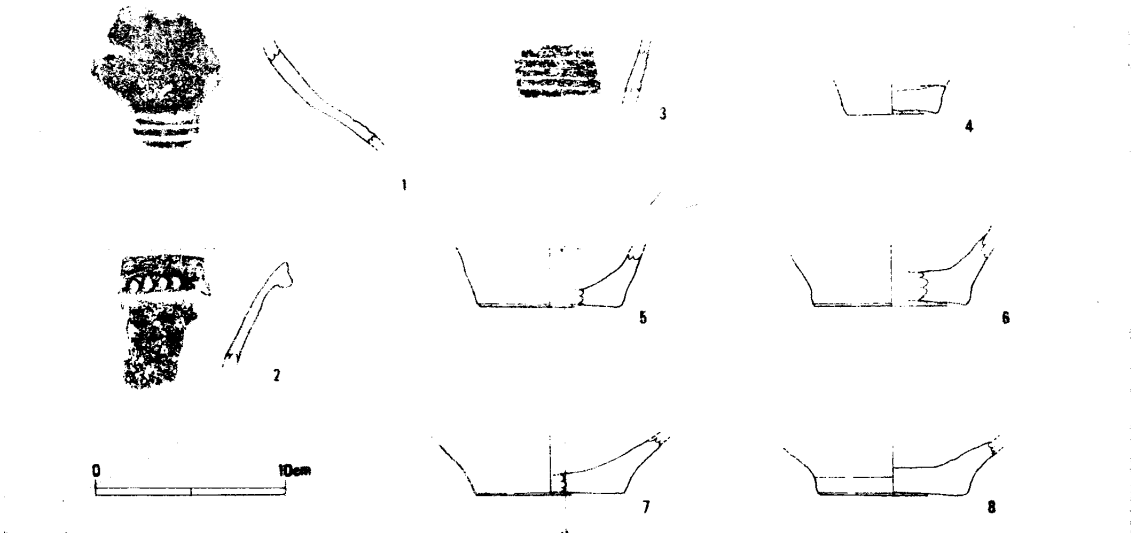


第５図　SD1 出土遺物②（S=1:4）

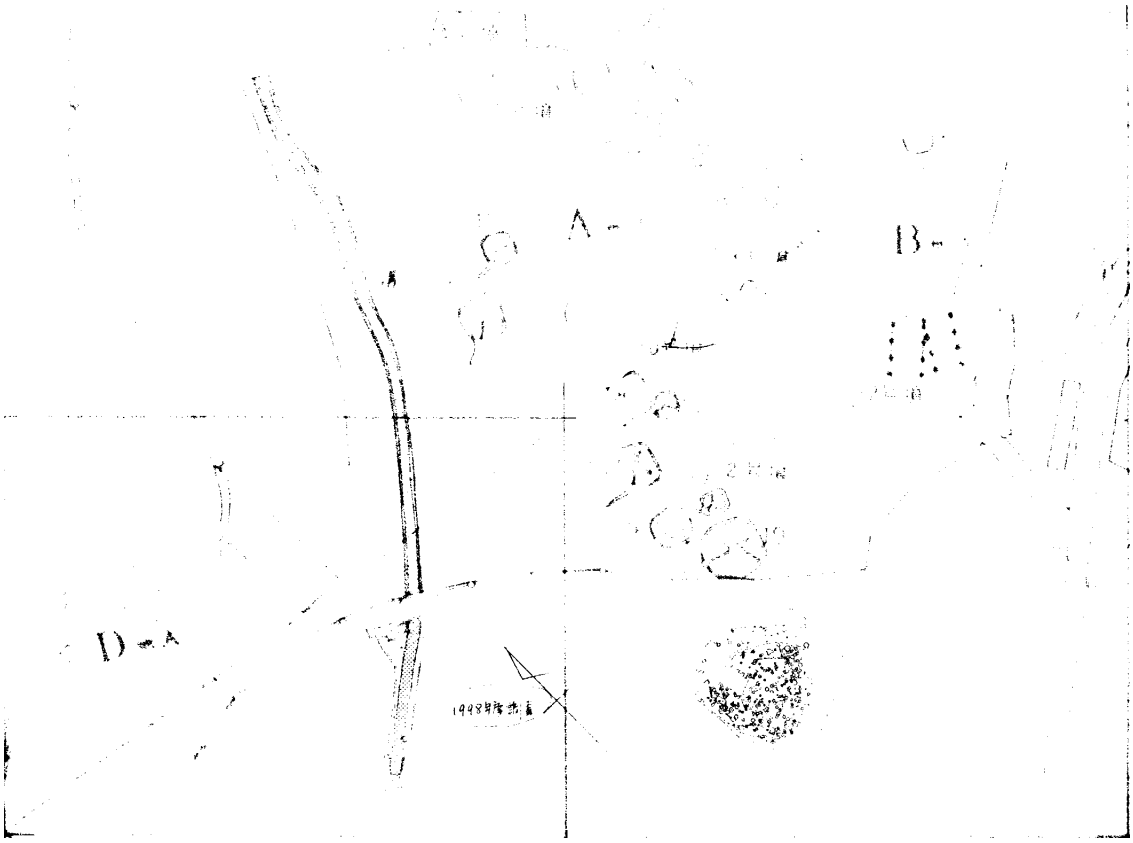
４）などである。

５．まとめ（第７図）

今回の調査によって出土した土器の年代については、ＳＤ１出土のものは一部後期前半のものもあるが他はすべて後期後半のものである。市内の土器編年に照らし合わせると、大田十二社遺跡第４式期に位置付けられる。また、ＳＫ１で出土した土器は前期のものである。土器はすべて小片で、全体の形状の分かるものはないが、１の壷肩部の沈線文が数条であることなどから、弥生時代前期の後半期のものと考えられる。既存の編年に照らし合わせると、藤田憲司の編年で前期後半ａの段階であろう（注５）。２の甕は突帯文系の



第６図　SK1 出土遺物（S=1:4）



第７図　天神原遺跡 SD1 位置図（S=1:1000、原図は橋本惣司ほか 1975 から引用、一部改変）

土器である可能性が高く、やや時期がさかのぼるかもしれない。

この調査では、以前の調査ですでにみられた環濠の続きを確認することができ、天神原の弥生集落が南へさらに広がることがわかった。これは平成８年度の調査で集落の広がりが確認されていたことと合わせても、矛盾しないものである。

（豊島雪絵）

（注１）橋本惣司ほか 1975「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』７　岡山県教育委員会

（注２）岡山県教育委員会による発掘調査の際、弥生時代前期の包含層から出土している。調査で出土した前期の土器は、逆Ｌ字形の口縁部をもつものや、口縁部よりやや下方に２条～３条のヘラ描き沈線文を施したものなどがみられる。

（注３）植月壮介・近藤義郎 1957「津山市山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究』津山市津山郷土館

（注４）中山俊紀編 1982「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第 11 集

（注５）藤田憲司 1982「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第 17 号

図版１

SD1（南から）

SK1（西から）

SD1・SK1 断面
（南から）

SD1 出土遺物①（弥生時代後期の土器）

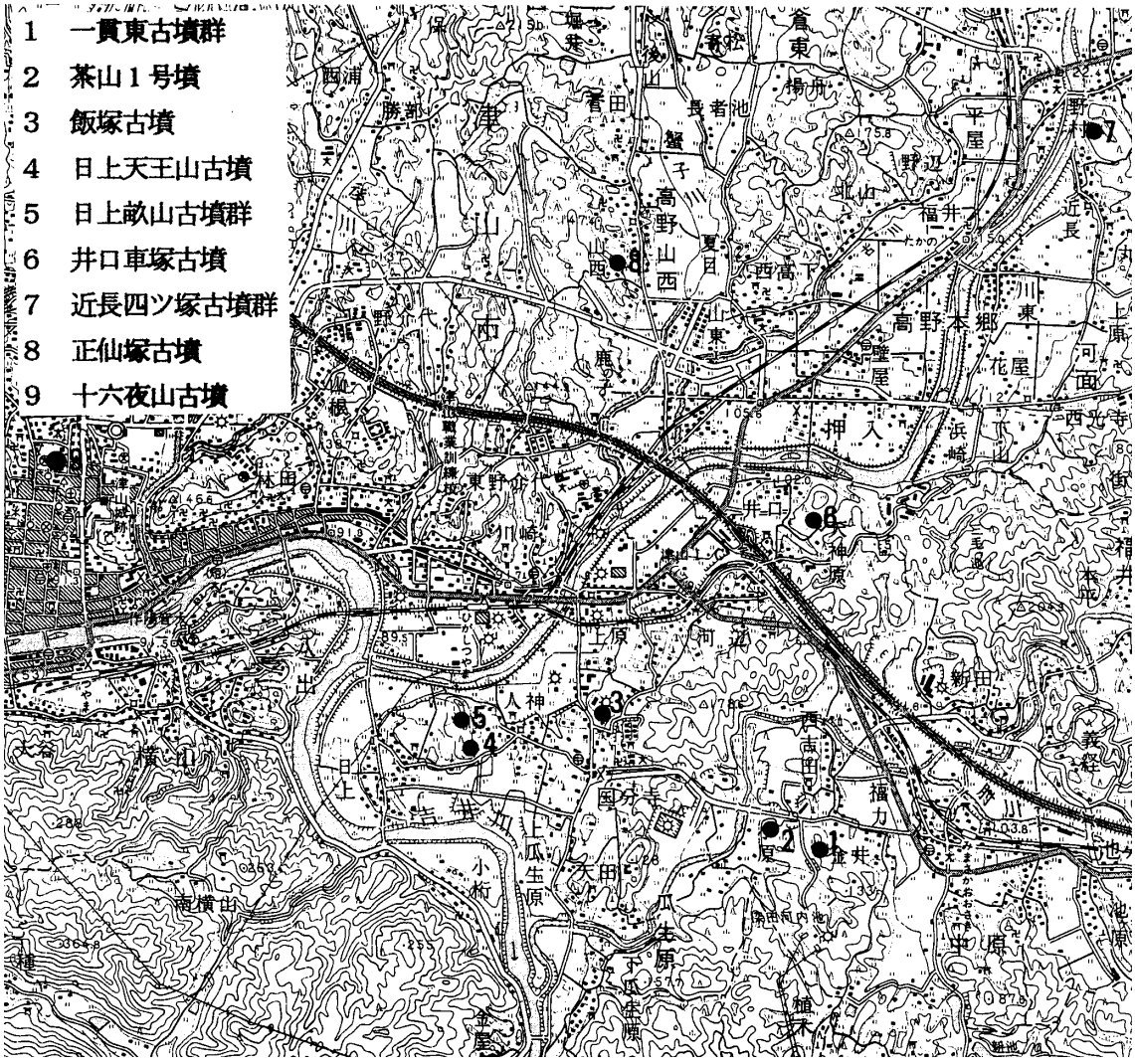
SD1 出土遺物②
（上：４－21・下：４－27）

SK1 出土遺物
（弥生時代前期の土器）

ｂ．一貫東１号墳墳丘測量調査報告

１．はじめに

一貫東（いっかんひがし）１号墳は、岡山県津山市金井字一貫に所在する。津山市街地の西方、吉井川の支流広戸川左岸の丘陵上に立地し、８基の古墳で構成されていた。昭和60～61年に津山中核工業団地造成に伴い１号墳以外の２～８号墳７基が発掘調査された。1号墳は丘陵の最高所に位置し、そこから北側に派生した丘陵の稜線上に２～８号墳は立地する（第１・2図)。調査の結果２・４・８号墳は円墳、３・５・６・７号墳は方墳であり、６号墳のみ葺石がみられる。埋葬施設として２号墳が竪穴式石槨、３号墳が木棺、６号墳が木棺と周溝内から箱式石棺が検出されている。出土遺物として鉄器（剣・●)、須恵器甕、土師器壷・高杯などがあり、これら土器から古墳群は５世紀の所産と考えられている（註１)。また、１号墳については緑地公園として残され遊歩道や休憩所が整備され、現在自由に散策する事ができる。１号墳の墳丘測量図も調査報告書に掲載されているが、測量時には樹木の繁茂が激しく、そのため全体的にコンターがややおおざっぱなものとなっている。特にくびれ部から前方部にかけての墳端が明瞭ではない。そのためこれら細部を極力表現するため、樹木の伐採後再測量をおこなった。

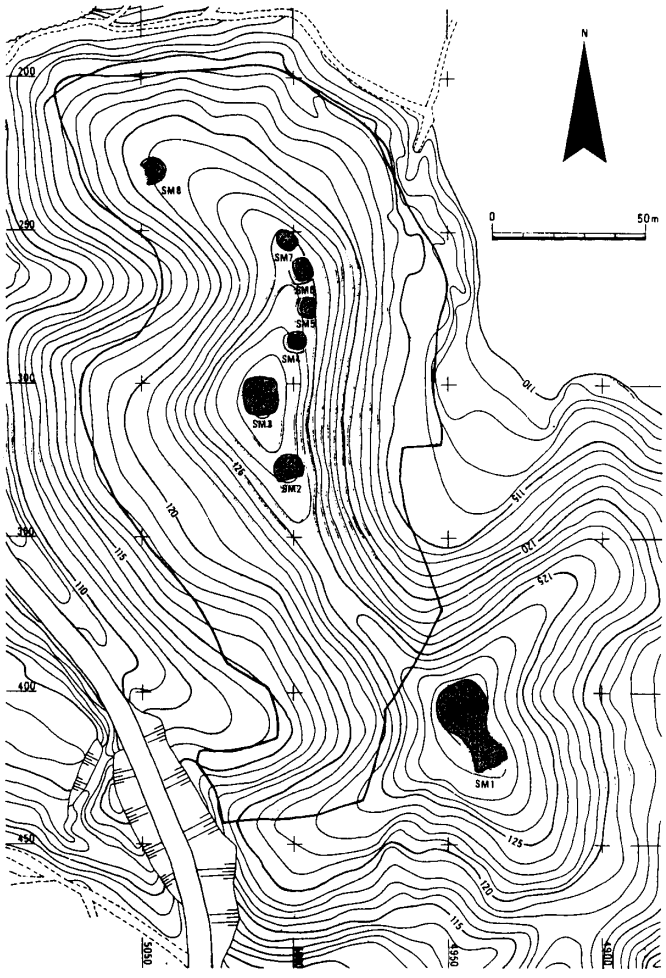


第１図　周辺主要古墳分布図（S＝１:50,000）

また測量時などに土器片数点も採集しているので合わせて報告する。

２．測量調査（第３図）

測量調査は、平成７年４月27日に文化財センター職員（行田裕美・小郷利幸）が中心となり、最高所を０として－20㎝コンターでおこなった。今回の測量では座標・標高はひいていないが、最高所の標高はおよそ132ｍ程である。また、方位は磁北である。



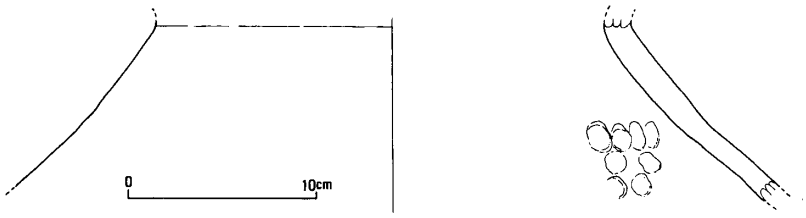
第２図　一貫東古墳群分布図
（S＝１：2,500、註１より引用一部改変）

測量の結果、後円部と両くびれ部、前方部前端の一部などで墳端らしき傾斜変換点をおさえる事ができた。後円部北側と前方部前端の墳端のレベルはいずれも－３ｍ付近であり、これを基準に測ると全長約30ｍの前方後円墳となる。後円部は径19～20ｍ、高さ3～3.8ｍ、前方部は長さ11ｍ、高さ1～1.5ｍ、前端部幅推定12ｍ程、くびれ部は幅６ｍ、高さ0.6ｍを測り、後円部と前方部との比高差は－1.6ｍである。墳形の特徴としては、後円部に対して前方部は短くて小さく、東側の形状から一見バチ形状に開きぎみであるが、両コーナー部分は明瞭でない。特に西側のコーナー付近には、隣接して墓地がつくられているため多少改変を受けているのかも知れない。後円部墳頂の平坦面は径8.5～9ｍを測り、表面には小動物の巣穴が多数掘られている。中央部のその一つに竪穴式石槨らしき石材が見られ、埋葬施設の一部と考えられる。また、この付近で土器片数点を採集している。西側のくびれ部から後円部にかけての墳丘斜面には、河原石による葺石が一部で見られる。墳丘の主軸は、およそN－18°－Wでほぼ南北方向である。

３．採集遺物（第４図）

採集した土器は壷などの胴部片と考えられ12点ある。かなり大きな破片もあるが口縁部や底部などは無い。破片から推測してかなり大きな土器である。破片の内図示できたのは1点（第４図１）で、口縁部付近の破片である。内・外面の調整はナデで、内面には指頭圧痕がみられる。その他の破片も同様な調整で、色調はいずれも暗茶褐色、胎土は0.5㎜以下の白色・黒色粒を多く含む。この土器については比較検討するため、蛍光X線分析法による胎土分析を行っている（註２）。その結果、色調・胎土が良く似ている日上天王山古墳（第１図４、註３）出土の土師器壷と似た分析値がでている。ただしこれについては、分析資料が少ないため再検討も必要である。

第３図　一貫東１号墳墳丘測量図（S＝１：200）



第４図　採集遺物（S＝１：４）

４．まとめ

（古墳群の立地）

丘陵の最高所に１号墳が立地し、北西にのびる稜線状にやや離れて２～７号墳、さらに少し離れて８号墳といった立地である（第２図）。その中で２・３号墳が稜線上に立地するのに対し、４～７号墳は稜線上から東にやや下った部分の立地である。その事から北東側の平野部を意識した立地と考えられる。そして古墳の立地面や墳形、規模、埋葬施設、副葬品等に違いが見られる事から、この地域の１号墳を中心とした階層的序列及び系列がそこに現れているものと推測され、これらは同一系列の古墳群と考えられる。

（時期）

２～８号墳について報告書では、出土遺物から５世紀の所産と考えているが、その中で若干の時期幅を限定した方がよさそうである。時期決定ができる出土遺物は少ないが、例えば須恵器の出土している8号墳はその特徴から５世紀後半でも中頃に近い時期であり、 少なくとも美作地方の古墳で須恵器副葬が一般化する５世紀末～６世紀初頭まで下る古墳はなさそうである。 また7号墳を土師器の特徴から5世紀の前半代としている。須恵器の出土した８号墳は２～７号墳とはやや離れ、 低位置の立地である。この事からすると８号墳は一番後出の古墳と考えられる。以上から推測しても２～８号墳は５世紀前半から中頃を中心とした古墳群と考えられよう。

それでは１号墳はいつごろであろうか。１号墳については丘陵最高所の立地で墳形が前方後円墳である点などが他の円・方墳とは大きく異なっている。また、調査がされていないため墳形や採集されている土器などから時期を考えるしかない。まず墳形では全長30ｍの前方後円墳だが、前方部がバチ形状に開き、前方部上面はほぼ平らで後円部との比高差が現状で1.6ｍある。これらはどちらかと言えば、古い時期の古墳の特徴を示している。周辺の前方後円墳と比較した場合、近接して存在する全長21ｍの茶山１号墳（第１図２、註４）と比べると、周溝の存在や前方部の形態など全体的なプロポーションが異なる。この古墳は須恵器副葬が一般化する６世紀初頭頃の古墳である。両者を比べた場合茶山１号墳の方が後出の要素が多く、本地域の前方後円墳の系列から言えば、大筋で一貫東１号墳→茶山１号墳となる。また、前方部の長さの比率は異なるが開き具合の特徴から言えば、前期古墳の正仙塚古墳（第１図７、註５）などの特徴に似ているようである。

埋葬施設については石材が観察される事から竪穴式石槨の可能性が大きいが、規模や構造については不明である。しかし、観察した限りでは、長大なものではなさそうである。竪穴式石槨は、２号墳の埋葬施設に使用されており、これは河原石によるもので全長1.9ｍ程の小形である。

出土遺物として墳頂部で土師器の破片を採集している。胴部の破片のため、形態も明瞭でなく明確な時期は決定しがたい。ただかなり大きな器形のため、土器棺などに使用されていた可能性も考えられる。墳頂部の埋葬施設に土器棺を使用した古墳としては、近長丸山１号墳（註６）、有本７号墳（註７）があり、前者は円墳で土器棺の他５基の埋葬施設があり、鏡や鉄剣、ヒスイ製の勾玉などが出土している。後者は方墳で２基の木棺、２基の土器棺があり、１基の土器棺からガラス製の小玉が１点出土している。これら古墳は出土遺物から前期古墳とされ、土器棺は古い時期の古墳によく見られる。

また本例の胎土を７号墳出土の土師器壷と比べると、肉眼観察でも明らかに異なっており、分析結果にあるように、どちらかと言えば前述した日上天王山古墳出土の二重口縁の壷と良く似ている。その場合、両墳は2.5㎞しか離れておらず、近い立地である事から土の採取場所が、たまたま同じ地域であった可能性も考えられる。しかし、日上天王山古墳の土器を岩石鉱物レベルで分析した結果、角閃石の含有量が多く、製作にあたり材料の選択が行われていた可能性もある（註８）。その場合使用されている土器が特殊な胎土で作

られた祭祀的なものと解すると、両墳が同一祭祀圏内で、時期的には近い可能性やその系譜を引く可能性が推測される。ただ少なくとも１号墳は須恵器が副葬される時期までは下らないであろう。

以上を総合的に解せば、1号墳の所属時期は発掘調査をしていないため多くは語れないが、２～８号墳の時期を５世紀前半から中頃とした場合、１号墳は墳形の特徴などから、５世紀前半代でも古相でさらに遡る可能性も十分考えられる。

（小郷利幸）

（註１）湊哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 43 集』津山市教育委員会 1992

（註２）白石純「有本遺跡Ｂ地区出土土器の胎土分析」『有本遺跡他』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 62 集）津山市教育委員会 1998、分析値は同「有本古墳群出土土器の胎土分析」『有本古墳群』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 59 集）津山市教育委員会 1997 に掲載されている

（註３）近藤義郎他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 60 集』津山市教育委員会･日上天王山古墳発掘調査委員会 1997

（註４）保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 27 集』津山市教育委員会 1989

（註５）坂本心平･安川豊史「正仙塚古墳測量調査報告」『年報 津山弥生の里 第３号』津山弥生の里文化財センター 1996

（註６）小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 41 集』津山市教育委員会 1992

（註７）小郷利幸「有本古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 59 集』津山市教育委員会 1997

（註８）清水芳裕「出土土器の胎土分析」『日上天王山古墳』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 60 集）津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会 1997

２．資料紹介・研究ノート

（１）長方形竪穴住居状遺構と掘立柱建物の分類と機能

中　山　俊　紀

１．長方形竪穴住居状遺構とは

津山の弥生集落遺跡を調査すると、往々にして竪穴住居址に似た平面形長方形の遺構（第１図）が発見される（註１）。従来はそれらも竪穴住居址とされるのが普通であったが、その遺構には竪穴式住居址と性格を異にする特徴がある。そこで、1981年に刊行した報告書「沼Ｅ遺跡」Ⅱでは、これらの遺構を一括して「長方形竪穴住居状遺構」と総称し、その機能の推定をおこなった。しかしこの名称は普及せず、この種の遺構の機能についても顧みられることがなかったが、弥生集落を理解する上で重要な意義をもつ遺構と考えるので、再検討したい。

また、この種の遺構は、掘立柱建物と遺構評価の上で不可分の関係にあるので、掘立柱建物の分類と評価についてもあわせて検討したい。

（１）長方形竪穴住居状遺構の定義

「平面形が長方形の竪穴住居状遺構で、床面中央長軸線上奥側に地床炉を伴うもの」と暫定的に定義する。

（２）長方形竪穴住居状遺構の分類

この定義に沿う遺構は、以下のように規模の大小により大きく二種に、そのうち大形のものはその特徴からさらに二種に分類できる。

１．床面積10㎡前後に区分界が設定でき、それ以下の床面積のものをＡ（第１図－１～６）、それ以上のものをＢ（第１図－７～13）と区分できる。

２．Ｂには床面に柱痕跡を残さないもの（第１図－７～10）と、建物状の柱配置を残すもの（第１図－11～13）の二種があり、残さないものをＢⅠ、残すものをＢⅡと区分する。

なお、１、２の他に掘立柱建物と報告されているものの中に、ＢⅡの規模と柱配置が共通のものがみられる（第２図－35～37）。狭い柱間隔をもつ点、細い柱材痕跡を残す点などでＢⅡと類似し、掘立柱建物一般と区別される。ＢⅡの長方形竪穴住居状遺構の床面及び炉が失われた形態と考えても不都合はないので、仮に長方形竪穴住居状遺構ＢⅡＲの存在を予定する。

２．掘立柱建物の分類

（１）集成した掘立柱建物は、次のように分類できる。

Ⅰ、梁間１間、桁行１間で長方形のもの（第２図－１～14）。

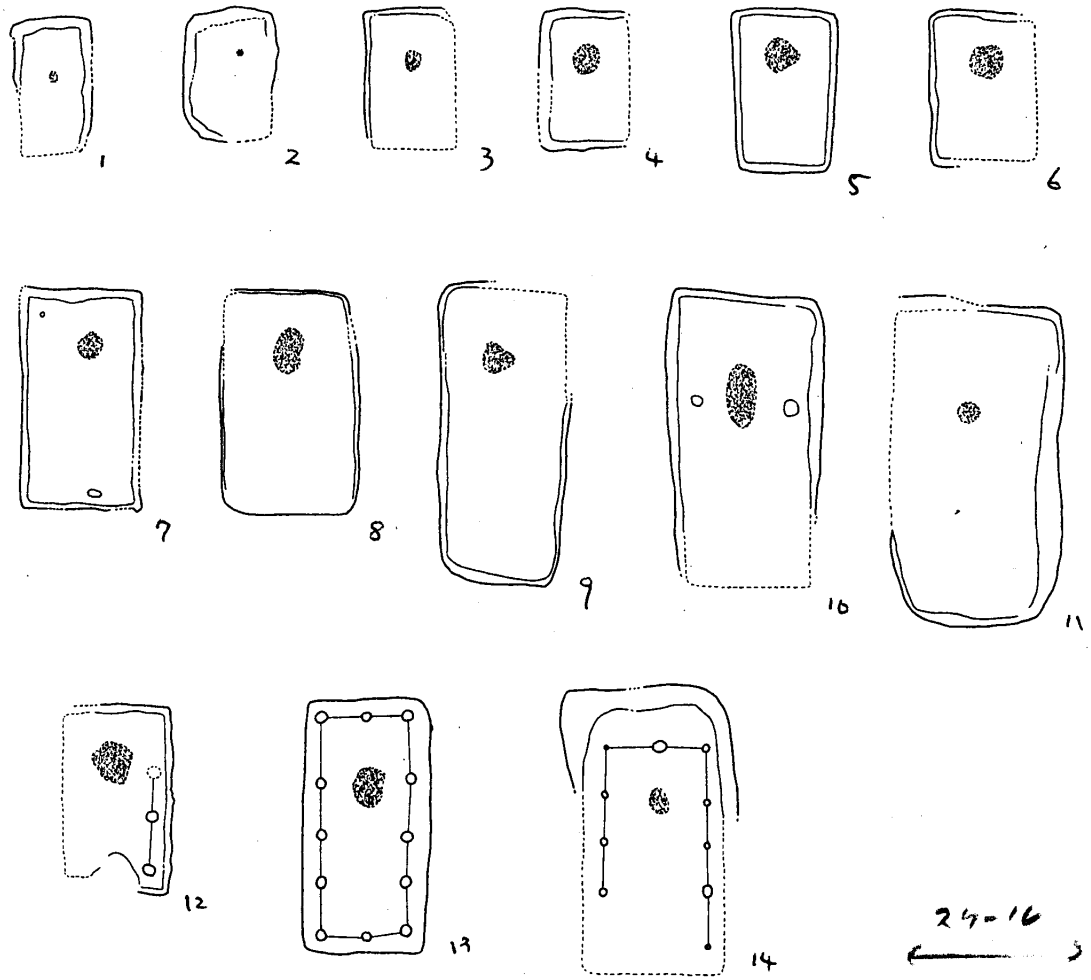
Ⅱ、梁間１間、桁行１間で正方形のもの（第２図－15～17）。

Ⅲ、梁間１間で桁行が２間ないし３間、平均桁側柱間隔はおおむね1.5ｍを越えるもの（第２図－18～28、第３図－９～12）。　痕跡が分かる柱直径は15～20㎝。

Ⅳ、梁間１間で桁が４間以上、桁側平均柱間隔がおおむね1.5ｍを越えるもの（第２図－30,31、第３図－３～13）

Ⅴ、梁間２間で、桁側３間以上、桁側平均柱間隔は1.5ｍを越えるもの（第２図－32～34、38、39）。

Ⅵ、梁間が１ないし２間で桁行２間以上、桁側平均柱間隔はおおむね1.5ｍ以下のもの（第２図－35～37、第３図－１～８）　柱痕跡の明瞭なものでは、比較的細い柱が用いられていることがわかっている。



第１図　長方形竪穴住居状遺構（縮尺１/200）

遺構番号	遺跡名	遺構名	床面長辺(m)	床面短辺(m)	床面積(㎡)	形式区分	所属時期	文献
1	紫保井	14号住居址	3.3	1.5	4.95	A	中期中葉～後葉	1
2	東蔵坊	6号住居址	2.8	1.8	5.04	A	中期後半	2
3	稲荷B	7号長方形竪穴住居状遺構	3.4	2.2	7.48	A	中期後葉	3
4	紫保井	3号住居址	3.1	2	6.2	A	中期中葉	1
5	旦原	№14住居址	3.8	2.3	8.74	A	中期後葉～後期初頭	4
6	紫保井	10号住居址	3.6	2.6	9.36	A	中期中葉～後葉	1
7	別所谷	長方形竪穴住居状遺構(SH9)	5.4	2.7	14.58	ＢⅠ	中期後葉	5
8	ピシャコ谷	5号長方形住居状遺構	5.5	3.4	18.7	ＢⅠ	中期後葉	6
9	崩塚	住居状遺構1	7.8	3	23.4	ＢⅠ	中期後半	7
10	押入西(県調査)	3号住居址	7.5	3.4	25.5	ＢⅠ	中期後葉	8
11	茶山	住居状遺構	8	3.8	30.4	ＢⅠ	中期後葉～後期初頭	9
12	沼EⅡ(第2次調査)	7号長方形竪穴住居状遺構	4.7	2.6	12.22	ＢⅡ	中期中葉	10
13	沼EⅠ(第1次調査)	建物Ⅰ	6.8	3.3	22.44	ＢⅡ	中期後葉	11
14	糠山	2号住居址	7	3.6	25.2	ＢⅡ	中期後葉	12

表１　長方形竪穴住居状遺構（遺構一覧番号と第１図の番号は一致）

文献

1「津山市紫保井遺跡と中期小住居群」『古代吉備第15集』　古代吉備研究会　１９９３
2『東蔵坊遺跡B地区』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第９集 津山市教育委員会　１９８１
3『小原B・稲荷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集 津山市教育委員会　１９９０
4「旦原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第14集』　岡山県教育委員会　１９７７
5『別所谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集　津山市教育委員会　１９９４
6『ピシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会　１９８４
7『崩レ塚遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集　津山市教育委員会　１９９８
8「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第３集』　岡山県教育委員会　１９７３
9『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集　津山市教育委員会　１９８９
10『沼E遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集　津山市教育委員会　１９８１
11「沼E遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告９』　岡山県教育委員会　１９７９
12「糠山遺跡」『糠山遺跡群Ⅰ』　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　１９７９

（2）この分類の問題点

この分類のうち、Ⅱは４本柱の竪穴住居址床面が削平されたものが含まれる可能性がある。また、Ⅵは建物状の柱配置をとる長方形竪穴住居状遺構の床面が消失したものが含まれるらしい。細かい検討が進めば、その多くは長方形竪穴住居状遺構と分類されるようになるかもしれない。たとえば、長方形竪穴住居状遺構と分類される沼E遺跡第１次調査発見の建物Ⅰ（第１図―13）と奈義町野田遺跡発見の建物16（第３図―１）とは、規模、柱配置（特に柱間距離が短いという特徴）がほとんど一致する。またそれらは、久米町稼山遺跡発見の２号住居址？（第１図―14）とも非常に近い形態とみなせるので、床面の消失した長方形竪穴住居状遺構と考えてほぼ誤りはない。さらにいえば、長方形竪穴住居状遺構の床を消失した例と考えられる沼E遺跡第１次調査発見の建物Ⅲ（第２図―37）は、桁行が５間と６間の違いがあるとはいえ野田遺跡の建物14（第３図―３）と規模、形態はほぼ同じで、柱間隔も狭いという特徴も一致する。Ⅵが長方形竪穴住居状遺構の床面を消失したものと直ちにはいえないものの、長方形竪穴住居状遺構の規模及び形態と特徴を共通にする一群の建物がある、ということは大いに注目されてよい。

３．長方形竪穴住居状遺構の特徴と機能

（1）遺構の特徴

図１で示したように、長方形竪穴住居状遺構と分類したもののなかには、規模の点でも形態の点でも極端な開きがある。たとえば最小の紫保井遺跡発見の１は、幅が1.5ｍで長さが3.5ｍ、面積約５㎡で、最大の茶山遺跡のものは面積が30㎡を越し、その間には６倍の開きがある。また、床面に建物状の柱配置を残すものとそうでないものとは、遺跡で発見されたときのみかけの印象はまったく別種の遺構とみられても当然であるほど相違する。

しかし、これらには一点明白な共通点が存在する。それは、そのいずれにも強固に焼け締まった地床炉が存在することである。弥生遺構のなかで強固に焼け締まった整形の炉跡が発見されるのはこの遺構のみといってよく、住居址床面に炉跡があるなどと報告されていても、それはたいていの場合不明瞭、不整形な赤化痕跡が存在していたにすぎない。これらに比べ長方形竪穴住居状遺構で発見される「炉」は、存在場所に規則性があり、固定的かつ永続的に用いられていた炉であるという共通性がある。

出土遺物としては、紫保井遺跡や、押入西遺跡から大形器台が発見され、ビシャコ谷遺跡では、大形器台を含む大量の土器が発見されている（報告書によると、壺形土器44個体、甕形土器13個体、高坏形土器５個体、器台形土器１個体、鉢形土器２個体、蓋形土器２個体が発見されて、その他、石庖丁未製品と考えられるサヌカイトと緑色片岩各１個体の石材、砂岩及び凝灰岩製とみられ砥石各１点、水晶チップなどが出土している）以外、特に通常の住居址と大きく異なる点はない。

発見頻度は竪穴住居址と比べて少数で、いずれもおおむね中期に属するという特徴もある。

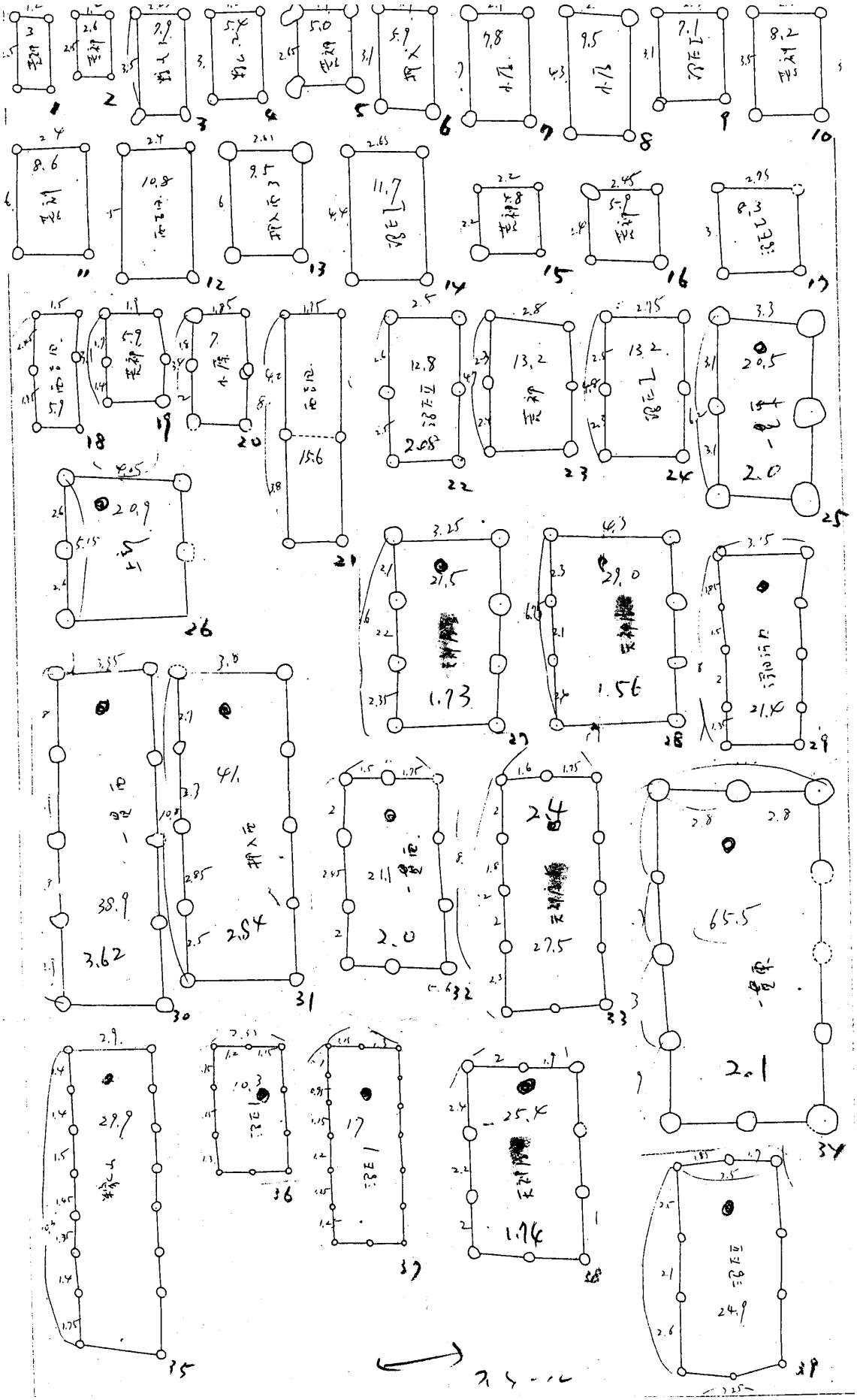
（2）機能

機能を推定するための要件は、以下の６点に要約できる。

１、最小のものは面積約５㎡ほどで、床幅も1.5ｍにすぎない。その中から炉の占める空間を差し引けば、とても人の居住する空間は見込めない。したがって、住居とは考えられない。

２、大小の変異が大きいとはいえ、この遺構のもつ基本的な性格は同一で、機能上も一連の施設と考えなければならない。

３、炉をもつという点が最大の特質となっていることから、火を用いる作業のための施設であることは疑いがない。



第２図　掘立柱建物（縮尺１/200）

遺構番号	遺跡名	遺構名	桁行（m）		梁行（m）		面積（㎡）	形式	推定時期	文献
1	荒神	建物8	2．5	1間	1．2	1間	3	Ⅰ	中・後期	1
2	荒神	建物1	2．15	1間	1．2	1間	2.58	Ⅰ	中・後期	1
3	糠山	建物3	3．5	1間	2．25	1間	7.87	Ⅰ	中期後葉	2
4	糠山	建物2	3	1間	1．8	1間	5.4	Ⅰ	中期後半	2
5	荒神	建物3	2．65	1間	1．9	1間	5.03	Ⅰ	後期初頭	1
6	押入西	建物Ⅰ	3．1	1間	1．9	1間	5.89	Ⅰ	後期初頭	3
7	小原	建物址3	3．7	1間	2．1	1間	7.77	Ⅰ	中期末	4
8	小原	建物址1	4．3	1間	2．2	1間	9.46	Ⅰ	中・後期	4
9	沼EⅠ	建物Ⅳ	3．1	1間	2．2	1間	6.82	Ⅰ	中・後期	5
10	荒神	建物6	3．5	1間	2．3	1間	8.05	Ⅰ	後期初頭	1
11	荒神	建物7	3．6	1間	2．35	1間	8.46	Ⅰ	中期後葉	1
12	西吉田	建物址2	4．5	1間	2．4	1間	10.8	Ⅰ	後期初頭	6
13	押入西	建物Ⅲ	3．6	1間	2．4	1間	8.64	Ⅰ	中期後葉	3
14	沼EⅠ	建物Ⅴ	4．4	1間	2．65	1間	11.66	Ⅰ	中・後期	5
15	荒神	建物9	2．2	1間	2．2	1間	4.84	Ⅱ	中・後期	1
16	荒神	建物5	2．4	1間	2．45	1間	5.88	Ⅱ	中・後期	1
17	沼EⅠ	建物Ⅷ	3	1間	2．75	1間	8.25	Ⅱ	不明	5
18	西吉田	建物址1	4．4	2間	1．5	1間	6.6	Ⅲ	不明	6
19	荒神	建物4	3．1	2間	1．9	1間	5.89	Ⅲ	中・後期	1
20	小原	建物址2	3．8	2間	1．85	1間	7.03	Ⅲ	後期初頭	4
21	西吉田	建物址1	8	2間	1．95	1間	15.6	Ⅲ？	中期後葉	6
22	沼EⅡ	建物Ⅰ	5．1	2間	2．5	1間	12.75	Ⅲ	後期初頭	7
23	荒神	建物2	4．7	2間	2．8	1間	13.16	Ⅲ	中・後期	1
24	沼EⅠ	建物Ⅶ	4．8	2間	2．75	1間	13.2	Ⅲ	不明	5
25	一貫東	掘立柱建物SB127	6．2	2間	3．3	1間	20.46	Ⅲ	後期初頭	8
26	上部	SB109	2．2	2間	4．05	1間	8.91	Ⅲ	後期末	9
27	天神原	建物3	6．65	3間	3．25	1間	21.61	Ⅲ	後期	10
28	天神原	建物2	6．75	3間	4．3	1間	29.02	Ⅲ	後期	10
29	深田河内	建物址1	6．7	3間	3．15	1間	21.1	Ⅳ	中期後葉	11
30	一貫西	建物址2	11．6	4間	3．35	1間	38.86	Ⅳ	中期後葉	12
31	押入西	建物Ⅱ	10．8	4間	3．8	1間	41.04	Ⅳ	中期後葉	3
32	一貫西	建物址1	6．45	3間	3．25	2間	20.96	Ⅴ	中期後葉	12
33	天神原	建物5	8．1	4間	3．35	2間	27.13	Ⅴ	後期	10
34	一貫東	掘立柱建物SB101	11．8	4間	5．6	2間	66.08	Ⅴ	後期前葉	8
35	糠山	溝8	10．3	7間	2．9	1間	29.87	Ⅵ	中期後葉	2
36	沼EⅠ	建物Ⅱ	4．4	3間	2．35	2間	10.34	Ⅵ	不明	5
37	沼EⅠ	建物Ⅲ	6．85	6間	2．45	2間	16.78	Ⅵ	不明	5
38	天神原	建物4	6．65	3間	3．9	2間	25.93	Ⅴ	後期	10
39	沼EⅡ	建物Ⅱ	7．2	3間	3．55	2間	25.56	Ⅴ	中期後葉～後期初頭	7

表２　掘立柱建物一覧（遺構番号と第２図の番号は一致）

文献

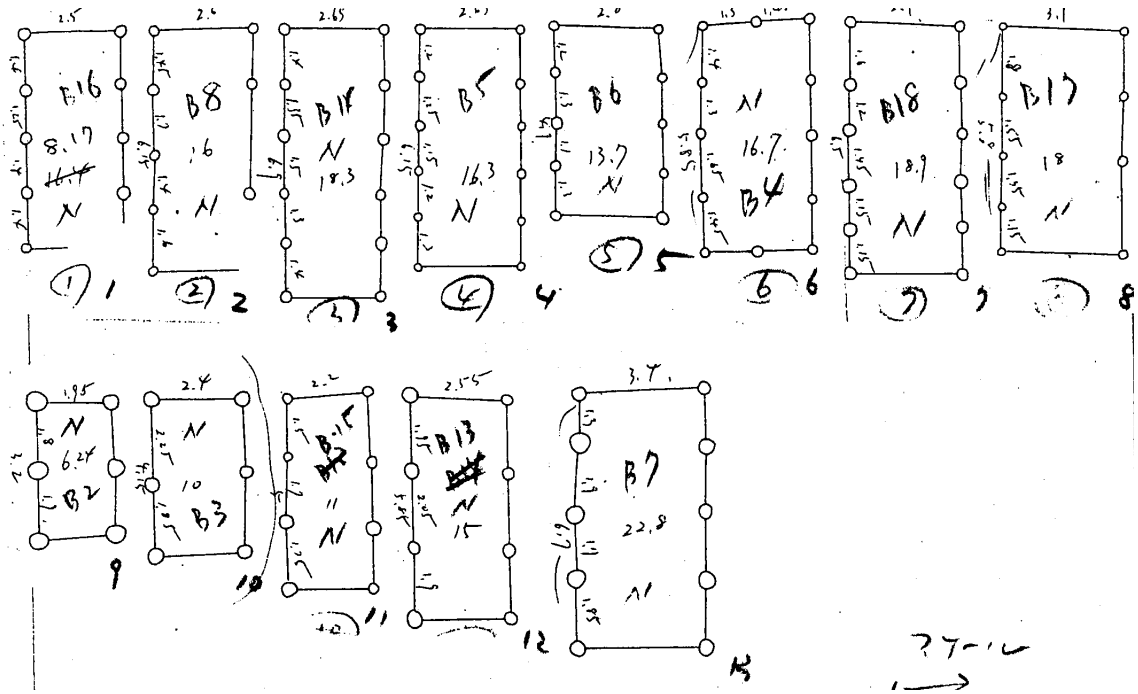
1「荒神遺跡」『糠山遺跡群Ⅰ』　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　１９７９
2「糠山遺跡」『糠山遺跡群Ⅰ』　久米開発事業に伴う文化財調査委員会　１９７９
3「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第３集』　岡山県教育委員会　１９７３
4『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集　津山市教育委員会　１９９１
5『沼Ｅ遺跡』岡山県埋蔵文化財報告９』　岡山県教育委員会　１９７９
6『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集　津山市教育委員会　１９９１
7『沼Ｅ遺跡Ⅱ』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集　津山市教育委員会　１９８１
8『一貫東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集　津山市教育委員会　１９９２
9『上部遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集　津山市教育委員会　１９９０
10「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第７集』　岡山県教育委員会　１９７５
11『深田河内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集　津山市教育委員会　１９８８
12『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集　津山市教育委員会　１９９０

４、床面にサヌカイトチップが散布していると報告された例はなく、石器などの工具、狩猟具などの製作施設とは考えにくい。あるいは金属滓、金属片、鍛冶工具などの発見例もなく、金属製品の加工場なども同様考えにくい。

５、集落遺跡で発見されるその他の遺構との位置関係、発見頻度などからみて、住居数棟に１棟の割合で普遍的に存在していた可能性が強く、日常的な役割をになっていた施設と考えられる。ただし現在発見されている長方形竪穴住居状遺構は、おおむね中期のものに限られている。

６、完形土器多数の出土例があることから、女性の作業空間を暗示している。

以上の点を総合すると、長方形竪穴住居状遺構は炊事施設（いわゆる釜屋）以外は考えられない。



第３図　奈義町野田遺跡の掘立柱建物

遺構番号	遺跡名	遺構名	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	形式	時期	文献
1	野田	建物16	5．45　4間	2．5　1間	13.62	Ⅵ	中期後半	1
2	野田	建物8	6．15　4間	2．6　1間	15.99	Ⅵ？	中期後半	1
3	野田	建物14	6．9　5間	2．65　1間	18.28	Ⅵ	中期後半	1
4	野田	建物5	6．15　5間	2．65　1間	16.29	Ⅵ	中期後半	1
5	野田	建物6	4．9　4間	2．8　1間	13.72	Ⅵ	中期後半	1
6	野田	建物4	5．85　4間	2．95　2間	17.25	Ⅵ	中期後半	1
7	野田	建物18	6．5　5間	2．95　1間	19.17	Ⅵ	中期後半	1
8	野田	建物17	5．85　4間	3．1　1間	18.13	Ⅵ	中期後半	1
9	野田	建物2	3．2　2間	1．95　1間	6.24	Ⅲ	中期後半	1
10	野田	建物3	4．15　2間	2．4　1間	9.96	Ⅲ	中期後半	1
11	野田	建物15	5　3間	2．2　1間	11	Ⅲ	中期後半	1
12	野田	建物13	5．85　3間	2．55　1間	14.91	Ⅲ	中期後半	1
13	野田	建物7	6．7　4間	3．4　1間	22.78	Ⅳ	中期後半	1

表３　奈義町野田遺跡の掘立柱建物一覧（遺構番号と図３の番号は一致）

文献

1『野田遺跡』　　野田遺跡調査委員会　　１９８４

（３）文献、民家史からの検討

近藤義郎・渋谷泰彦編『沼弥生住居址群の研究』1957の渋谷泰彦「竪穴住居址群の復元的研究」で、渋谷は古文書の中にみられる建築形態は板葺屋、草葺真屋、草葺東屋の三種類と指摘し、このうち真屋を大日本国語辞典の説明によって「いみびや」、「いむびかしきや」（斎火炊屋）すなわち炊事場と解釈している。真屋即斎火炊屋となるのかどうか判断できないが、その出典である皇太神宮儀式帳（註２）には神宮の建物規模が記録されており、炊屋に関連があるとみられる建物規模を列挙すれば

御酒院一院

大炊屋一間。長二丈、弘一丈、高七尺

禰宜斎館一院

炊屋二間。

斎火炊屋一間。大炊屋一間。

竝長一（二イ）丈五（六イ）尺（弘一丈二尺イ）高八尺

（五尺イ）（イ丈）

宇治大内人斎館一院

斎火炊屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

厨一間。長三丈、弘一丈、高八尺

大内人二人宿館二院

厨大炊屋二間。長各三丈、弘一丈二尺、高八尺

物忌并小内人宿館五院

斎火炊屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

厨屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

大炊屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

宮守物忌斎館屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

斎火屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

地祭物忌斎館屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

斎火炊屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

荒祭物忌斎館屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

斎火炊屋一間。長二丈、弘九尺、高八尺

などがある。

ここで特に注目したいのは、皇太神宮儀式帳のなかの炊屋、厨の多くが「長二丈、弘九尺、高八尺」の大きさにあることである。当時の尺を約30㎝と想定すれば、その施設は、長さ約６m、幅約2.7m、高さ約2.4mということになる。この数字から推定される建物の床規模は沼Ｅ遺跡第１次調査建物Ⅰ（第１図13）と類似し、少なくとも床面形態が相似の関係にあることが分かる。床面形態が類似するからといって、大きく時代の異なる建物の機能を同一視できないが、「炊屋」が長方形竪穴住居状遺構の平面形態に類似するということは、その機能を推定する上で、有力な手がかりとはなる。

民家史からみても、古代は釜屋を異にする二棟形式の住居が一般的であったと考えられており、分棟形の民家建築から炊事施設が母屋に取りこまれていく過程も復元されている。永い民家史からみて、弥生時代に分棟型の居住形式を想定して不自然なことはない。

４．掘立柱建物の機能

（1）研究史からの評価

１　宮本長二郎によると、Ⅰ及びⅢは高床建物と考えてほぼ誤りがないということである（註３）。高床で梁幅が狭いことを考えれば、住居とは考えられず倉庫の可能性が高い。岡山市の南方遺跡で発見された分銅形土製品裏面に描かれている高床倉庫の線刻画（註４）は、１間２間の柱配置で、棟持柱の存在を別にすればこれらのものにおおむね一致する。ただし、これらのうちには、梁間が３mを越すものもあり、それらは後期のものに限られるので、Ⅴと同種の可能性を考えておく必要はある。

２　そのⅤは、後期に出現する形態で、梁間が６mにせまるものがあり、平地建物で作業場や住居の可能性

も考慮される。

３　Ⅵは、そのほとんどが長方形竪穴住居状遺構の床面を消失したものと考えられる。

４　問題はⅣで、押入西遺跡や一貫西遺跡で発見された大形の建物は、床面積が30～40㎡もある。倉庫説、首長住居説、神殿説などがあるが、機能に迫る具体的な研究はない。押入西遺跡例では、柱抜き取り穴に多数の土器が押し込まれた状態で発見され、鮒込遺跡ではⅢの高床倉庫址と考えられる柱穴で同様の現象がみられた。建物の移築に際し祭りがおこなわれた痕跡と捉えられる。そこで、この建物の機能については次に（２）で観点を替えて考えてみたい。

（２）住居群配置からの推定

説明が長くなるが、押入西遺跡の構造（第４図、註５）からせまってみよう。押入西遺跡の弥生集落は中期後葉のもので、比較的限られた期間に存在した集落址である。B地区の住居は２棟１単位になっているものがほとんどで（第４図―イ）、単位住居間の切りあいも確認されている。したがって２棟の単位住居は連続した建替えの軌跡と捉えられ、その基本パターンは集落全体を貫徹していた可能性がある。たとえば、相似した高床倉庫と見られる建物２棟が同一平面に存在し、両者は建替えの軌跡である可能性が強い（第４図―ロ）。問題の大形建物が位置する同一平面上をみると、１間１間の掘立柱建物が２棟存在し、その２棟は先の分類で高床倉庫と推定される部類に属する。両者の規模の相違は問題となるものの、先のような見方が可能とすれば、論理的にはその大形建物も高床倉庫址ということになる。

この両者の規模の大小という問題も、その倉庫の集団内での位置付けの変遷を示すと捉えれば、機能の違いを問題にしなければならないほどの理由にはならないように思う。現在知られている事実から建物Ⅳの機能を推定するとすれば、高床倉庫の可能性がもっとも高い。

５．今後の課題

（１）こだわる理由

長方形竪穴住居状遺構が炊事施設ではないか、と問題にしたのは1979年のことである。以後今日までその遺構の性格は確定せず、というよりはそのようなことは問題にされず、今日に至っている。しかし考えてみれば、竪穴式住居址にしても住居であるという決定的な証拠が提示されている訳ではなく、大方が住居と認めているからにすぎない。遺構の機能推定は、そう考えて矛盾した事実が発見されないこと、多数が納得するかどうかにかかっている、といってもよい。

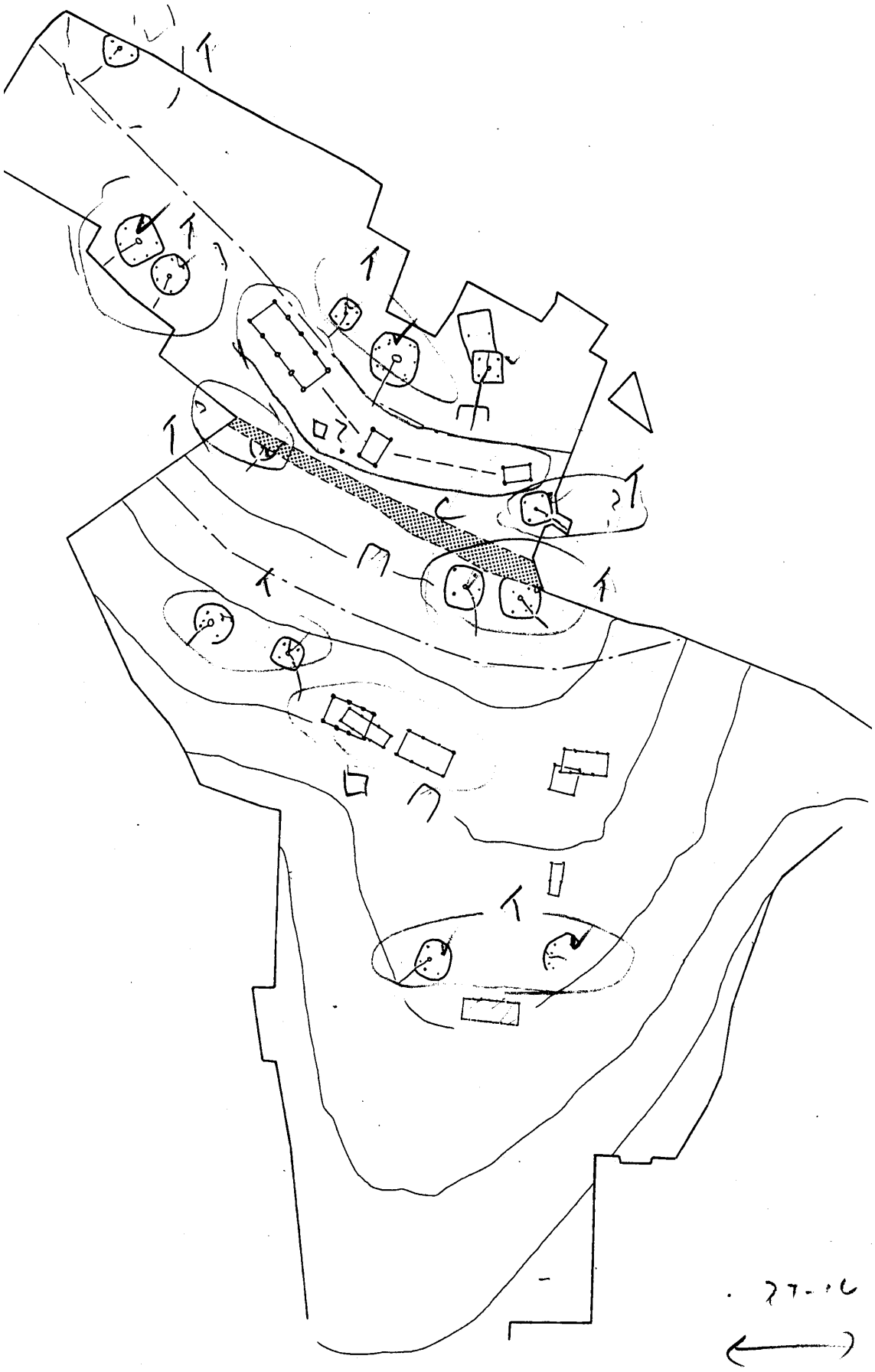
というわけで、今一度長方形竪穴住居状遺構の機能推定にこだわっている理由を説明しておきたい。

長方形竪穴住居状遺構を「炊屋」と推定してよいということになれば、共食単位を推定する有力な手がかりが得られる。この共食範囲を遺構の上から復元できれば、その集落の家族構造を分析する上で基本となる指標が得られることとなる。いうまでもなく「家族」は社会的にみて最小の単位であり、もっとも基本的な社会関係を形成している。特定の家族の構造は特定の社会関係を築く基本であり、家族構造は大きく社会の構造を規定しているといってもよい。

近頃、新聞紙上で弥生時代の「国」とか「弥生都市」「首長の居宅」「神殿建築」などの見出しがおどっているが、賑やかなわりには弥生社会のイメージは伝わってこない。基本的なイメージが、不透明なためではないか。

（２）それではどうするか

むろん共食の範囲がわかったからといって、家族の構造が分かるという訳ではない。しかし、共食の範囲を基準にすれば、財産の管理主体、地位継承形式・財産相続関係なども遺跡、遺構からせまる道が開かれる



第４図　押入西遺跡Ｂ地区遺構配置模式図

イ　竪穴住居単位関係　　ロ　掘立柱建物単位関係　　ハ　長方形竪穴住居状遺構

―・―・―・― 住居群単位分割想定線

というものだ。この意味で、「単位集団」という概念は有効だったのである。調査事例が豊富になった今日、より具体的に、遺跡単位に、単位となるモデルの抽出を重ね、その相互比較の必要性が増している。

また、地位継承形式や財産相続形態などは墓地遺跡からつかみだされることが多く、集落遺跡と墓地遺跡から引き出されたモデル相互の整合性に留意して分析を重ねれば、基本的な社会構造を復元する道も、そう遠くないように思う。

（註１）この種の長方形の竪穴は、1951年に奈義町野田遺跡で発見されたのが最初の例となった。その後1954年におこなわれた沼遺跡の第２次調査で同様の遺構が調査され、近藤義郎により「共同体と単位集団」としてまとめられた弥生集落論の構成要素となったため注目されるところとなった。その機能としては作業場ないしは納屋が考えられていたが、沼の住居群の中心的位置に存在していたこと、規模が大きいことなどから、若者宿や集会所などと推定する向きもある。その後、1973年に落合町旦原遺跡で「長方形の住居址」が発見され、沼遺跡の作業場説をより具体的に限定し「石器製作の作業場＝工房」と位置づけている。

（註２）塙保己一「群書類従」第１輯　神祇部　　1932　続群書類従完成会

（註３）宮本長二郎「弥生・古墳時代の掘立柱建物」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版1996

（註４）「上伊福・南方（済生会）遺跡（南方蓮田調査区）Ⅱ」岡山市埋蔵文化財調査の概要1994（平成６）年度　岡山市教育委員会　1996

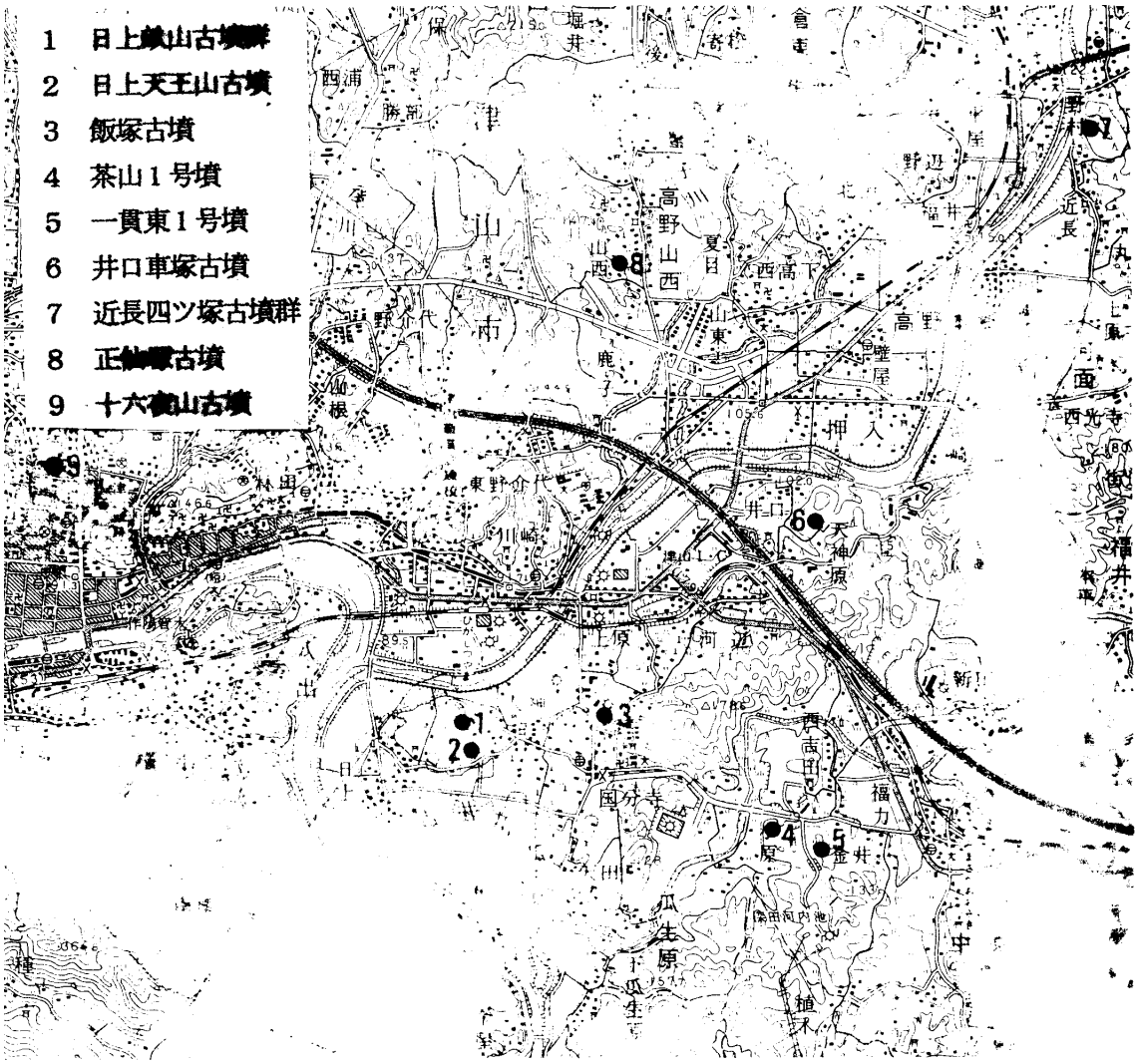
（註５）安川豊史「押入西遺跡」『岡山県史』第１８巻　考古資料　岡山県史編纂委員会　1986　山陽新聞社

（2）津山市日上畝山古墳群出土の樽形○

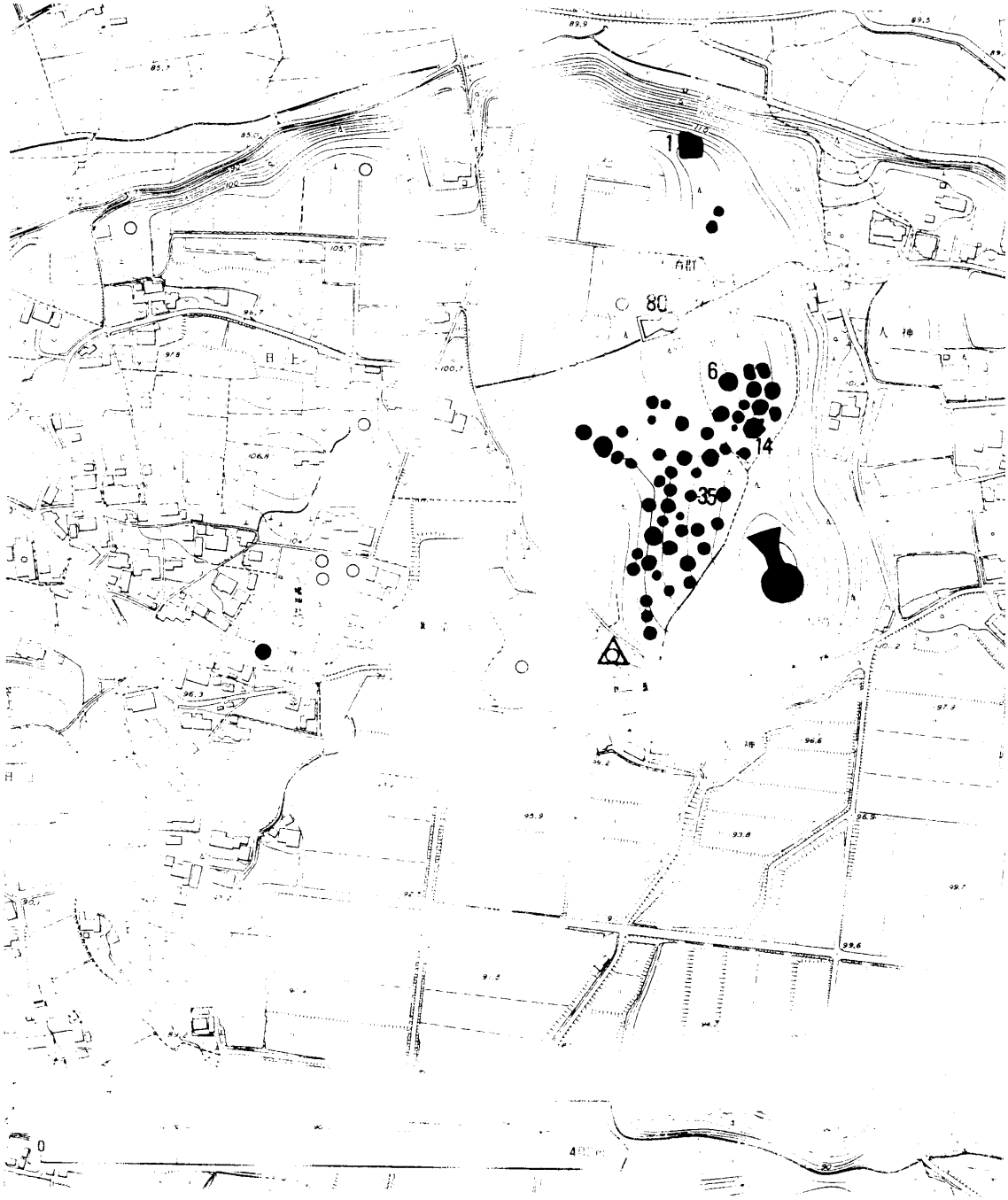
小 郷 利 幸

１．はじめに

日上畝山古墳群は、岡山県津山市日上に位置し、現市街地の東部で吉井川と加茂川との合流する単独丘陵上に立地する（第１図１）。約4.7haの丘陵内に現在円墳約54基、方墳２基の計56基が確認できる（第2図)。古くから須恵器などの出土が知られ（日上高祖神社裏古墳など、註１)、古墳群中の数基（前方後円墳１基・円墳３基）は昭和42年に調査されている。この前方後円墳（第２図80号墳）は全長31.4ｍ、墳丘は削平されていたが、鏡・鉄刀・鉄斧・須恵器・埴輪などが多数出土している（註２)。また、平成７～９年度に津山市教育委員会が古墳群全体の墳丘測量調査と古墳４基を調査している（註３)。調査した古墳は１・６・14・35号墳で、１・14号墳は方墳、６・35号墳は円墳である。１・14号墳は出土遺物として鉄器があるのみで、６・35号墳には須恵器・鉄器など副葬品が多く見られる事から、これら墳形や副葬品の違いは、古墳の時期差を反映しているものと考えられる。６・35号墳は出土遺物から６世紀初頭から前半頃に築造されたものと考えられる。また、１号墳には２基の埋葬施設があり、これがＴ字形に配置されている。こ

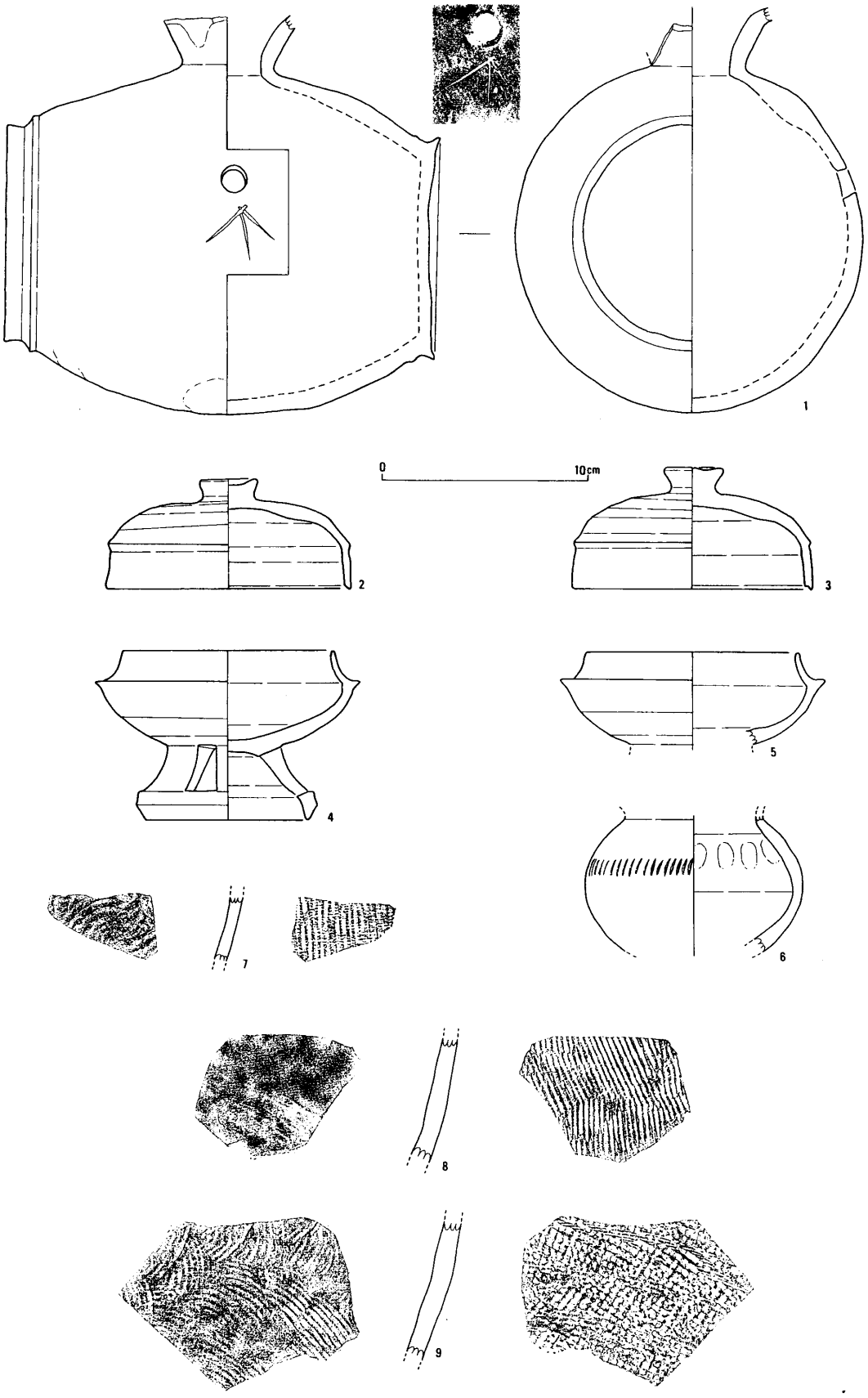


第１図　日上畝山古墳群周辺主要古墳分布図（Ｓ＝１：50,000）



第２図　日上畝山古墳群全体図（Ｓ＝１：5,000、註３より引用一部改変）

れは隣接して存在する全長56.9ｍの前方後円墳である日上天王山古墳（註４）の埋葬施設の配置に似ている。この事から１号墳は日上天王山古墳に近い時期と推測され、さらに14号墳は５世紀前半頃と推測されており、いずれも６・35号墳よりは先行するものと考えられている。今回紹介する資料は古墳群の南端、地元の有木邦城氏（故人）所有地から昭和61年頃出土したもので、平成５年度に津山市教育委員会へ寄贈されたものである。寄贈資料は、須恵器片約13点と鉄刀の残片１点である。寄贈者によると出土場所は現在宅地となっており（第２図△）、おそらく古墳の墳丘そのものはすでに削平されているものと考えられ、今回紹介する遺物もその際に出土したものと推測される。ただこれらの出土状況等の詳細については不明である。



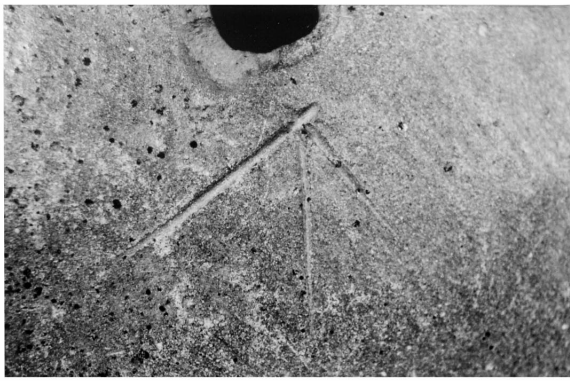
第3図　出土遺物（S＝1：3）

1

1

1

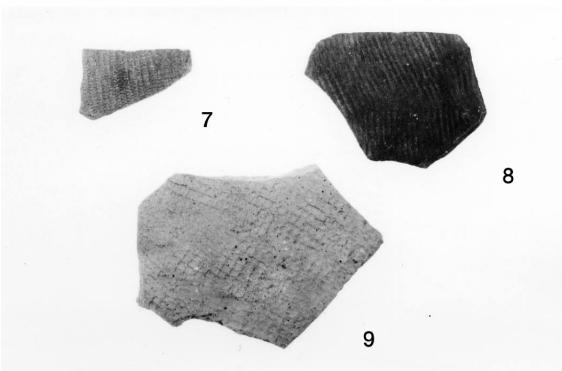
1

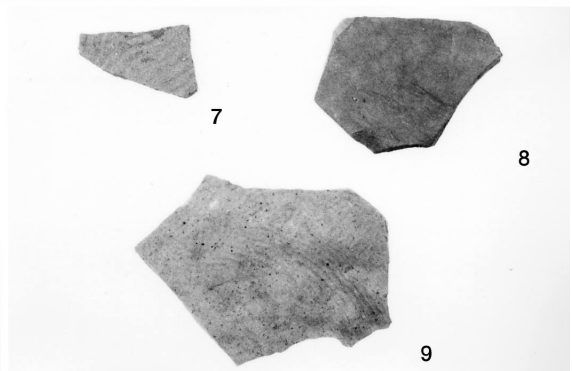


3
2

4

6


7
8
9


7
8
9

２．資料紹介（第３図、図版１）

須恵器は、有蓋高杯２、同蓋２、樽形○１、○１の他甕の破片が６点ある。 鉄刀は錆により剥がれ落ち芯部分のみ残る。その内図示したのは須恵器９点である。

１は樽形○である。口縁部が一部欠損する以外ほぼ完形である。現高19.1㎝、胴部長さ20.9㎝、同最大径16.7㎝、同両端側面径10.4～10.6㎝を測る。胴部中央やや上側に円孔があり、その下にヘラ記号〔 〕がある。松葉に１本線を加えた３本線で表現し、書き順は右２本の順番は明瞭でないが、左の１本は右２本を切っているようである。胴部の表面には模様などは見られず、成形時のタタキの痕跡がほとんど撫で消されているが、部分的に残っている。また、表面には焼成時にできた焼き膨れが数箇所観察され、自然釉が付着する。側面の端部はつまんで突帯状となっており、さらに内側の胴部上にも稜線が1条めぐっている。また向かって右側の側面のみやや内側にへこんでいる。焼成は良好で色調は暗青灰色、１㎜以下の砂粒を含む。

２・３は有蓋高杯の蓋でいずれも完形である。２は口径11.8㎝、器高5.3㎝、口縁端部は面をもち、天井部との境はやや鈍い稜をもち、天井部の３分の２程に回転ヘラケズリを施している。天井のつまみは中央がくぼんでいる。３は口径11.6㎝、器高5.9㎝、形態の特徴は２とほぼ同じであるが、つまみの中央と端部の間のみがくぼみ２とは形態が異なる。器高が２より若干高い。両者ともヘラケズリの際のロクロ回転は時計回りである。焼成は良好、色調は淡青灰色、 ２㎜以下の砂粒を含む。

４は有蓋高杯で口縁部約２分の１が欠損する。口径10.2㎝、器高8.3㎝、口縁端部は面をもたず丸く仕上げている。脚部も短脚で端部は下部につままれ、透孔は長方形で３カ所である。焼成は良好で色調は青灰色、 １㎜以下の砂粒を含む。

５も有蓋高杯であるが脚部などが欠損する。口縁部約４分の１の破片で口径を復元すると10.2㎝、現高4.5㎝を測る。口縁端部は丸く仕上げている。焼成は良好で色調は淡青灰色、 １㎜以下の砂粒を含む。

６は　の胴部と考えられるが、破片の部分に円孔は見られない。胴部外面の肩付近に列点文が巡っており、この部分の内面には指頭圧痕が見られる。焼成は良好で色調は乳青灰色、 １㎜以下の砂粒を含む。

７～９は甕の破片である。図示した以外にも破片は３点あるが、いずれもこれらと同一個体と考えられる。７は外面に平行タタキ、内面は当て具痕の同心円が見られ、８の外面は平行タタキ、内面は当て具痕をナデ消している。９の外面は格子タタキ、内面は当て具の同心円が見られる。いずれも焼成は良好だが、色調は暗青灰色～乳青灰色で８のみ断面がセピア色、 ２㎜以下の砂粒を含む。

鉄刀は寄贈時にすでに錆びにより剥離が著しく、芯の部分のみ残存する。そのためどちらが切先であるかも判然としない状態である。そのため図示していないが、残存長88㎝、最大幅2.5㎝を測る。

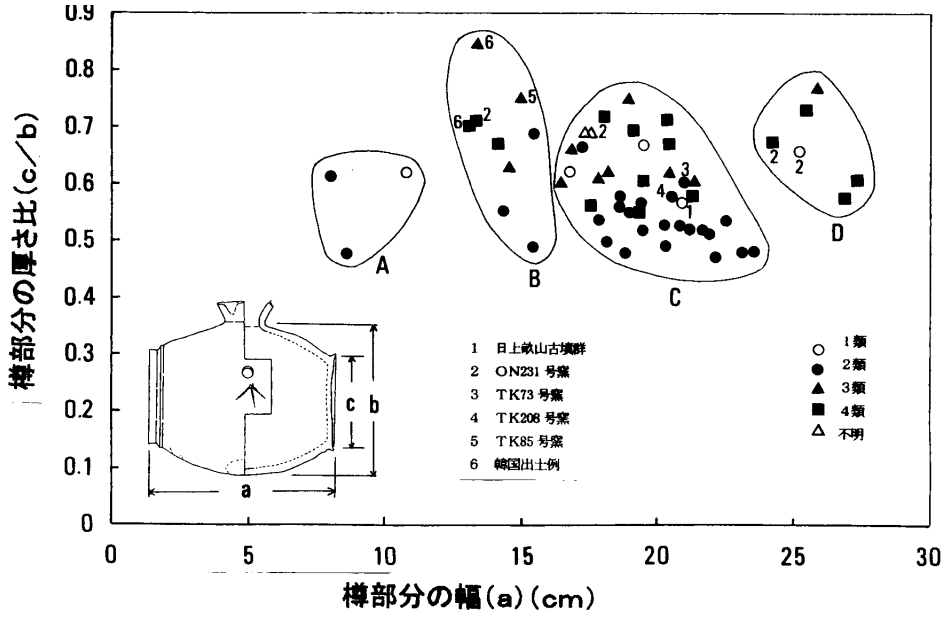
以上、これら須恵器から時期を推測すれば有蓋高杯の特徴から、大阪陶邑窯の田辺編年でＴＫ23～ＴＫ47型式（註５）、中村編年のⅠ型式４～５段階（註６）、美作地方の須恵器編年のⅡ～Ⅲ期（註７）に併行するものと考えられ、５世紀末から６世紀初頭頃の所産と考えられる。これらの時期はすでに調査されている日上畝山６・35号墳（ＴＫ47型式～）とほぼ同時期でもある。

３．樽形○について

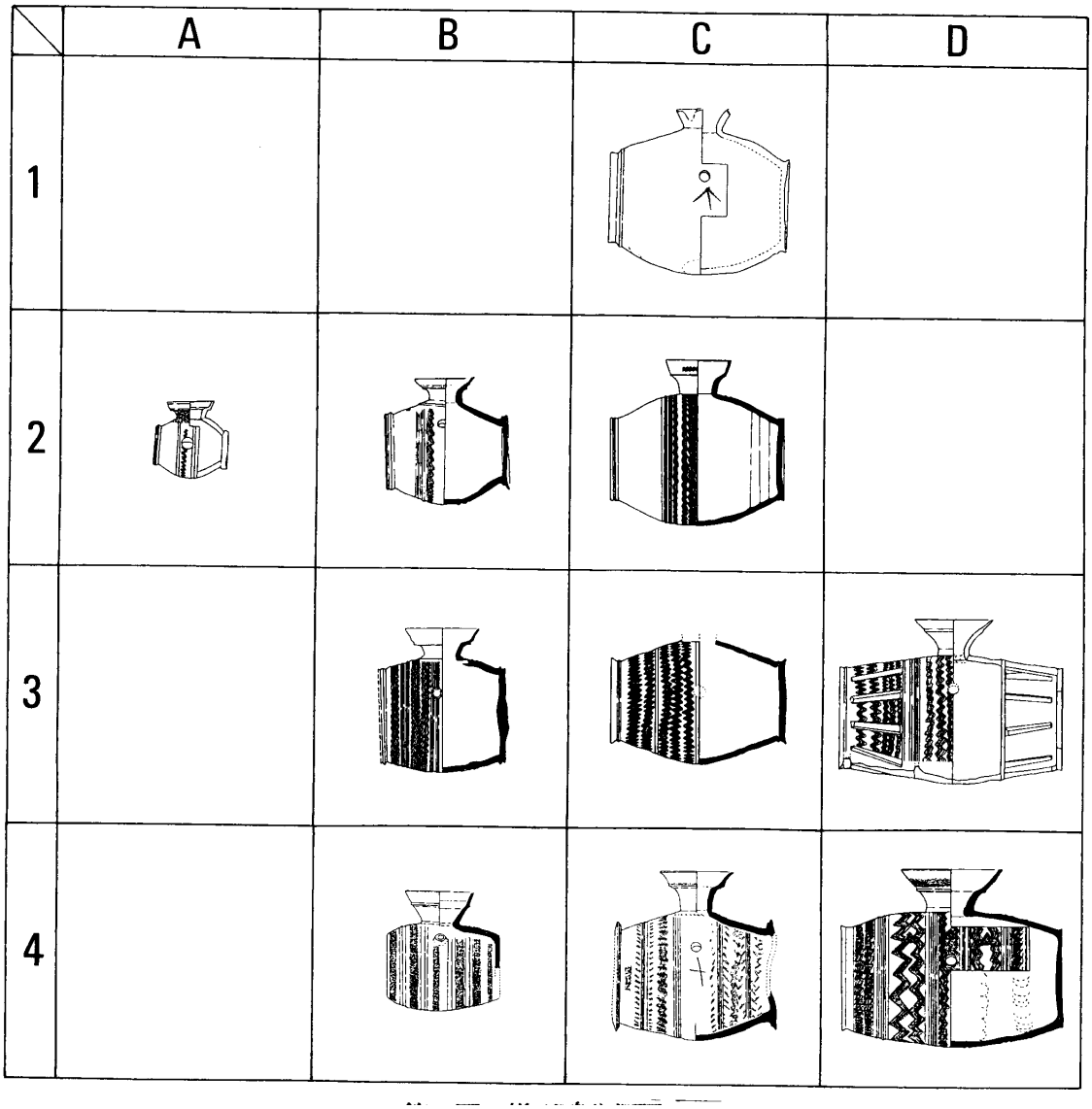
（分布）

須恵器の樽形○は、ビア樽を横にした形の胴部中央に円孔を施し、通常○と同様な口縁部がつく器形である。岡山県内では他に２例の出土を確認している。１例は山陽町・宮山４号墳から出土し、この古墳は一辺19mの方墳で葺石をもち埋葬施設は不明だが、周溝の墳端部分から円筒埴輪、家形埴輪や他の須恵器と共に出土している（第７図２、註８）。共伴する須恵器は陶邑編年ＴＫ208型式（註５）併行であり、本例と形

態は良く似ている。もう１例は破片で同じく山陽町・桜古墳から出土している（註９）。
また、この樽形○の出土を見ると知見の限りでは、北は宮城県から南は鹿児島県までの地域で101遺跡約136例（第１表参照）の出土を確認しているが、量的には非常に少ない器形である。特に窯からの出土例は、大阪・陶邑ＴＫ73号窯（第８図47、註６）、ＴＫ208号窯（同51、註５）、ＯＮ231号窯（同54－１～７、註10）、福岡・山隈窯（第7図18、註11）、八並古窯（註12）、宮城・金山窯（註13）などがあり、その中で陶邑地域ではＯＮ231号窯の時期に初めて焼かれ、ＴＫ23型式（Ｉ型式４段階）以降の窯からは発見されておらず、この時期に生産はほとんどおこなわれなくなると考えられている（註６）。その場合、本例が共伴する有蓋高杯と同じＴＫ23～ＴＫ47型式併行とすると、新しい時期の類例となる。
（出土状況）
次に出土例を生産地（窯）以外の場所で整理してみると、本例のように古墳に供献されているもの、集落内の住居から出土したものや河川の周辺で他の土器と一緒に出土し、その出土状況から集落内の祭祀的なものと理解されるものもある。特に古墳の出土例は、前方後円墳からの出土もあるが比較的小規模な円墳や方墳からの出土が多い。また、ほとんどが１個体で複数個体出土したものは少なく、埋葬施設内に副葬されるものはほとんど無い。その出土状況から棺上に他の須恵器と供献されたもの（註14）、周溝などに供献されたと推測されるもの（註15）がある。またその中には故意に破砕されていると推測されるものもあり、本例のように口縁部のみ一部欠損するものもある。これら事例から、一部ないしはそのほとんどを破壊するといった行為が、樽形○においてはおこなわれていた可能性も指摘できるが、他の器種でも同様な行為があるのか整理する必要があり、現時点ではやや資料不足である。
（分類）
樽形○についての研究は、九州地方の類例を側面の形態で分類を試みたもの（註16）、ＯＮ231号窯の類例を同様に側面形態で分類を試みたもの（註17）がある。後者の分類によると側面の端部に突帯がめぐるものとそうでないもの、めぐるものの内側にさらに稜をもつものの３者に分けられる。その内前２者は初期の段階で消滅し、突帯の内側に稜をもつもののみが主流となる。今回類例を集めた結果、指摘どおり突帯の内側に稜をもつものが大半である。そのためこの側面形態については後で検討するとして、今回はとりあえず胴部分の各計測値と外面の区画と装飾の有無で比較検討を行うこととする。胴部の長さ（ａ）と、突帯を含まない側面の径（ｃ）を中央最大径（ｂ）で割った数値（ｃ／ｂ）で比較をおこなったのが第４図である。この図は胴部分の長さと膨らみ具合の関係を表し、ｃ／ｂの数値が小さい程、胴部中央の膨らみが大きい事をあらわしている。なお胴部分の計測値が得られた59点についての比較図であるため、今後資料が増加すればさらに検討する余地はある。現状で分類をおこなうと、胴部の長さ13㎝前後で大まかに２種類に分類でき、さらに後者については、分布のばらつきが大きく明瞭なグルーピングは難しいが、13㎝～16㎝、16㎝～24㎝と24㎝以上のグループに大まかに分かれそうである。将来的にはさらに細分等が可能である。ここでは幅13㎝以下（Ａ類）、13㎝～16㎝（Ｂ類）、16㎝～24㎝（Ｃ類）、24㎝以上（Ｄ類）とに分類する。さらに外面の調整で4種類に分類した。この樽形○のほとんどは、中央の円孔をはさみ左右対称の区画及び模様構成がほとんどである。そのため、これを重視し特に円孔左側の区画と模様構成のみで分類した。文様構成の分類は第５図に示している。
１類は凹線などによる区画は無く、波状文などによる装飾も施されていないもの。本例がこれに含まれる。
２類は凹線などでほぼ２区画に分け、その右側（円孔側）１区画のみ装飾を施すもの。全体では中心の円孔部分などにも凹線などで区画のみを施すものがあるため３～４、多いものでは６区画に分けられ、円孔を挟んだ区画のみ装飾を施すものを基本とする。さらに側面にも装飾を施すものとそうでないものとがある。



第４図　樽形○分布図



第５図　樽形○分類図

３類は２類と同様に２区画に分けられるが、その両区画に装飾を施すものを基本とする。全体では３～４区画に分けられ、全区画に装飾を施す。さらに側面にも装飾を施すものとそうでないものとがある。

４類は２～３カ所の凹線などにより全体で５～７区画に分けられ、各区画に装飾が施されているものと、施されない区画があるものとがある。さらに側面に装飾を施すものとそうでないものとがある。将来的には区画数などで細分が可能である。

（変遷）

これら樽形○には窯の資料が含まれているため、とりあえず陶邑地域の窯の資料から変遷を試みてみる。まず一番古い窯の資料としてはＯＮ231号窯（註10）がある。この資料にはＢ４、Ｃ１・４，Ｄ１・４類の類例があり、規模の比較では胴部の長さをみても最小で13㎝前後から最大で24㎝前後とかなりのばらつきがある。また前述したように側面の形態も異なり、円孔部分が棒状の注口となっているものもある。そのため樽形○については複数工人の系譜がこの中に読み取れ、まだ画一化した器形となっていなかったものと推測される。ちなみに韓国での出土例は全羅南道の万樹里２号墳（第９図102、註18）などがあり、これを先の分類にあてはめるとＢ４類に分類され、形態の特徴はＯＮ231号窯の中に良く似たものがあるが、これには注口がついている（第８図54－１）。韓国の類例にも注口は見られないため、注口付きの樽形○は日本独自のものとされるが、焼成時に折れやすい制作上の理由からこの形態は受け入れられなかったとされる（註17）。また、この注口付き樽形○については、ＴＫ87号窯出土の注口付き樽形土器（同50、註６ａ）が系譜としてたどれるものと考えられており（註19）、さらにこの土器が注口付き樽形○の可能性を指摘した見解（註17）もある。この土器については筆者も樽形○の系譜を引くものとして取り扱っている。

また、同様に複数の類例が見られるものにＴＫ83号窯（註20）があり、Ｂ３、Ｃ３、Ｄ４類がある。またＴＫ85号窯（第８図46、註６）はＢ２類、ＴＫ73号窯（同47、註６）はＣ２類、ＴＫ208号窯（同51、註５）はＣ２類である。このＴＫ73号窯、ＴＫ208号窯は、時期的に異なるものであるが同一に分類される。ただ前者には破片のため全体像は不明だが３類と思われるものがあり、両者のＣ２類を比べると胴部の膨らみ具合が若干異なっており、これら膨らみ具合から時期的な変遷がおえるものと推測される。

以上の窯資料から言えば、これら模様構成のみからの変遷は難しく、これら模様による装飾の変化には胴部の形態変化などが微妙に関連しているものと推測される。そのため、現状では明瞭な時期的変化としてはとらえにくい。この事は樽形○の工人の系譜が複数存在するためと考えられる。少なくとも最古段階の樽形○の出土するＯＮ231号窯には複数の類型が存在する事から、この各々を例えば工人の違いと考えると、次の時期にはこれら系譜が基になって、Ｂ類のＴＫ85窯（Ｂ３類）、Ｃ類のＴＫ73号窯（Ｃ２類）などに系譜が引き継がれていったものと推測される。その後はほぼＴＫ208型式の段階になってＣ２類に統一されていったと考えられる。その事は第４図でＣ３～４類のｃ／ｂの値は、0.6以上つまり胴部の膨らみがさほど無い円柱形に近いものが多く、胴部の長さには大きなばらつきがある。逆にＣ２類は0.6以下のものが大半で中央部の膨らみが大きい器形で、長さも20㎝前後に集中し、細かく見ると長さ17～19㎝、20～23㎝に分布領域が集中し、ほぼ形態が規格化されている事からも伺える。さらにＣ２類の分布を見ると、他の類型では出土例の少なかった関東・東北地方など広範囲におよんでいる事がわかる。

次に問題となるのが本例のようなまったく装飾の無いＣ１類である。類例も少ないが、少なくとも凹線などによる区画や装飾が簡略化してくる変化を、おおまかな時間的変化としてとらえると、このＣ１類はＣ２類よりは後出する可能性が指摘できる。ただ、模様が無いものはＯＮ231号窯にもあり（第８図54－３）、明瞭な時間的変化としてとらえるべきか即断できない。また本例の側面形態で、突帯内側の稜は胴部側についており、これを簡略化した新しい要素として捉える事も可能であるが、ＴＫ73号窯にも見られる特徴でも

ある。また突帯はあるが内側に稜をもたないのが京都・高田山２号墳（第９図66、註21）にあり、本例とは胴部の膨らみ具合が異なる。さらに土師質の類例もある（第９図63、註22）。

また、B類は類例が少ないが、韓国の類例がいずれも含まれる。C類同様にＢ３・４類の第４図でのｃ／ｂの値は0.6以上で、Ｂ２類の値は0.6以下が多い。窯資料は少ないがC類同様の変遷がたどれるものと推測される。ただ窯資料以外では現状で近畿地方と九州地方に類例があるため、類例の増加をまって検討が必要である。

D類は７例ありＯＮ231号窯（第８図54－６・７）、ＴＫ87号窯（同50）の他福岡、熊本、鳥取の古墳（第７図９、34－１・２、20、註23）から出土している。ＯＮ231号窯やＴＫ87号窯の類例は樽形ではあるが、口縁部や円孔が存在しないものである事から、他の類例に系譜的に直接結びつく可能性は少ない。熊本・鳥取の例は形態が良く似ており文様構成も３・４類である。また、側面の形態は突帯のめぐらないものがあり、この形態は初期の段階で消滅するとされ、代表的なＯＮ231号窯の類例（第８図54－１）と比べても明らかに大きさや注口の有無が異なり、どちらかと言えば西日本に分布が多い。そのため、九州地方に系譜を求めることも可能である。ただＤ２類の類例が現状で見られないためＢ・C類と同様な変遷をたどるのか、時期的に異なるのか、明確な窯の資料が無く今後の課題である。

A類とされるものは広島、鳥取、三重、滋賀から出土している（註24）。広島・鳥取（第７図４、５）の例はいずれも古墳からの出土で、前者はＡ２類に分類できそうであるが、後者は円孔部分にのみ帯状に文様がありＡ１類というよりはＡ２類の退化形態と考えられる。また後者は共伴する須恵器からＴＫ23～ＴＫ47型式併行と考えられている。窯の資料でないため時期については明瞭でないが、これを尊重すれば時期的変遷としては、A類はＢ・C類の後に出現し、非常に胴の長さの短い小形になる。これについては類例が少ないためＢ・C類と同一の系譜をたどれるかは明瞭でないが、この時期樽形○は陶邑地域では焼かれていない。また、これらの出土地も近畿地方の周辺地域であり、この時期には少なくとも山陰地方などでは地方窯がつくられている事（註25）からすると、これら資料は地元の窯で焼かれた可能性が考えられる。となるとこの時期（ＴＫ23～ＴＫ47型式）の須恵器と共伴する本例は地方窯で焼かれたか、時期が異なり古くなる可能性も考えられる。また、時期的に一番新しい樽形○は、滋賀・高田館２号墳の出土例（第９図68）があり、棺内に副葬されＡ２類の退化形態で、口縁部が他よりは長く共伴する須恵器は６世紀中頃のものである（註26）。

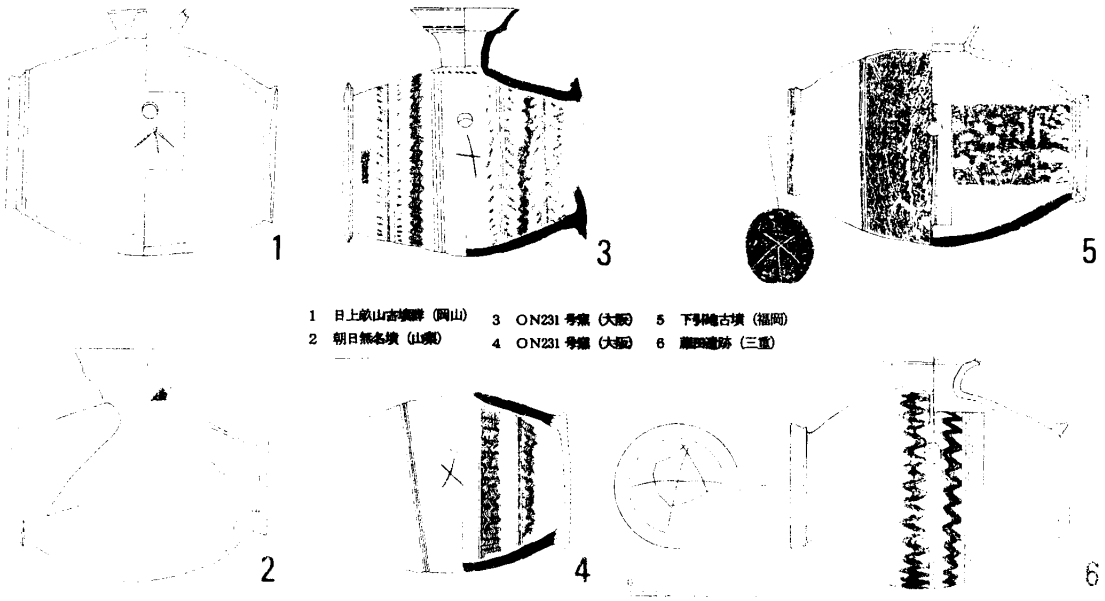
以上から、樽形○の変遷について陶邑地域を中心に大まかにまとめると次のようになる。当初は工人差と推測されるように大きさにばらつきがあり（Ｂ４・Ｃ４・Ｄ４類など）定まった形態でなかったが、その後規格の統一化・装飾の簡略化（Ｃ２類など）がおこなわれる。これを文様による類型の変遷にあてはめると、Ｂ・C類では大まかには４類→３類→２類といった具合になる。そして２類の中で特にＣ２類は広範囲に流通するものの、その後は生産されなくなり、一部地域でのみ非常に小形化したA類が作られたと推測される。また、これら変遷に側面の形態を照らし合わせるとすでに指摘されている通り、最終的に主流となるＣ２類は突帯の内側に稜を持つものが大半であるが、細部には形態差がありこれには工人の系譜の差があらわれているのと考えられる。この中でD類のみ系譜が明瞭でない。この中には突帯のみられないものがあり、これを初期の形態とするとこれらを焼いた窯がどこかに存在するはずである。これら系譜については、今回検討していない九州地方など他地域の窯の資料などから検討する事も必要である。

そして、これら樽形○の生産が短期間であった事は、樽形○本来の用途が定着しなかったためとされ（註27）、大形の○も樽形○同様短期間で姿を消し、その後の○は小形が主流となる。また、この○の意義については祭儀、葬送などに使用する特殊な祭器で、特に初期のものは畿内政治勢力が国家支配の施策として祭

祀儀礼の画一化のため考案された祭器とされる（註28）。ただ、樽形○について言えば初期の窯で複数の類型のものが同時に焼かれている事、製作期間が短期間であった事からすると、最終的に統一された器形になった段階で当初の役目を終えたか、もしくは定着しなかった理由が別にあり、その後は小形の○がその役目を担ったものと考えられる。

（ヘラ記号）

本例に見られるヘラ記号について若干考えてみたい。本例の記号は松葉に１本線を入れた「　」の形をしている。ヘラ記号の多くが杯等に使用されており、樽形○に記されている例は少ない。樽形○に記されているものを第６図に図示している。類例は本例を含め６例ある。ＯＮ231号窯（第６図３・４）は、２点とも「×」の記号を円孔下に施しており、形態や外面の装飾から両者はほぼ同一工人の作と考えて間違いなかろう。この窯からは他にも樽形○が数点出土しているが、これらにはヘラ記号はない。そのためヘラ記号は、製作時につけられたものと考えられるので、そこに何らかの意味合いが存在するものと考えられる。これについては、窯の共同使用から生産者が類似品の区別に使用した記号とする考えもある（註６ｂ）が、樽形○自体出土数が少ないためその必要があったか疑問が残る。また、本例に良く似たものとしては、地域的には大きく離れるが山梨・朝日無名墳（同２、註29）がある。ヘラ記号の位置も円孔の下であり、文様の構成も本例と同じ1類である。この須恵器については時期が明瞭でないが、報告者は胴部に何の装飾を施さないことから、ＴＫ208型式の範疇の可能性を示唆している。また、　と　を合体させた　が胴部の側面に施されているものが福岡・下引地古墳（同５、註16）、×や□のような記号を同様に側面に施したものが三重・蔵田遺跡（同６、註30）から出土し、この２者はともにＣ２類に分類される。いずれにしてもこれらヘラ記号は、類例自体は少ないものの×と　などを基本にし、円孔の下や側面と言った同一の場所に施されており、さらにこれら共通の手法が製作時期を通して見られ、さらに広範囲に流通していた事から、これらヘラ記号をもつ樽形　はある程度系譜的につながる可能性が推測される。さらに本例と同様なヘラ記号（　）はＴＫ208号窯の他の器種にもみられ、陶邑の他の窯からの発見例は少ない（註31）。



第６図　ヘラ記号をもつ樽形○（Ｓ＝１：６）

４．まとめ

以上、日上畝山古墳群出土須恵器の紹介をかね、特に樽形○について類例を集めてみた。樽形○については、比較資料も少なく形態をみても多種多様である。その中で特に胴部の形態や装飾などから分類を試みた。そして陶邑地域の窯資料から明瞭ではないが、時間的変化として従来どおり胴部の膨らみと新たに区画・装飾の簡略化、さらに同一規格化がある程度指摘できそうである。ただ装飾については今回分類した類型の変遷（４類→２類）が時期的なものとして大筋ではとらえられるものの、その他の口縁部や胴部側面の形態などにはそれぞれ微細な違いが見られ、この中には工人の系譜の違いが大いに反映されているものと解釈した。これについては生産地と消費地との関係を他地域の窯資料も含め、今後整理し検討する事が必要である。今回はさらにヘラ記号の存在、それが施される位置が同一箇所であるものがある事から、これらヘラ記号自体は違うものの、同一系譜の中で位置付けられる可能性を指摘した。また、本例が共伴する須恵器と同一時期となれば、周辺地域に窯が存在する可能性は十分考えられるが、消費地での出土のため時期が異なる可能性もある。今後は周辺地域での須恵器窯の追及とヘラ記号や胎土分析（註32）などの科学的分析結果を踏まえ、須恵器の生産・流通などの関連性から当時の社会的背景などについて検討していきたい。

なお、本報告を執筆するにあたり文化財センター職員の方々、及び以下の方々から資料提供などご協力をいただき、また有益な助言をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

飴谷　一、飯塚康行、稲垣寿彦、植野浩三、岡野秀典、草原孝典、佐伯英樹、坂口圭太郎、佐藤寛介、島崎東、角南聡一郎、田中清美、谷口恭子、豊島直博、野口哲也

（註１）古墳群の北側に「古冢」と言う碑があり、碑文には明治５年に鏡や刀剣、陶器（須恵器）などが出土した記述がある。この古墳の墳形や位置については不明である。日上高祖神社裏古墳については以下の文献がある。
秋久秀二郎「岡山縣下勝田郡國分寺附近古墳探?の記」『考古第一編第六號』1900
今井堯・渡辺健治「美作国津山市日上高祖神社裏古墳出土の古式須恵器」『貝塚71』1957

（註２）今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第１巻原始・古代』津山市史編さん委員会1972

（註３）安川豊史「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会1998

（註４）近藤義郎他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会1997

（註５）ａ田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ1966
ｂ田辺昭三『須恵器大成』角川書店1981

（註６）ａ中村　浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告第30輯』（財）大阪文化財センター1980
ｂ中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房1981

（註７）小郷利幸「美作における横穴式石室導入前の群集墳について」『門の山古墳群』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集）津山市教育委員会1992

（註８）一覧表文献２参照。

（註９）一覧表文献３参照、島崎東氏にご教示をいただいた。

（註10）一覧表文献54参照。

（註11）一覧表文献18参照。

（註12）一覧表文献29参照。

（註13）一覧表文献101参照。

（註14）大阪府亀井古墳など。文献は一覧表文献61参照。

（註15）岡山県宮山４号墳、鳥取県山ノ上32号墳など。文献は一覧表文献２・９参照。

（註16）中村勝「福岡市下引地古墳出土の須恵器」『古文化談叢第19集』九州古文化研究会1988

（註17）酒井清治「陶邑ＴＫ87号窯出土の樽形土器の再検討―樽形○の可能性を求めて―」『人類史研究第11号』人類

史研究会 1999

（註 18）一覧表文献 102 参照。

（註 19）植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報第 13 集』奈良大学文学部文化財学科 1995

（註 20）一覧表文献 45 参照。

（註 21）一覧表文献 66 参照。

（註 22）熊本県覚井古墳群、大阪府溝咋遺跡。文献は一覧表文献 33・63 参照。

（註 23）福岡県飯盛遺跡、熊本県竈門寺原 1 号墳、鳥取県山ノ上 32 号墳など。文献は一覧表文献 20・34・９参照。

（註 24）広島県池ノ内第３号古墳、鳥取県杉崎 18 号墳、三重県鈴鹿市算所出土など。文献は一覧表文献４・５・73 参照。

（註 25）例えば島根県門生山根 1 号窯（ＴＫ 23 型式併行～）、鳥取県七谷窯跡（ＴＫ 47 型式併行）など

丹羽野裕・池淵俊一他『門生黒谷Ⅰ遺跡他』島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所 1998

谷口恭子「鳥取県東部出土の須恵器―陶邑Ⅰ期を中心として」『水曜考古第 12 号』水曜考古倶楽部 1987

（註 26）一覧表文献 68 参照。

（註 27）三好博喜「○の祭り」『太邇波考古学論集』両丹考古学研究会 1997

（註 28）松本敏三「庵治町平見出土の須恵器―空なる器―」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより第 9 号』瀬戸内海歴史民俗資料館 1980

（註 29）一覧表文献 87 参照。

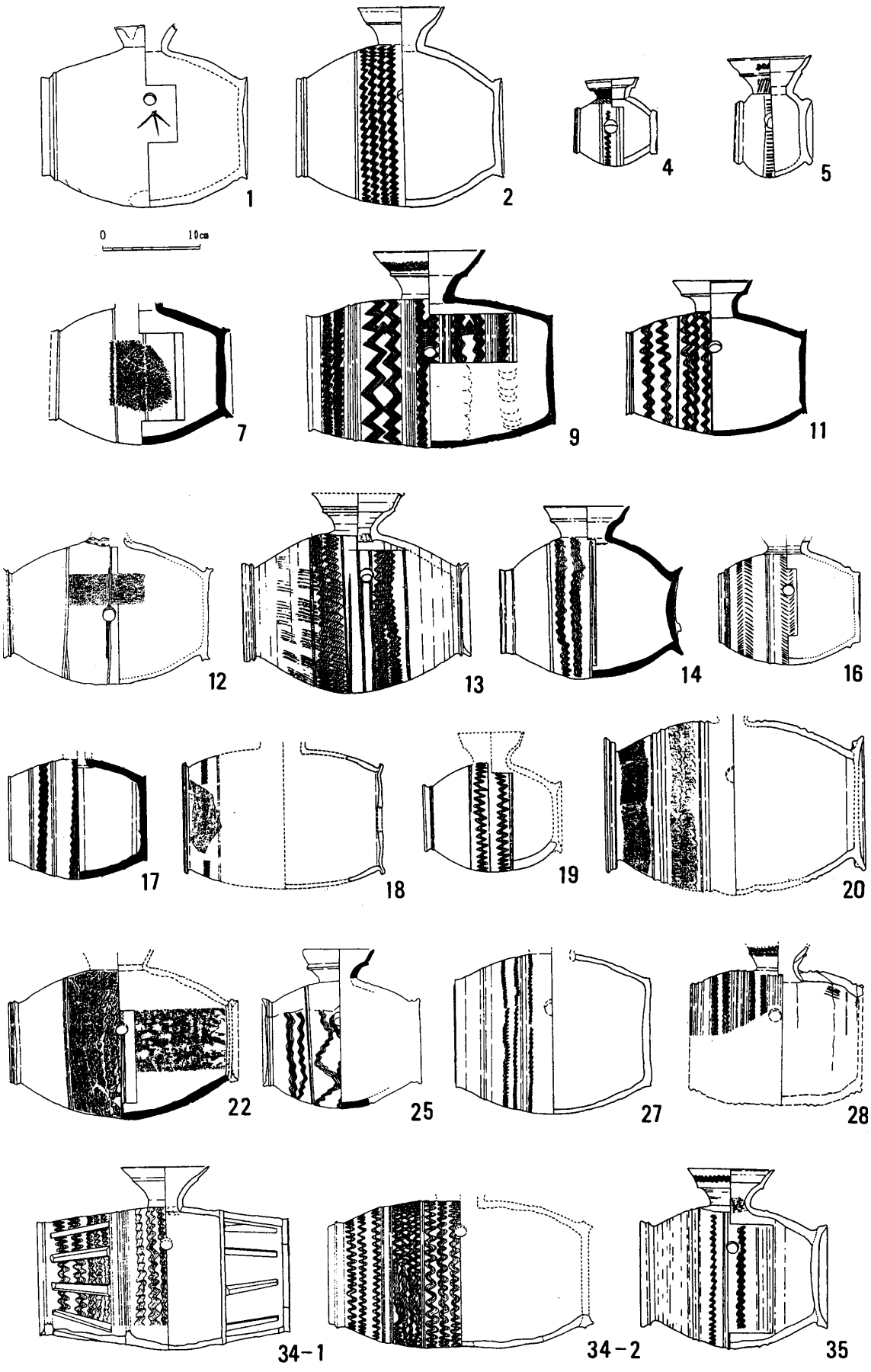
（註 30）一覧表文献 72 参照。

（註 31）ＴＫ 217 号窯があり、ＴＫ 208 号窯とは同一支群ではあるが時間的には 100 年以上の隔たりがある。（註５）参照。

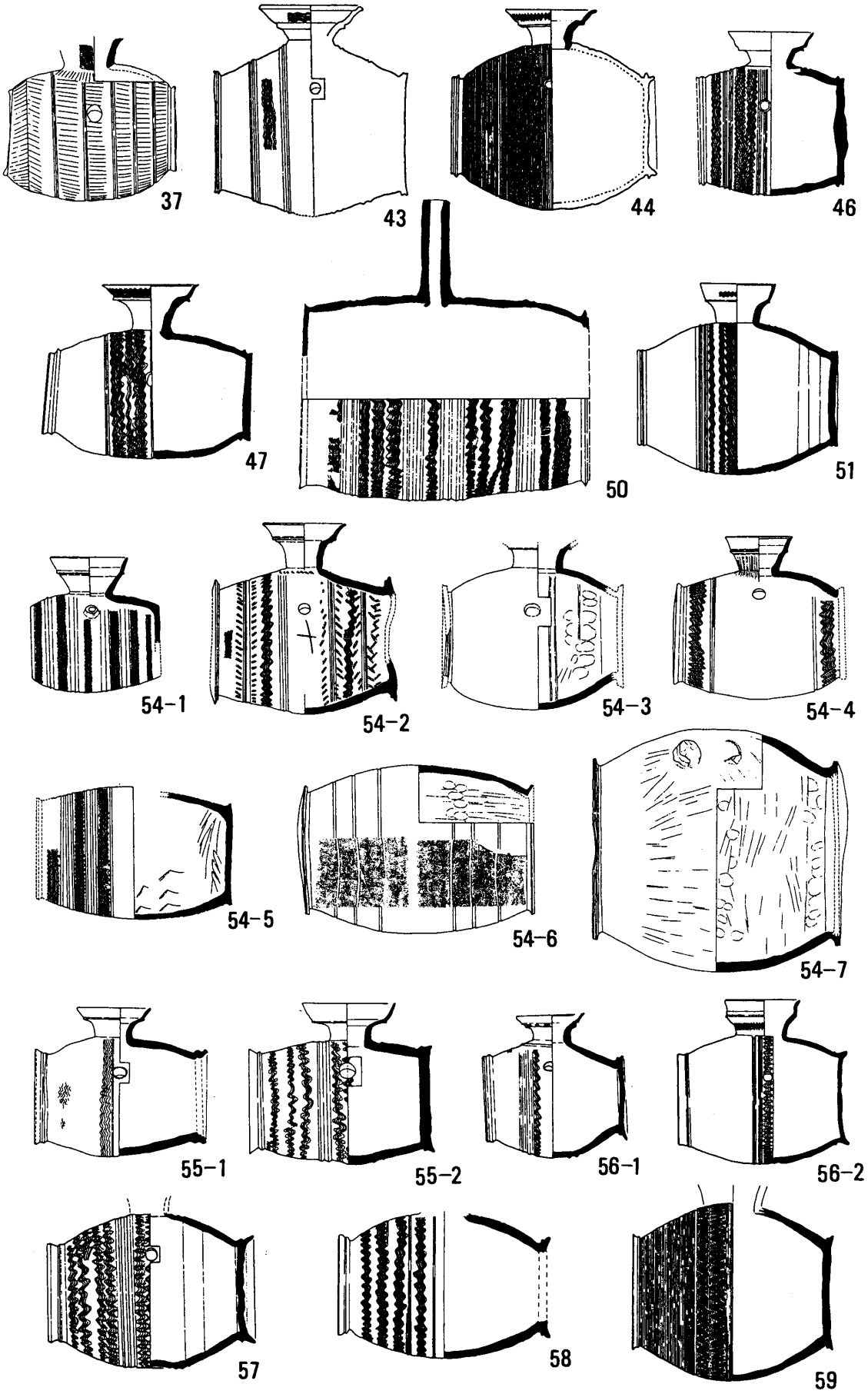
（註 32）津山市長畝山北古墳群（TK23 ～ TK47 型式併行）や日上畝山古墳群の須恵器（TK23 ～ TK47 型式併行？）について、蛍光Ｘ線による胎土分析をおこなっている。それによると明瞭なまとまりは見られないが、陶邑窯跡群と岡山県内の窯跡群の領域にはいるものが存在し、須恵器が多元的に供給されている可能性が考えられる。

白石純「岡山県地方出土初期須恵器の胎土分析(1)」『岡山理科大学蒜山研究所研究報告第 19 号』岡山理科大学 1993

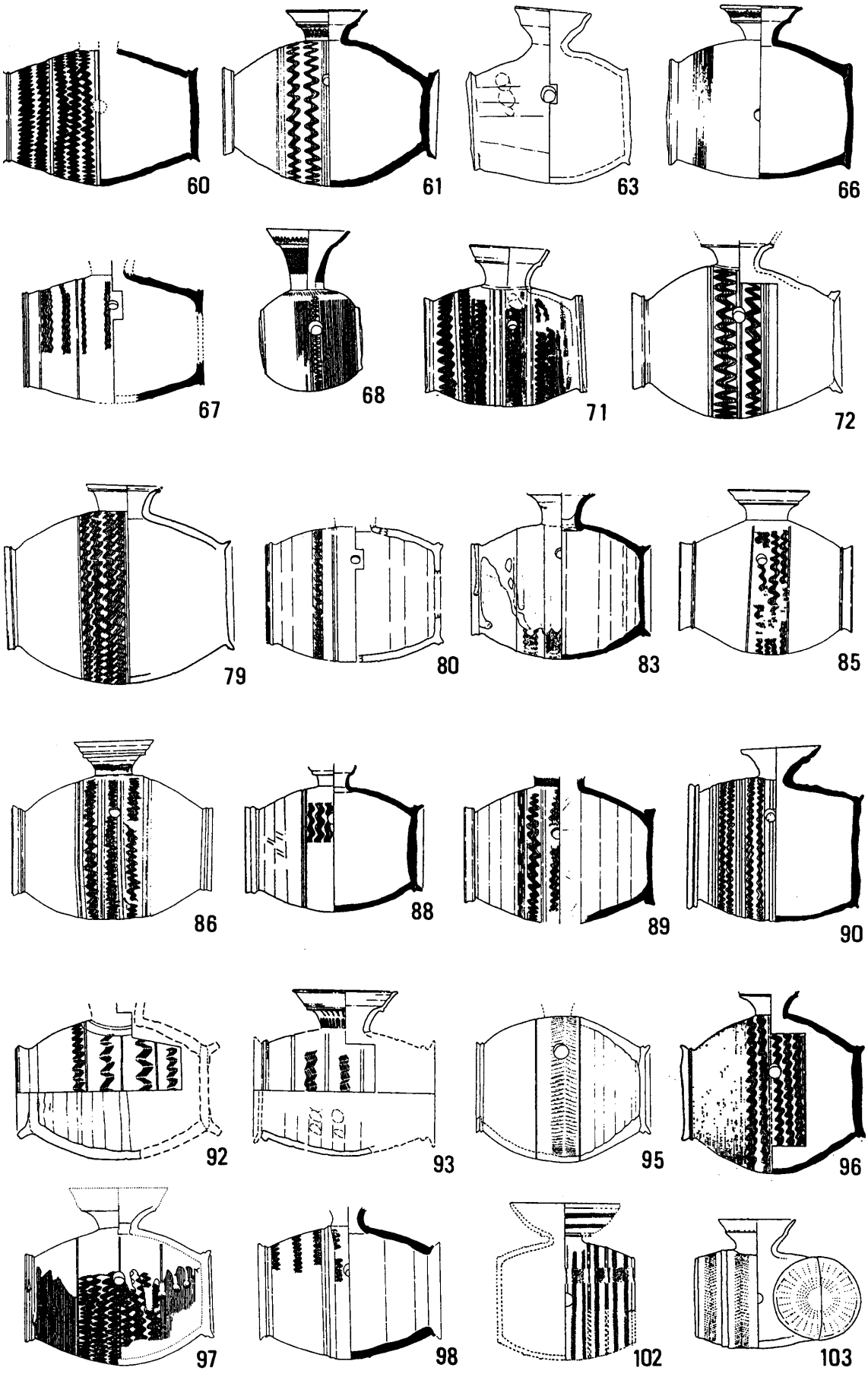
白石純「河辺上原遺跡出土須恵器・埴輪の胎土分析」『河辺上原遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 54 集）津山市教育委員会 1994



第７図　樽形○集成図（１）（Ｓ＝１：６、番号は一覧表に対応）


37
43
44
46
47
50
51
54-1
54-2
54-3
54-4
54-5
54-6
54-7
55-1
55-2
56-1
56-2
57
58
59

第８図　樽形○集成図（２）


60
61
63
66
67
68
71
72
79
80
83
85
86
88
89
90
92
93
95
96
97
98
102
103

第９図　樽形○集成図（３）

第１表樽形○出土地一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土場所	個数	分類	備考	文献
1	日上畝山古墳群	岡山県津山市	古墳	1	Ｃ１	円墳？	1
2	宮山第４号墳	岡山県山陽町	古墳（周溝）	1	Ｃ２	方墳	2
3	桜古墳	岡山県山陽町	古墳(墳丘)	1			3
4	池の内３号古墳	広島県福山市	古墳（周溝）	1	Ａ２	円墳	4
5	杉崎 18 号墳	鳥取県鳥取市	古墳	1	Ａ２？		5
6	大平山古墳群	鳥取県倉吉市	古墳	1			6
7	南谷大山遺跡	鳥取県羽合町	住居	1	Ｃ２		7
8	石脇８号墳	鳥取県泊村	古墳（周溝）	1		前方後円墳	8
9	山ノ上 32 号墳	鳥取県郡家町	古墳（周溝）	1	Ｄ４	円墳	9
10	因幡国分寺遺跡	鳥取県国府町?					10
11	長砂１１号墳	島根県松江市	古墳（墳裾）	1	Ｃ３	方墳	11
12	（伝）大峠山古墳群	島根県石見町	古墳	1	Ｃ２		12
13	平見遺跡	香川県庵治町	古墳？	1	Ｃ２？		13
14	太田下・須川遺跡	香川県高松市	溝	1	Ｃ２		14
15	下川津遺跡	香川県坂出市	集落	1			15
16	木塚古墳	福岡県久留米市	古墳（周溝）	1	Ｂ３	前方後円墳	16
17	西行１１号墳	福岡県久留米市	古墳（周溝）	1	Ｂ４	円墳	17
18	山隈窯跡群	福岡県三輪町	窯跡	3			18
19	立山山２３号墳	福岡県八女市	古墳	1	Ｂ２	円墳	19
20	飯盛遺跡	福岡県福岡市	溝	1	Ｄ４		20
21	今宿横浜第５地点	福岡県福岡市	住居				21
22	下引地古墳	福岡県福岡市	古墳	1	Ｃ２		22
23	樋渡遺跡	福岡県福岡市	住居				23
24	吉武 G-16 区２号墳	福岡県福岡市	古墳				24
25	榎町	福岡県粕屋町	住居？	1	Ｃ３		25
26	屋形	福岡県吉井町	古墳？				26
27	御床松原遺跡	福岡県志摩町	包含層	2	Ｃ４		27
28	赤井手遺跡	福岡県春日井市	住居	1	Ｃ３		28
29	八並古窯群	福岡県夜須町	窯跡	1			29
30	洗切貝塚	熊本県八代町		1			30
31	二子塚遺跡	熊本県嘉島町		1			31
32	熊本市下硯川	熊本県熊本市		1			32
33	覚井古墳群	熊本県相良村	古墳	1		土師器	33
34	寵門寺原１号墳	熊本県菊水町	古墳	2	Ｄ３、Ｄ４	円墳	34
35	上小原古墳群	鹿児島県串良町	古墳	1	Ｃ２		35
36	鳴神・音浦遺跡	和歌山県和歌山市		1			36
37	楠羅	奈良県御所市		1	Ｃ４		37
38	乙女山古墳	奈良県河合町	古墳	1	Ｃ		38
39	布留遺跡	奈良県天理市	溝	1			39
40	伝奈良県出土	奈良県					40
41	黒福３号墳	兵庫県加西市	古墳	1		円墳	41
42	出合遺跡	兵庫県神戸市		1			42
43	森山遺跡	兵庫県日高町		1？	Ｃ４		43
44	陶邑深田遺跡	大阪府堺市	溝	1	Ｃ２		44
45	陶邑 TK83 号窯	大阪府堺市	窯跡	4	Ｂ３、Ｃ３、Ｄ４		45
46	陶邑 TK85 号窯	大阪府堺市	窯跡	1	Ｂ３		46
47	陶邑 TK73 号窯	大阪府堺市	窯跡	2	Ｃ２		47
48	陶邑 TK94 号窯	大阪府堺市	窯跡	1			48
49	陶邑 TK305 号窯	大阪府堺市	窯跡	6			49
50	陶邑 TK87 号窯	大阪府堺市	窯跡	2	Ｄ４	注口付き	50
51	陶邑 TK208 号窯	大阪府堺市	窯跡	1	Ｃ２		51
52	陶邑 TG22 号窯	大阪府堺市	窯跡	1			52
53	陶邑 ON3 号窯	大阪府和泉市	窯跡	1			53
54	ON231 号窯	大阪府堺市	窯跡	12＋	B4、C1・4、D1･4		54
55	大庭寺遺跡	大阪府堺市	溝・河川	3	Ｃ３		55
56	小坂遺跡	大阪府堺市	井戸･河川	3	Ｂ２、Ｃ２		56
57	伏尾遺跡	大阪府堺市	土壙・池・谷	4	Ｃ３		57
58	四ツ池遺跡	大阪府堺市	河川	1	Ｃ４		58
59	石才南遺跡	大阪府貝塚市	沼	1	Ｃ２		59
60	本郷遺跡	大阪府柏原市	溝	1	Ｃ３		60
61	亀井古墳	大阪府八尾市	古墳（棺上）	1	Ｃ２	方墳	61
62	久宝寺遺跡	大阪府東大阪市	包含層	1	Ｃ４		62
63	溝咋遺跡	大阪府茨木市	包含層	1	Ｃ１	土師器	63
64	福垣北２号墳	京都府綾部市	古墳	1		方墳	64
65	以久田野古墳群	京都府綾部市	古墳		Ｃ２		65
66	高田山２号墳	京都府福知山市	古墳(棺上)	1	Ｃ１	方墳	66
67	寺ノ段６号墳	京都府福知山市	古墳（墳丘）	1	Ｃ３	方墳	67
68	高田館２号墳	滋賀県今津町	古墳（棺内）	1	Ａ２？	円墳	68
69	岩畑遺跡	滋賀県栗東町	住居	1			69

70	阿比留遺跡	滋賀県守山市					70
71	落合３号墳	三重県伊勢市	古墳（周溝）	1	Ｃ３	方墳	71
72	蔵田遺跡	三重県津市	土壙	1	Ｃ２		72
73	鈴鹿市算所出土	三重県鈴鹿市		1	Ａ２		73
74	朱中古墳	三重県松阪市	古墳（溝）	1？		円墳	74
75	正木町遺跡４次	愛知県名古屋市	土壙				75
76	桜八幡社境内	愛知県名古屋市					76
77	宇藤蓮台１号墳	静岡県森町	古墳（周溝）	1		円墳	77
78	元島遺跡	静岡県福田町	包含層	1			78
79	伊場遺跡	静岡県浜松市		1	Ｃ２		79
80	二本ケ谷積石塚１号墳	静岡県浜北市	古墳	1	Ｃ２？	積石塚	80
81	京見塚古墳	静岡県磐田市	古墳			円墳	81
82	高田遺跡	石川県富来町	包含層	1		祭祀遺跡	82
83	物見塚古墳	長野県飯田市	古墳	1	Ｃ４		83
84	恒川Ａ遺跡	長野県飯田市		1			84
85	宮の下遺跡	山梨県豊村		1	Ｃ２		85
86	東山南（Ｂ）２号墳	山梨県豊村	古墳(周溝)	1	Ｃ２	円墳	86
87	朝日無名墳	山梨県中道町	古墳（周溝）	1	Ｃ１	円墳	87
88	伊興遺跡	東京都足立区		1	Ｃ２		88
89	池子遺跡Ｎｏ．４地点	神奈川県横浜市	溝・包含層	1？	Ｃ２		89
90	白鍬遺跡	埼玉県与野市		1	Ｃ４		90
91	恵下古墳	群馬県伊勢崎市	古墳	1	Ｂ	円墳	91
92	荒砥天之宮遺跡	群馬県前橋市	住居	1	Ｃ３		92
93	荒砥北三木堂遺跡	群馬県前橋市	住居	1	Ｃ４		93
94	白藤古墳群	群馬県粕川村	古墳	1	Ｃ３		94
95	温井遺跡	群馬県藤岡市	住居	3	Ｃ２		95
96	梶の宮遺跡	茨城県新治村		1	Ｃ２		96
97	稲荷塚古墳	福島県福島市	古墳	1	Ｃ２	造出し付き円墳	97
98	南山田遺跡	福島県郡山市	住居	2	Ｃ２		98
99	裏町古墳	宮城県仙台市	古墳	1	Ｃ		99
100	南小泉遺跡	宮城県仙台市		1			100
101	金山窯跡	宮城県仙台市	窯跡	1			101
102	万樹里２号墳	韓国全羅南道	古墳		Ｂ４		102
103	出土地不詳	韓国			Ｂ３	暁星女子大学校博物館蔵	103

文献
１本書
２神原英朗『四辻土壙墓遺跡他』山陽町教育委員会 1973
３伊藤晃・島崎東「須恵器の源流　中国地方」『日本陶磁の源流』柏書房 1984
４小都隆・佐伯邦芳他『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財調査報告』広島県文化財協会 1976
５寺西健一「鳥取県杉崎１８号墳出土の須恵器」『古文化談叢第１５集』九州古文化研究会 1985
６『古墳時代一伯耆国一』倉吉博物館１９８３
７牧本哲雄他「南谷大山遺跡Ⅱ・南谷２９号墳」『鳥取県教育文化財団調査報告書 36』（財）鳥取県教育文化財団 1994
８原田雅弘他「石脇８・９号墳他」『鳥取県教育文化財団調査報告 54』（財）鳥取県教育文化財団 1998
９中野知照「山ノ上３２号墳出土の樽形○について」『韓式系土器研究Ⅵ』韓式系土器研究会 1996
10 寺西健一「鳥取県杉崎１８号墳出土の須恵器」『古文化談叢第１５集』九州古文化研究会 1985
11 岡崎雄二郎他『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会 1983
12 川原和人「石見における古式の須恵器」『松江考古第２号』松江考古学談話会 1979
13 松本敏三「庵治町平見出土の須恵器 - 空なる器一」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより第９号』瀬戸内海歴史民俗資料館 1980
14 北山健一郎他「太田下・須川遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊』香川県教育委員会 1995
15 〃 〃
16 横尾義明編「木塚遺跡」『久留米市文化財調査報告書第 14 集』久留米市教育委員会 1977
17 萩原裕房「西行古墳群」『久留米市文化財調査報告書第 84 集』久留米市教育委員会 1993
18 九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学　第 65 号』九州考古学会 1990
19 佐田茂・伊崎俊秋編「立山山古墳群」『八女市文化財調査報告書第 10 号』八女市教育委員会 1983
20 横山邦継他「福岡市飯盛遺跡出土陶質土器の産地推定」『古文化談叢第 18 集』九州古文化研究会 1987
21 中村勝「福岡市下引地古墳出土の須恵器」『古文化談叢第 19 集』九州古文化研究会 1988
22 中村勝「福岡市下引地古墳出土の須恵器」『古文化談叢第 19 集』九州古文化研究会 1988
23 下村智他「福岡県樋渡遺跡」『日本考古学年報 36』日本考古学会 1986
24 中村勝「福岡市下引地古墳出土の須恵器」『古文化談叢第 19 集』九州古文化研究会 1988
25 古谷毅他『東京国立博物館所蔵　須恵器集成III　西日本篇』便利堂 1998
26 金子文夫他『吉井町誌』吉井町誌編纂委員会 1977
27 井上裕弘編「御床松原遺跡」『志摩町文化財調査報告書第３集』志摩町教育委員会 1983
28 丸山康晴編「赤井手遺跡」『春日市文化財調査報告書第６集』春日市教育委員会 1980
29 中村勝「福岡県八並古窯跡群の実相」『古文化談叢第 29 集』九州古文化研究会 1993
30 前田軍治『第４回企画展図録　器は語る須恵器の美と技と』熊本県立装飾古墳館 1994
31 前田軍治『第４回企画展図録　器は語る須恵器の美と技と』熊本県立装飾古墳館 1994
32 前田軍治『第４回企画展図録　器は語る須恵器の美と技と』熊本県立装飾古墳館 1994
33 前田軍治『第４回企画展図録　器は語る須恵器の美と技と』熊本県立装飾古墳館 1994
34 長谷部善一「龍門寺原遺跡」『熊本県文化財調査報告書 149』熊本県教育委員会 1995
35 立神次郎他「鹿児島県串良町小原古墳群内発見の古式須恵器」『古文化談叢第５集』九州古文化研究会 1978
36 藤井保夫「須恵器の源流　近畿地方（２）紀伊地域」『日本陶磁の源流』柏書房 1984
37 本村豪章他『東京国立博物館所蔵　須恵器集成Ⅰ　近畿篇』便利堂 1994
38 木下亘「史跡　乙女山古墳付高山２号墳」『河合町文化財調査報告２』河合町教育委員会 1988
39 高野政昭他『布留遺跡三島（里中）地区発掘調査報告書』埋蔵文化財天理教調査団 1995
40 寺西健一「鳥取県杉崎１８号墳出土の須恵器」『古文化談叢第１５集』九州古文化研究会 1985

41 立花聡「玉丘遺跡群Ⅱ」『加西市埋蔵文化財調査報告 15』加西市教育委員会 1993
42 鎌木義昌・亀田修一「播磨出合遺跡出土の陶質土器・朝鮮三国系軟質土器・初期須恵器」『古文化談叢第 18 集』九州古文化研究会 1987
43 瀬戸谷晧「須恵器の源流　近畿地方（2）但馬地域」『日本陶磁の源流』柏書房 1984
44 中村浩他「陶邑・深田」『大阪府文化財調査抄報第２輯』（財）大阪文化財センター 1973
45 宮野淳一他「陶邑Ⅷ」『大阪府文化財調査報告第 46 輯』大阪府教育委員会 1994
46 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980
47 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
48 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980
49 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980
50 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980
51 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
52 中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第 30 輯』（財）大阪府文化財センター 1980
53 中村浩他「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書第 28 輯』（財）大阪文化財センター 1976、中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第３０輯』（財）大阪府文化財センター 1980
54 西口陽一「野々井西遺跡・ON231 号窯跡」『（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第８６輯』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1994
55 冨加見泰彦他「陶邑・大庭寺遺跡」『（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第４１輯』大阪府教育委員会 1989、同「陶邑・大庭寺遺跡Ⅱ」『同第５０輯』同 1990
56 村上利生他『小阪遺跡（その 3)』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1987、村上年生他『小阪遺跡（その 7、7－2）同 1988、江浦洋他『小阪遺跡（その 7－3)』同 1989
57 岡戸哲紀「陶邑・伏尾遺跡の検討」『韓式系土器研究Ⅲ』韓式系土器研究会 1991、森村健一他「陶邑・伏尾遺跡Ⅱ」『大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第７２輯』大阪府教育委員会・（財）大阪府埋蔵文化財協会 1992、岡戸哲紀「陶邑・伏尾遺跡Ⅲ」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第２０－１集』同・（財）大阪府文化財調査研究センター 1997
58 樋口吉文他「四ツ池遺跡」『堺市文化財調査概要報告第 18 冊』堺市教育委員会 1991
59 奥和之他「石才南遺跡Ⅱ・清児遺跡Ⅱ」『（財）大阪府文化財協会調査報告書第 63 輯』（財）大阪府埋蔵文化財協会 1991
60 北野重「本郷遺跡」『柏原市文化財概報 1992 －Ⅲ』柏原市教育委員会 1993
61 高島徹他『亀井・城山』（財）大阪文化財センター 1995
62 仁木昭夫他『河内平野遺跡群の動態Ⅷ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター 2000
63 合田幸美他「溝咋遺跡（その１・２)」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第４９集』（財）大阪府文化財調査研究センター 2000
64 土橋誠編『京都府遺跡調査報告書第 17 冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
65 山田邦和『須恵器生産の研究』学生社 1998
66 小池寛「高田山古古墳群発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報第 49 冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
67 崎山正人「駅南地区発掘調査報告書」『福知山市文化財調査報告書第 16 集』福知山市教育委員会 1989
68 神谷友和他『一般国道（湖北バイパス）建設に伴う今津町内遺跡発掘調査報告書　高田館遺跡』滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1991
69 粟東町教育委員会佐伯英樹氏にご教示を得た
70 〃
71 伊藤裕偉「落合古墳群」『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告第 7 分冊』三重県埋蔵文化財センター 1992
72 米山浩之「蔵田遺跡」『一般国道 23 号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』三重県埋蔵文化財センター 1996
73 田中琢・田辺昭三『日本陶磁全集４　須恵器』中央公論社 1977
74 西村修久他「朱中遺跡・朱中古墳群」『三重県埋蔵文化財調査報告 123 － 5』三重県埋蔵文化財センター 1996
75 木村有作『発掘された名古屋の 5 世紀』名古屋市見晴台考古資料館 1997、野口泰子他『正木町遺跡第４次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会 1991
76 犬塚康博「名古屋市南区桜八幡社境内出土の樽形○」『名古屋市博物館研究紀要第 7 巻』1983
77 『静岡県埋蔵文化財調査研究所　年報 16』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000
78 岩本貴「元島遺跡Ⅰ」『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 116 集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999
79 川江秀孝「静岡県下出土の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジューム 2』静岡県考古学会 1979
80 久野正博他『内野古墳群』浜北市教育委員会 2000
81 鈴木敏則「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静岡県考古学研究 No.31』1999
82 橋木澄夫「高田遺跡の調査概要」『富来町史資料編』1974
83 佐々木嘉和・小林正春『八幡原遺跡・物見塚古墳』飯田市教育委員会１９９２
84 西山克巳「信州における須恵器出現の頃」『考古学ジャーナル 316』ニュー・サイエンス社 1990
85 岡野秀典「豊村出土の樽形○」『山梨県考古学協会誌第 6 号』山梨県考古学協会 1993
86 〃　〃　末木健『東山南（Ｂ）遺跡』山梨県教育委員会 1991
87 岡野秀典「山梨県の初期須恵器」『山梨県考古学協会誌第 8 号』山梨県考古学協会 1997
88 大場磐雄他『武蔵伊興遺跡』伊興遺跡調査団 1975
89 長谷川厚他「池子遺跡群Ⅷ」『かながわ考古学財団調査報告 44』（財）かながわ考古学財団 1999
90 大塚初重・坂本明美「埼玉県白鍬遺跡の須恵器」『駿台史學第 9 号』駿台史学会 1959
91 中村浩編『古墳出土須恵器集成第４巻東日本編Ⅱ』雄山閣出版 1999
92 徳江秀夫他『荒砥天之宮遺跡』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
93 石坂茂他「荒砥北三木堂遺跡Ⅰ」『（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 110 集』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
94 小島純一『白藤古墳群』粕川村教育委員会 1989、坂口一「群馬県における須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル 316』ニュー・サイエンス社 1990
95 真下高幸他『温井遺跡』群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
96 酒井清治「須恵器の源流　関東地方」『日本陶磁の源流』柏書房 1984
97 目黒吉明・富田晴「稲荷塚遺跡出土の○について」『しのぶ考古５』しのぶ考古学会 1975、木本元治「稲荷塚古墳」『福島市埋蔵文化財報告書第 83 集』福島市教育委員会 1995
98 柳沼賢治『南山田遺跡』農林水産省東北農政局・福島県郡山市教育委員会・（財）郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1991
99 渡辺泰伸「東北古墳時代須恵器の様相と編年」『考古学雑誌第 65 巻第 4 号』日本考古学会 1980
100 渡邊泰伸「東北の須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル 316』ニュー・サイエンス社 1990
101 斎藤秀寿「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」『陸奥国官窯跡群Ⅳ』古窯跡研究会 1981
102 成洛俊「栄山江流域の甕棺墓研究」『古文化談叢第 13 集』九州古文化研究会 1984、徐聲勲・成洛俊『靈岩萬樹里古墳群』国立光州博物館・百済文化開発研究院 1984
103 『博物館図録』暁星女子大学校博物館 1992

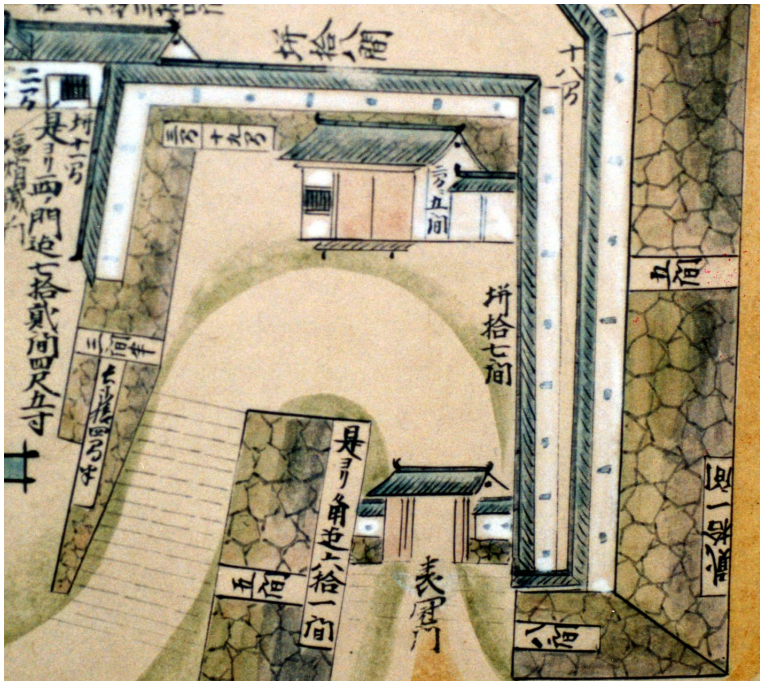
（３）津山城今昔⑤～津山城の入り口冠木門～

行田　裕美

津山城今昔シリーズと題して、津山城下町の推り変わりを追っている。今回は津山城の入り口冠木門を取り上げる。

現在、津山城に入るのには切符売り場で切符を購入し、９段の石段を登る。登りきったところには鉄製の入場門があり、ここを通過して初めて城内に入ることができる。

津山城の築城から廃城までの期間（1616－1874年、以下、津山城時代という）ここには冠木門があった。この場所の変遷をたどり今昔をみていくことにする。



第１図　下が冠木門、上が番所（津山絵図、部分、個人蔵）

第２図　同　上（美作国津山城焼失付普請伺絵図、部分、個人蔵）

津山城時代の冠木門

津山城時代の冠木門は第１図と第２図に示した様な構造だったと思われる。第１図は文化６年（1809）の本丸を中心とした建物の火災以前の図であることは解るが、どれだけ遡るのかは不明である。第２図は文化６年の火災による普請伺の図であることから、火災直前の様子を伝えた図である。従って、第２図の方が新しい図ということになる。

門は北と南の石垣の中央部に築かれ、門から石垣までは低い袖石垣で繋いでいる。袖石垣の上には瓦を葺いた塀が乗る。門の屋根はいずれも瓦葺きであるが、第１図では切妻型式、第２図では寄棟あるいは入母屋風に描かれている。門の屋根に寄棟は用いられないと考えられるから、恐らく入母屋型式を表現したものであろう。本稿には掲載してないが、他の絵図にも入母屋を表現したものがあり、第２図の屋根は入母屋が正しいものと思われる。

では、第１図と第２図の違いは何を意味しているのだろうか。単なる表現の相違なのであろうか。あるいは、建て替えの結果なのであろうか。残念ながら、これを解決する史料は今のところ見つかっていない。しかし、250年以上続いた津山城時代に各種構造物の破損、傷みは十分考えられることである。冠木門を入った正面の番所も第１図と第２図ではかなり構造が異なる。これらのことから、絵図の相違は描かれた時期差であり、建て替えなり改修の結果であろうと考えておきたい。いずれにしても、城の入り口である大手の門にしては貧弱な門である。

第３図　石名家に残る長局の格子

津山城の取り壊し

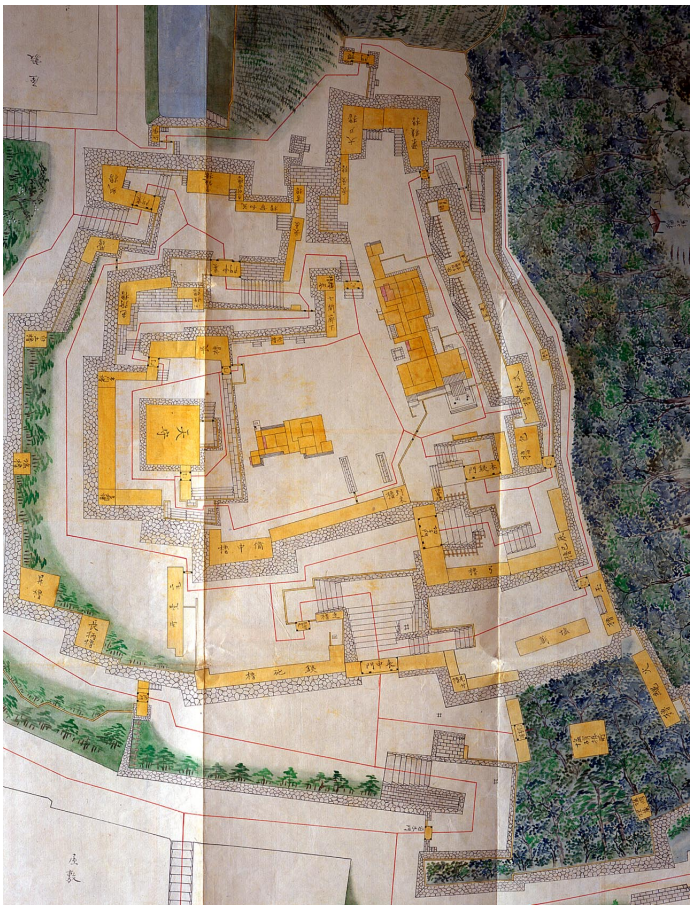
さて、津山城の取り壊しは明治７年（1874）春から始まり、翌年の３月に完了したことになっている。しかし、この取り壊し作業は城郭内すべての建物が一括対象で、その期間内に行われたか否かははなはだ疑問な点がある。

矢吹正則著『津山誌』によると、「宮川に沿う所の士第は明治４年辛未の創造に係れり」とある。現在も残るこの長屋は明治４年にできたということである。そして、居住者の聞き取り調査でも「この長屋は城の廃材で建てた」「石名家の格子は長局の格子である」（第３図）という言い伝えを今に残している。

２年前に現地調査を実施した際、建築部材はすべて転用材であることが判明した。また、屋根の瓦も本瓦葺きで、通常の民家に使用されているものに比べて大きく、城の瓦である可能性が極めて高いことも判明した。

さらに、第4図の絵図が語ってくれることも参考に取り上げる。正確な作成年代は不明だが、県庁の所在地が書かれていることから、明治4年（1871）の廃藩置県以後のものである。

この絵図には、藩主の居間と表御殿だけが描かれており、他の建物はない。こ



第４図　藩主の居間と表御殿だけが描かれた絵図（部分、個人蔵）

のことは城内の構築物が一気に取り壊されたのではなく、段階があったのではないかということを推測させる。

これらのことから、津山城の主要建物の本格的な取り壊しは明治７年からであろうが、部分的にはそれよりも早い時期に取り壊されていた箇所もあり、段階的に行われたのではないかという可能性を指摘しておきたい。

鶴山館の移設

津山城三の丸、現在の動物園の南側に鶴山館がある。もともとこの建物は明和２年（1765）に津山藩の学問所として、現在のＮＴＴ付近に創設されていたものである。明治４年（1871）、老朽化のため再建されたのを機に名称を修道館とした。明治36年（1903）、津山高等女学校の校舎建築のため現在地に移設され、鶴山館と改名したものである。

冠木門両袖石垣の撤去と鶴山館に至る石段

現在、入場門を入りそのままっすぐ進むと石段がある。これを登ると鶴山館の玄関にたどり着く。津山城時代にはなかった石段である。この石段がいつの時期に付けられたのかは不明であるが、いくつかの推測は可能である。

まず考えられるのは、鶴山館の移設作業の効率化と玄関への導入路を兼ね備えた利便性を考慮して設置されたとするものである。第５図の写真のような状況である。

次に考えられるのが、大正15年５月23日、時の皇太子裕仁親王（昭和天皇）が来津の際、津山城にも足を運ばれ、鶴山館を視察されている。この視察に合わせて整備したとするものである。

以上の二つが考えられるが、皇太子の来津は津山町をあげての盛大な歓迎ムードの中で行われ、田町から津山城にかけての通称“行啓道路”もこれにあわせて整備されたものである。鶴山館の視察もあることから鶴山館に至る石段の設置はこの時行われた可能性が高いようにも思われる。

ではこの石段に使用された石材はどこから運ばれてきたのだろうか。これもあくまで推測の域を出ないの

第５図　鶴山館移設後、冠木門石垣撤去後の写真

第６図　平沼騏一郎内閣総理大臣就任記念写真（昭和１４年)(『美作の 100 年』より)

だが、距離的に近いことから考えて冠木門の両袖石垣が転用されたものと考えるのが妥当であろう。

冠木門に至る石段

第５図の写真の撮影時期は不明であるが、鶴山館が写っていること、冠木門の石垣が失われてしまっていることから明治36年以降であることはまちがいない。この段階ではかっての冠木門に至る石段は５段である。これは石の配置状況からみて津山城時代のものと考えてよさそうである。

第６図は平沼騏一郎が第33代の内閣総理大臣に就任したときの記念写真である。これは昭和14年のことである。この時点では、現在のように切石の９段になっているが、いつの時期に改変したのか定かではない。

鶴山公園有料化

昭和 36 年（1961）４月、鶴山公園に入園するのが有料になった。これに先立ち、石垣部分をのぞく城郭全域を金網のフェンスで囲み、冠木門と津山文化センターの南側に鉄製の入場門が設置され現在に至っている。

ちなみにその時の入園料は大人 50 円、小中学生 30 円であった。

（4）二宮岡東遺跡および押入兼田遺跡出土土器の胎土分析

白石　純

１．分析の目的

この分析では、二宮岡東(註1)と押入兼田(註2)の両遺跡から出土した縄文時代晩期、弥生時代後期、古墳時代の土器を、蛍光X線分析法を用いた理化学的な胎土分析をおこない、以下のことについて調べた。

（1）二宮岡東遺跡出土の弥生時代後期の土器で、形態・技法的に在地産土器と異なる土器が胎土的に差異があるか。特に、貯蔵穴１内出土の試料番号1低脚高杯(報告書掲載番号第27図5、２器台(第27図6)は、日本海沿岸地域からの強い影響をうけており(註3)、これらの土器が胎土的に在地で生産(津山市京免遺跡(註4)、大田十二社遺跡(註5)、有本遺跡Ｂ地区(註6)、有本古墳群(註7))された土器と違いがあるのか。

（2）押入兼田遺跡の弥生時代後期の竪穴住居址出土には、形態・技法的に在地で生産された土器と異なるものがみられた。そこで、この5鉢(第12図1)と6高杯(第12図4)が胎土的に在地の土器と差異がみられるか。また、同遺跡の土坑内から出土した縄文時代晩期の土器がどこで生産されたか検討した。

（3）二宮岡東遺跡出土の須恵器が、津山市内の各古墳より出土した須恵器と、胎土的にどのような差異があるか。

２．分析結果

分析は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメン社製蛍光X線分析計2010)を用い、試料・測定方法などは従来の方法に従って分析した。

今回、分析した試料は第１表に示した62点の土器である。種類別にみると縄文土器が8点、弥生土器44点、須恵器10点である。

分析の結果、従来の結果と同様でK、Ca、Rb、Srの各元素に顕著な差がみられることから、これらの元素を用いてXYの散布図を作製し、各土器の差異について検討した。

第１図K-Ca、第２図Rb-Srの散布図では、二宮岡東遺跡の貯蔵穴内出土の壺、甕、高杯、器台の各器種について検討した。第１図では貯蔵穴１出土の試料番号２の器台と３の鼓形器台、13(貯蔵穴10)、25(貯蔵穴29)の4点が他の同じ遺跡内の土器と離れて分布し明らかに胎土が異なることがわかる。そして、2と3の土器は山陰の分布領域に入る。またその他の土器は津山市内の各遺跡が分布する領域にほぼ入った。

壺に関しては、7(ヘラ記号)、20(スタンプ文)、22(大形品)の３点の土器ともほぼ同じ分析値で、在地産土器の分布域に入る結果となった。

第２図の散布図でも、ほぼ同じ結果となった。

第３図K-Ca、第４図Rb-Srの両散布図より押入兼田遺跡の竪穴住居址から出土した外来系の5鉢と6高杯がどのような胎土を示すかでは、どちらの土器も在地の土器が分布する領域にプロットされ、胎土的には差がみられなかった。また、縄文晩期の深鉢形土器もほぼ一つにまとまり、胎土的には差がみられず、弥生土器の胎土との比較では明確な差がみられなかった。

第５図、第６図の散布図では、二宮岡東古墳出土須恵器が津山市内の他の古墳出土須恵器と胎土的にどのような差異がみられるか検討した。この結果、第５図のK-Ca散布図から、埋葬施設内と北斜面より出土した須恵器は、津山市内の古墳出土の須恵器とはほとんど胎土が一致せず、新たなグループでまとまり識別で

きた。

３．まとめ

二宮岡東遺跡および押入兼田遺跡出土土器の胎土分析で明らかになったことや今後の課題についてまとめる。

（１）二宮岡東遺跡出土の弥生後期の搬入あるいは模倣された低脚高杯、器台、鼓形器台が胎土的に差異があるかどうかでは、器台と鼓形器台が胎土に差がみられ、明らかに識別できた。また、低脚高杯に関しては、他の津山市内の遺跡出土土器の分布に入り識別されなかった。

（２）押入兼田遺跡の弥生後期の外来系土器と考えられる鉢と高杯は、いずれも在地産土器の分布範囲に分布し、識別できなかった。また、縄文時代の深鉢は、ほぼ一つにまとまり胎土的に同じで、在地産の弥生土器とも分布域がほぼ重なることから、遺跡周辺で生産されたことが推測される。

（３）二宮岡東古墳出土の須恵器胎土分析では、埋葬施設内および北斜面出土の杯が、ほぼ一つにまとまる傾向を示し、他の古墳出土須恵器とは、分布領域が異なった。須恵器の産地が異なることが考えられる。

以上のように、この分析でわかったことについて述べたが、弥生後期土器の分析では山陰地方も含めた日本海側の広い地域での胎土分析データが充分でないため、産地などの詳細な検討はできなかった。今後試料の蓄積を行い検討していきたい。

古墳出土の須恵器分析では、津山市内の古墳出土須恵器と比較したが、各古墳群とも個々でまとまる傾向にあった。須恵器に関しても試料の蓄積を行い検討していきたい。

この分析の機会を与えていただいた津山市教育委員会、津山弥生の里文化財センターの職員の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

(註)

(1)小郷利幸・川村雪絵 2000「二宮岡東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 68 集　津山市教育委員会

(2)中山俊紀ほか 2000「押入兼田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 69 集　津山市教育委員会

(3)註(1)と同じ

(4)中山俊紀 1982「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 11 集　津山市教育委員会

(5)河本清ほか 1981「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 10 集　津山市教育委員会

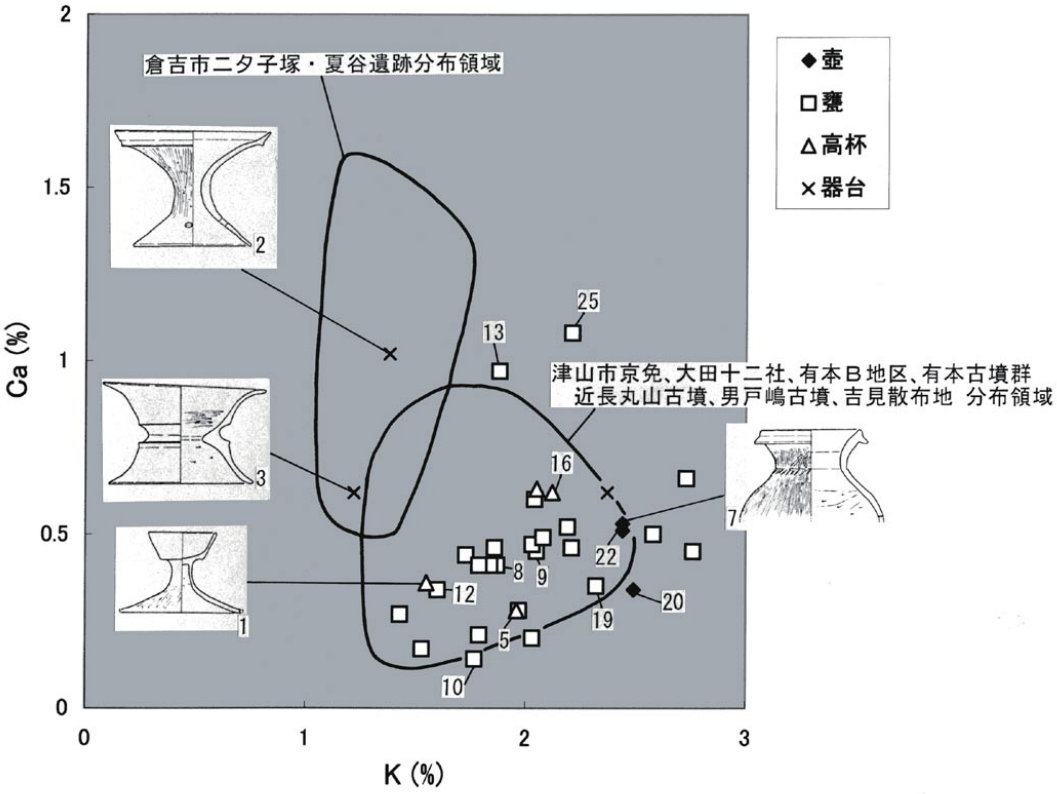
(6)小郷利幸 1998「有本遺跡ほか」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 62 集　津山市教育委員会

(7)小郷利幸 1997「有本古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 59 集　津山市教育委員会

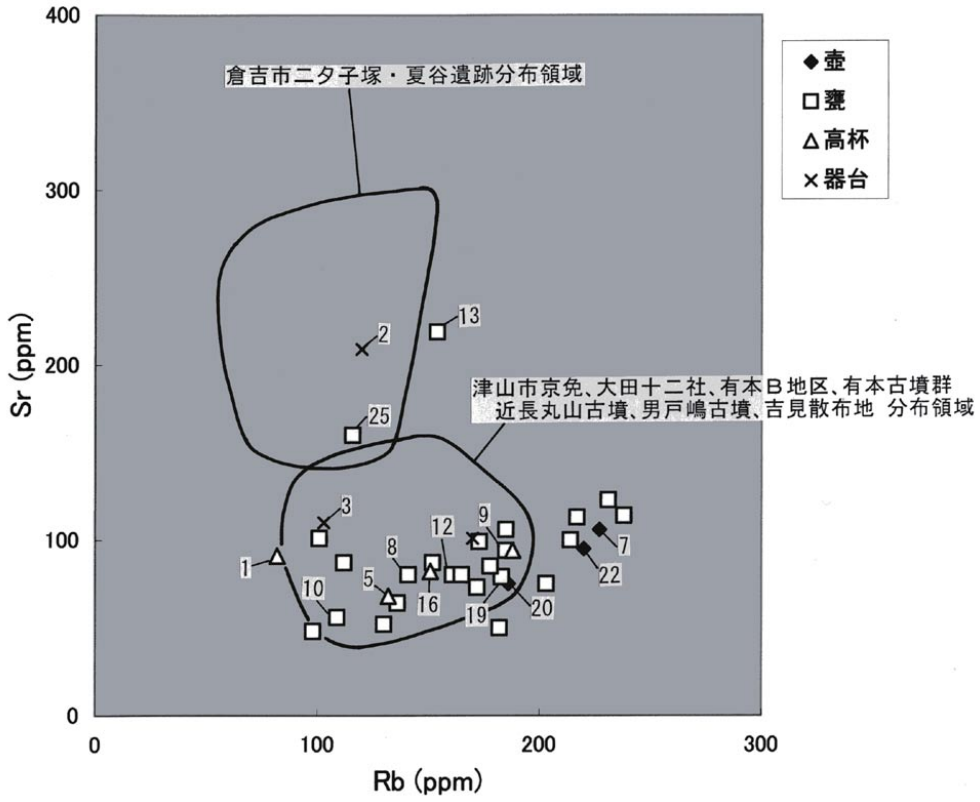
第1表　胎土分析結果一覧表（%）　ただし、Rb,Sr,Zrはppm

試料番号	遺跡名	遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	報告書掲載番号
1	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 1	低脚高杯	66.74	1.23	18.14	7.04	0.06	1.86	0.36	2.79	1.55	0.10	82	91	311	第27図 5
2	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 1	器台	65.45	1.52	20.54	5.99	0.05	1.55	1.02	2.25	1.38	0.07	120	209	328	第27図 6
3	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 1	鼓形器台	68.14	1.03	19.21	5.66	0.03	1.57	0.62	2.34	1.22	0.07	103	110	342	第27図 7
4	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 4		64.83	1.08	20.96	5.58	0.06	1.74	0.60	2.55	2.04	0.42	214	100	331	
5	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 5	高杯	65.84	1.02	20.41	5.43	0.05	1.72	0.28	2.99	1.96	0.11	132	68	359	第27図20
6	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 6		69.31	1.21	17.84	4.88	0.03	1.73	0.46	2.41	1.86	0.11	185	106	276	
7	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 7	壺(ヘラ記号)	66.33	0.91	19.24	6.06	0.04	1.62	0.53	2.52	2.44	0.09	227	106	321	第31図 5
8	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 8	甕	73.01	0.82	13.89	5.20	0.04	1.54	0.41	2.97	1.87	0.14	141	80	292	第29図12
9	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 8	台付甕	63.95	1.38	23.16	4.71	0.03	1.71	0.45	2.30	2.05	0.09	185	94	315	第29図17
10	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 8	甕	78.59	0.93	12.54	2.01	0.03	1.42	0.14	2.18	1.77	0.24	109	56	324	第29図18
11	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 8	甕口縁部	73.23	1.14	16.95	2.06	0.01	1.61	0.20	2.38	2.03	0.21	182	50	305	
12	二宮岡東遺跡	貯蔵穴 9	甕	70.21	0.94	16.68	5.93	0.05	1.52	0.34	2.28	1.60	0.29	161	80	269	第31図 9
13	二宮岡東遺跡	貯蔵穴10		65.37	1.07	19.18	6.02	0.05	1.83	0.97	3.26	1.88	0.14	154	219	279	
14	二宮岡東遺跡	貯蔵穴13		71.62	1.09	17.67	2.55	0.02	1.68	0.28	2.64	1.97	0.29	172	73	289	
15	二宮岡東遺跡	貯蔵穴14		67.12	1.18	18.48	7.51	0.06	1.57	0.44	1.73	1.73	0.05	178	85	302	
16	二宮岡東遺跡	貯蔵穴15	高杯	65.59	1.10	20.88	4.57	0.04	1.67	0.62	2.64	2.12	0.62	151	82	358	第33図13
17	二宮岡東遺跡	貯蔵穴17		63.51	1.07	18.23	10.41	0.07	1.54	0.46	2.26	2.21	0.05	238	114	391	
18	二宮岡東遺跡	貯蔵穴18	高杯	66.54	1.12	19.26	5.63	0.06	1.64	0.63	2.68	2.05	0.23	188	94	352	
19	二宮岡東遺跡	貯蔵穴19	甕	63.75	1.19	23.58	4.30	0.03	1.69	0.35	2.25	2.32	0.37	183	79	267	第37図 7
20	二宮岡東遺跡	貯蔵穴21	壺(スタンプ文)	66.48	1.01	20.05	5.08	0.03	1.57	0.34	2.16	2.49	0.66	186	75	291	第38図 7
21	二宮岡東遺跡	貯蔵穴21	甕	71.94	1.14	16.51	3.74	0.04	1.57	0.41	2.44	1.84	0.18	152	87	314	
22	二宮岡東遺跡	貯蔵穴24	大形壺	67.05	0.82	19.39	5.08	0.09	1.74	0.51	2.59	2.44	0.14	220	95	239	第39図10
23	二宮岡東遺跡	貯蔵穴24		69.12	0.86	14.88	7.40	0.05	1.45	0.45	2.59	2.76	0.26	217	113	354	
24	二宮岡東遺跡	貯蔵穴27		67.99	0.78	17.27	6.43	0.05	1.54	0.66	2.10	2.73	0.30	231	123	307	
25	二宮岡東遺跡	貯蔵穴29		63.35	0.84	20.31	6.92	0.05	1.63	1.08	3.37	2.21	0.11	116	160	424	
26	二宮岡東遺跡	貯蔵穴32		69.46	0.98	17.71	5.25	0.04	1.48	0.50	2.17	2.58	0.26	203	75	295	
27	二宮岡東遺跡	貯蔵穴35		74.26	0.95	13.26	6.29	0.05	1.56	0.17	1.69	1.53	0.10	130	52	286	
28	二宮岡東遺跡	建物 1P2		69.19	0.93	17.49	5.86	0.05	1.52	0.49	1.95	2.08	0.18	101	101	345	
29	二宮岡東遺跡	建物 1P5		68.11	0.94	17.33	6.23	0.06	1.77	0.52	2.68	2.19	0.08	173	99	233	
30	二宮岡東遺跡	竪穴住居 1	甕	71.28	1.05	17.29	3.69	0.03	1.69	0.21	2.71	1.79	0.10	136	64	296	
31	二宮岡東遺跡	竪穴住居 2	甕(複合口縁)	71.11	1.24	17.78	2.88	0.04	1.65	0.47	2.55	2.03	0.10	165	80	356	
32	二宮岡東遺跡	竪穴住居 5中央穴		72.05	1.05	14.08	6.68	0.05	1.45	0.41	2.22	1.79	0.08	112	87	315	
33	二宮岡東遺跡	土坑1		75.61	1.25	14.12	3.69	0.03	1.43	0.27	1.92	1.43	0.12	98	48	307	
34	二宮岡東遺跡	段上遺構 3	器台	68.49	1.07	18.12	4.91	0.06	1.75	0.62	2.36	2.37	0.07	170	101	362	
1	押入兼田遺跡	竪穴住居址 1(東床面)		69.69	1.26	18.24	4.02	0.02	1.71	0.39	2.39	2.01	0.09	162	89	353	
2	押入兼田遺跡	竪穴住居址 1(北西床面)		68.42	1.21	19.28	4.20	0.03	1.65	0.43	2.63	1.87	0.07	142	92	335	
3	押入兼田遺跡	竪穴住居址 1(北西床面)	丹塗り	71.16	0.99	17.64	2.44	0.02	1.49	0.46	2.32	3.28	0.03	216	56	527	

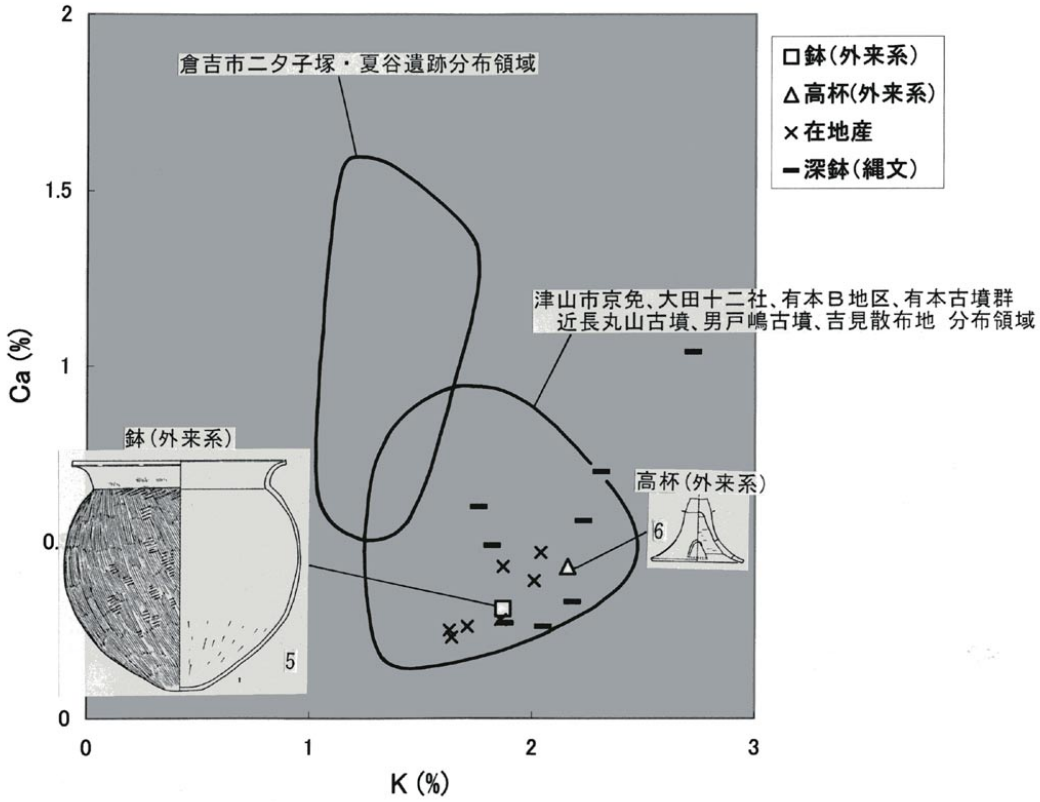
試料番号	遺跡名	遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	報告書掲載番号
4	押入兼田遺跡	竪穴住居址 1		70.88	1.37	17.52	4.36	0.04	1.52	0.23	2.16	1.64	0.14	119	51	383	
5	押入兼田遺跡	竪穴住居址 2	鉢(外来系)	71.75	1.03	15.97	4.83	0.03	1.48	0.31	2.42	1.87	0.11	119	54	301	第12図 1
6	押入兼田遺跡	竪穴住居址 2	高杯(外来系)	66.93	1.25	20.99	3.71	0.03	1.55	0.43	2.70	2.16	0.11	136	76	296	第12図 4
7	押入兼田遺跡	竪穴住居址 2(床面)		69.91	1.05	18.09	3.88	0.02	1.65	0.47	2.68	2.04	0.09	159	95	275	
8	押入兼田遺跡	竪穴住居址 2		71.12	1.11	16.94	5.25	0.03	1.52	0.28	1.67	1.86	0.10	112	65	307	
9	押入兼田遺跡	竪穴住居址 2		71.97	1.06	16.29	5.04	0.03	1.61	0.26	1.81	1.71	0.10	106	60	298	
10	押入兼田遺跡	3号墳周溝内	甕(土師器)	73.58	1.34	15.35	4.36	0.03	1.42	0.25	1.75	1.63	0.16	100	48	382	
1	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	66.64	1.12	22.13	3.08	0.03	1.70	0.27	2.89	1.88	0.09	148	51	328	第5図 1
2	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	71.90	0.87	15.15	4.86	0.06	1.64	0.33	2.72	2.18	0.14	151	60	236	第5図 2
3	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	67.72	1.03	16.94	6.10	0.04	1.64	1.04	2.48	2.72	0.13	197	128	277	第5図 3
4	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	70.78	1.15	17.76	3.94	0.04	1.53	0.49	2.24	1.82	0.09	120	96	301	第6図 5
5	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	73.57	1.26	14.53	4.06	0.04	1.47	0.60	2.41	1.76	0.13	122	123	297	第6図 7
6	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	74.02	0.86	15.87	2.89	0.08	1.70	0.26	1.99	2.05	0.14	164	57	250	第6図 9
7	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	68.97	0.98	18.04	4.69	0.04	1.62	0.70	2.35	2.31	0.14	176	119	295	
8	押入兼田遺跡	縄文土坑	深鉢	71.16	0.94	16.09	4.07	0.04	1.65	0.56	3.06	2.23	0.08	155	108	262	
1	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯蓋	67.99	0.88	17.91	6.12	0.04	1.69	0.28	2.50	2.26	0.15	202	70	265	第47図 1
2	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯身	67.52	0.98	19.27	5.42	0.03	1.78	0.32	2.19	2.15	0.16	189	81	262	第47図 3
3	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯身	67.27	0.32	19.14	5.15	0.02	1.73	0.34	3.15	1.98	0.13	171	81	258	第47図 4
4	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯蓋	66.91	1.08	19.71	5.42	0.03	1.68	0.29	2.48	2.09	0.13	205	61	282	第47図 5
5	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯身	66.79	0.86	18.29	7.06	0.04	1.72	0.24	2.43	2.16	0.12	163	128	282	第47図 7
6	二宮岡東古墳	埋葬施設内	杯蓋	66.21	1.02	19.53	7.13	0.04	1.65	0.21	1.97	1.96	0.12	167	64	301	第47図 8
7	二宮岡東古墳	北斜面	杯	65.29	0.94	20.83	6.27	0.05	1.75	0.37	2.28	1.94	0.11	165	71	293	
8	二宮岡東古墳	北斜面	杯	65.11	0.78	20.87	6.47	0.04	1.85	0.38	2.33	1.91	0.14	142	86	237	
9	二宮岡東古墳	北斜面	甕	67.57	0.87	19.71	4.84	0.04	1.69	0.48	2.77	1.75	0.14	149	94	238	
10	二宮岡東古墳	周溝内	甕	71.23	1.35	19.23	2.99	0.03	1.62	0.23	1.62	1.38	0.13	133	60	406	



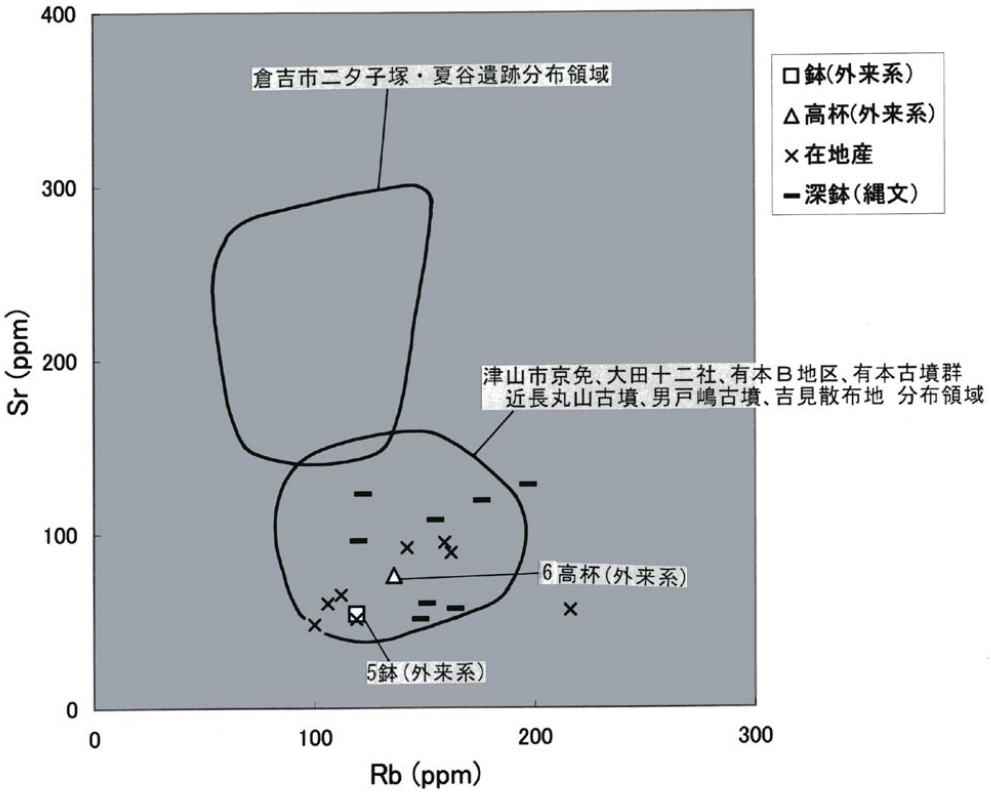
第１図　K-Ca 散布図　二宮岡東遺跡と、津山市内、山陰の弥生土器の比較



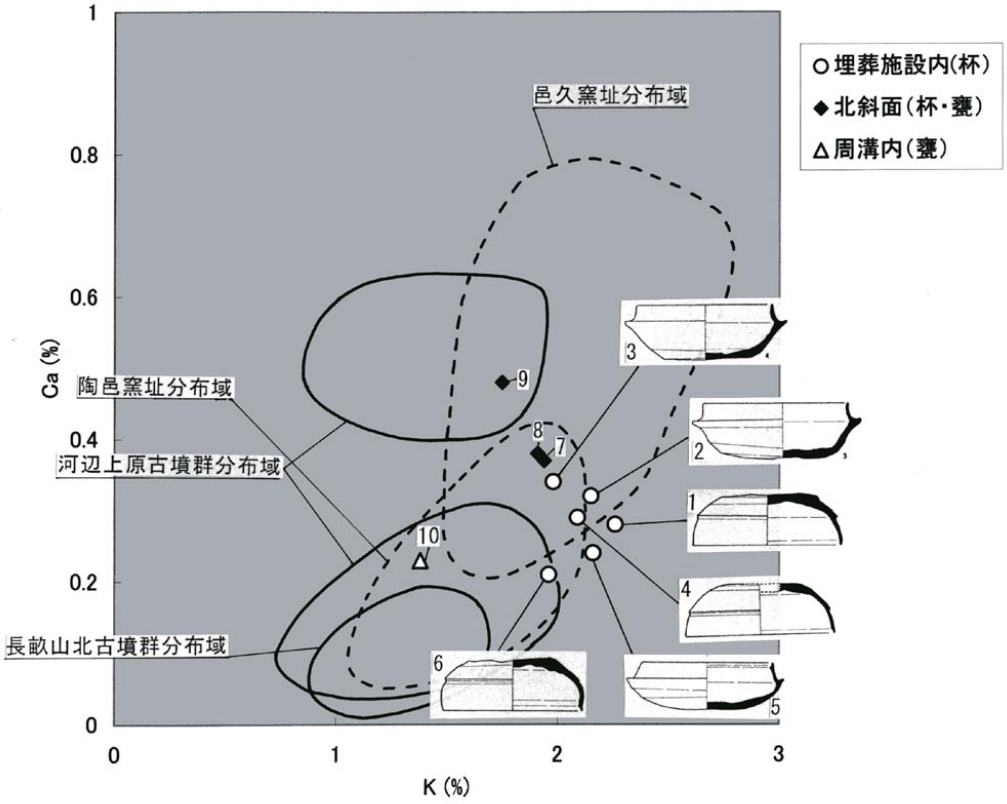
第２図　Rb-Sr 散布図　二宮岡東遺跡と、津山市内、山陰の弥生土器の比較



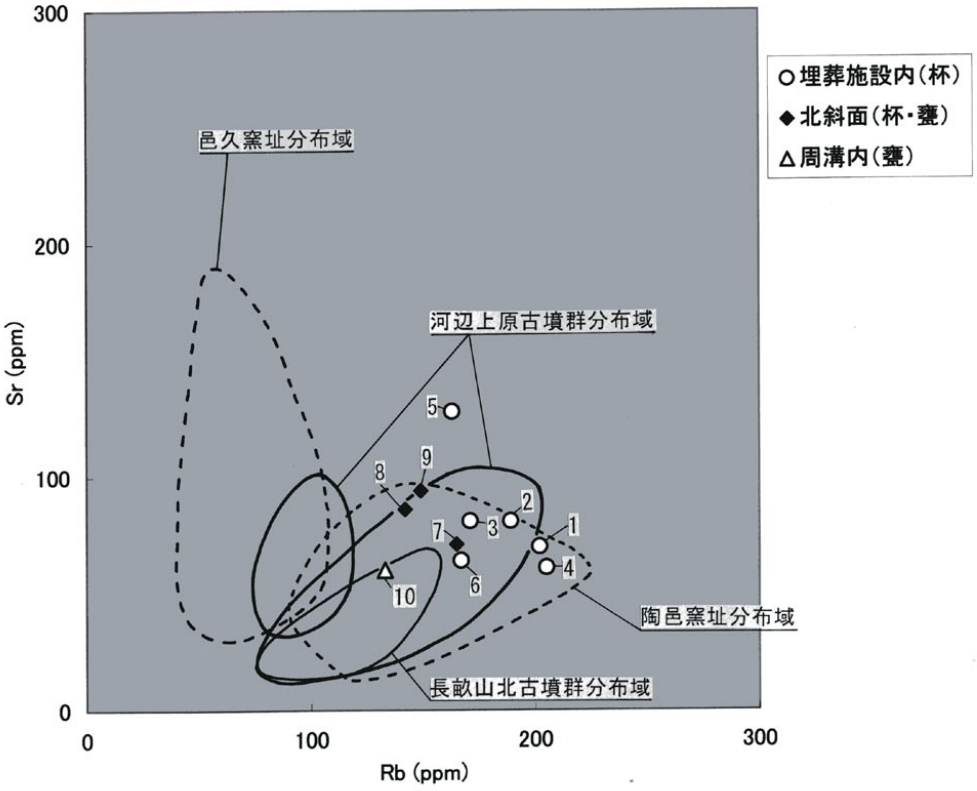
第３図　K-Ca 散布図　押入兼田遺跡と、津山市内、山陰の弥生土器の比較



第４図　Rb-Sr 散布図　押入兼田遺跡と、津山市内、山陰の弥生土器の比較



第５図　K-Ca 散布図　二宮岡東古墳と、津山市内、古墳出土須恵器の比較



第６図　Rb-Sr 散布図　二宮岡東古墳と、津山市内、古墳出土須恵器の比較

（５）民俗資料の製作過程記録　～「雪靴」～

江見祥生

１．はじめに

事業概要で述べたとおり、藁細工の製作技術保存とその過程を記録するために、「雪靴」と「小縄」の製作を行った。本稿では、その中で特に「雪靴」の製作過程について紹介するものである。雪靴の製作は、津山市綾部在住の梶岡貞知氏である。

２．製作の記録

まず、木槌で軽く叩いたモチ藁と、小縄の代わりにシュロ縄を用意する。シュロ縄を使用するのは、藁の白さとの対比が鮮やかで、製作の過程がたどりやすいのと、仕上がりが引き締まって見えるからである。

① 藁縄を自分の足の長さ（腰からかかとまで）の２倍の長さにない、２つ折にする。

② 草履の編みはじめのようにつま先に縄をはさんで、足の大きさの輪を２つ作る

③ 藁を株の方に向かって右の輪に通し、折り返して左側の輪に編みつける。藁の先は長く残る。右は拡大図。

④　別の縄で小さな輪を作り（④-1)、左右の輪の間を通してつま先に掛ける（④-2)。左右の輪の重なる部分（中央の小さな輪になった部分）が膨らまないようにするための処置である。

⑤　③の動作を左右交互に行う。これによって、靴の底が中高になり、なかそ（中央部）が切れないようにすると同時に足を温かく保つ。編み終わったら足先をすぼめて④の輪を外す。

⑤-1　編みはじめ

⑤-2　編み目を見せたところ

⑤-3　編みおわり

⑤-4　④の輪を足から外したところ

⑥　足先を少し広げ、外した後、前端を両手でせばめ、前端を左手で持ち、右手で後端の縄を強く引っ張る。このようにすれば、靴底の藁が厚くなり、壊れにくい。

⑥-1　強く引っ張る

⑥-2　出来上がり

⑦　竹針を使って前端に縄を通し、二重止めにする。底をきれいにして余分の縄を切る。

⑧　底部分の周囲の３倍半位の長さのシュロ縄を２つ折にし、かかとの中央部分に当ててから指３本位の幅で底の周囲を編んでいき、後ろで止める。

⑧-1　編んで後ろへ持ってくる

⑧-2　後ろで最後の藁束を結ぶ

⑧-3　後ろで止める。

⑨　藁で足の甲の部分を編んでいく。

⑨-1　網代編みにする。

⑨-2　編みおわりを藁で仮止めする。

⑩　仮止めを外し、つま先の部分のシュロ縄に竹針で別のシュロ縄を通し、本止めと飾り付けを行う。

⑩-1　つま先の部分

⑩-2　竹針で編む

⑩-3　本止めと飾り付け

⑪　飾り紐を編む。終わりは藁で仮止めし、もう一方も同様にする。仮止めを外し両方の紐を真中で結び、端を止めた後、余りを切り落とす。

⑪-1　飾り紐を編む

⑪-2　外側から底付近の拡大

⑪-3　両方の飾り紐を結んだところ

⑫　⑧と同様にして２段目、３段目をシュロ縄で編む。編み目が重ならないように編んでいく。

⑫-1　２段目

⑫-2　３段目

⑬　４段目を折り返す。その際、次のようにする。まず、藁一つかみをシュロ縄でくくり、次の藁一つかみにシュロ縄を通して前の藁束を立てて折り返し、少しねじってから、シュロ縄を通している藁束と一緒にくくる。

⑬-1　折り返したところ

⑬-2　完成品の拡大図（参考）

⑭　後ろ側で全てのシュロ縄の余りを集めて結び、藁の残りを切り落として体裁を整える。

⑭-1　２段目のシュロ縄の残りと３段目

⑭-2　残余の藁を切る

⑮　完成

印刷仕様

紙　質	表紙　レザッククリーム 175kg
	本文　ニューエイジ 90kg
レイアウト	windows（98）　PageMaker 6.5J
使用フォント	細明朝体、中ゴシック体、太ミン A101、太ゴ B101、じゅん 10
画像原稿	階調画像線数は 175 線

年報
津山弥生の里
第８号（平成 11 年度）
平成 13 年３月 31 日

発行　津山市教育委員会
津山弥生の里文化財センター
〒 708-0824
岡山県津山市沼 600-1
印刷　津山朝日新聞社
岡山県津山市田町 13 番地